狭山市文化財調査報告　第 26 集

狭山市埋蔵文化財調査報告書　15

宮地遺跡　第6次調査

―― 個人専用車庫建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 ――

２００７

埼玉県狭山市教育委員会

狭山市文化財調査報告　第 26 集

狭山市埋蔵文化財調査報告書　15

宮地遺跡（みやちいせき）　第6次調査

―― 個人専用車庫建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 ――

２００７

埼玉県狭山市教育委員会

序

狭山市を貫流する入間川流域には、先人の生活、文化、そして智恵を現在に伝える埋蔵文化財が数多く所在しています。こうした営みの跡は、古くは１万６千年前の先土器時代から近世まで、途中断続しながらも狭山市を含む入間地区の歴史を語り継いでいます。しかし、これら貴重な埋蔵文化財も、当市が都心から40㎞圏内に位置するという地の利から開発が急激に増加し、昭和50年代以降、常に破壊の危機にさらされています。

当市では、開発により消え去る埋蔵文化財を記録保存するため、市内遺跡の発掘調査を行ってまいりました。本書で報告する宮地遺跡は、入間川流域では著名な縄文時代中期及び奈良・平安時代の大規模な集落遺跡で、県選定重要遺跡にも選ばれております。今回報告する第６次調査は、個人用車庫建設に伴い平成13年度に実施したもので、平成４年度に行った第５次調査の隣接地を対象としています。調査面積はわずか101㎡ですが、以前の調査で検出された住居跡の残り部分のほか、新たに２軒の縄文時代中期の住居跡が発見されました。また、多くの縄文土器や石器が出土し、貴重な成果を上げることができました。これらの成果をまとめたものが本書です。

本書が、考古学研究者のみならず市民の皆様の生涯学習に資するとともに、文化財保護の精神を培う一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査期間中そして報告書の刊行にあたり、発掘調査においてご理解をいただいた地権者、酷暑の中、献身的に調査に従事し、報告書刊行までご協力いただいた協力員の方々に厚くお礼申し上げます。

平成19年３月

狭山市教育委員会
教育長　　門倉　節明

例　言

1　本書は、狭山市大字笹井字宮地上所在の宮地遺跡第６次調査の発掘調査報告書である。
2　埼玉県教育委員会への発掘調査通知に係る市町村通知番号と調査原因は、以下のとおりである。
平成13年６月６日付、狭教社発第86号　個人専用車庫建設
3　発掘調査は、狭山市教育委員会が主体となり、平成13年６月18日から平成13年８月15日まで実施した。
4　出土品整理及び報告書作成は、平成17年10月17日から平成19年２月23日まで行った。
5　発掘調査は石塚和則が担当し、伊倉榮男、今井綾子、大石雪枝、岸　幸子、小林はつみ、斎藤通子、坂入　誠、田口文枝、堀内義一、山本とし子、山川淑恵が参加した。
6　出土品の整理と図版作成は石塚が担当し、石塚　香、今井綾子、今坂優代、大石雪枝、岸　幸子、岸千代子、小林はつみ、斎藤通子、瀬戸山真由美、橋本弓子、晝間由美子、山川淑恵の補助を受けた。
7　本書の執筆には石塚があたった。
8　本書の編集は狭山市教育委員会が行った。
9　本報告書に掲載した出土品は、狭山市教育委員会で保管している。
10　発掘調査及び報告書作成にあたり、下記の諸氏、諸機関からご教示、ご協力を賜った。記して厚く感謝の意を表する（敬称略）。
金子直行、熊澤孝之、斎藤祐司、坪田幹男、富元久美子、中島　宏、中平　薫、早川修司、細田　勝、松本尚也、村上達哉、渡辺厚志
埼玉県教育委員会生涯学習文化財課、(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団、飯能市教育委員会、日高市教育委員会、ふじみ野市教育委員会

凡　例

1　遺構図の縮尺は住居跡１／60、同炉跡１／30、土壙１／40、調査区全測図１／200とし、各挿図にスケールを付した。
2　全測図中の略号は、以下のとおりである。
ＳＪ：住居跡　ＳＢ：掘立柱建物跡　ＳＫ：土壙　ＳＵ：単独埋甕
3　遺構番号は昭和46年に実施した第１次調査からの通し番号である。
4　遺構平面図の方位は座標北を、遺構断面図の水糸レベルは海抜標高を示す。
5　遺物実測図の縮尺は土器実測図１／４、文様展開図１／８、土器拓影図１／３、石器実測図２／３、１／３、土製品１／２で、各挿図にはスケールを付した。
6　文様展開図中のスクリーントーンは地文を示す。

目　次

序
例言
凡例
目次
挿図目次
図版目次

Ⅰ　調査の概要 …… 1
1　発掘調査に至る経過 …… 1
2　発掘調査の組織 …… 1
3　発掘調査の経過 …… 2
Ⅱ　遺跡の立地と環境 …… 3
1　遺跡の概観 …… 3
2　歴史的環境 …… 6
Ⅲ　検出遺構と出土遺物 …… 9
1　調査成果の概要 …… 9
2　検出遺構 …… 10
住居跡 …… 10
単独埋甕 …… 16
土　壙 …… 17
3　出土遺物 …… 18
土　器 …… 18
石　器 …… 28
土製品 …… 45
Ⅳ　まとめ …… 46

挿図目次

第１図　狭山市遺跡分布図…… 4
第２図　宮地遺跡第６次調査区位置図…… 7
第３図　宮地遺跡５・６次調査区全測図…… 9
第４図　第81号住居跡…… 11
第５図　第84・88号住居跡（１）…… 13
第６図　第84・88号住居跡（２）…… 14
第７図　第87号住居跡…… 15
第８図　第89号住居跡…… 17
第９図　土　壙…… 18
第10図　第81号住居跡出土土器（１）…… 20
第11図　第81号住居跡出土土器（２）…… 21
第12図　第81号住居跡出土土器（３）…… 23
第13図　第81号住居跡出土土器（４）…… 24
第14図　第84号住居跡出土土器（１）…… 25
第15図　第84号住居跡出土土器（２）…… 27
第16図　第84号住居跡出土土器（３）…… 29
第17図　第84号住居跡出土土器（４）…… 30
第18図　第84号住居跡出土土器（５）…… 32
第19図　第84号住居跡出土土器（６）…… 34
第20図　第84号住居跡出土土器（７）…… 35
第21図　第87号住居跡出土土器…… 37
第22図　第89号住居跡出土土器…… 37
第23図　第81号住居跡出土石器…… 39
第24図　第84号住居跡出土石器（１）…… 41
第25図　第84号住居跡出土石器（２）…… 42
第26図　第87号住居跡出土石器…… 43
第27図　第89号住居跡出土石器…… 43
第28図　第81・84号住居跡出土土製品…… 44
第29図　宮地遺跡第６次調査出土土器集成図… 47
第30図　丸山遺跡第５号住居跡出土土器…… 48
第31図　第84号住居跡土器出土層位概念図…… 50

図版目次

図版１　第81号住居跡全景・同調査風景
図版２　第81号住居跡遺物出土状況・同炉跡
図版３　第84・88号住居跡全景・同調査風景
図版４　第84号住居跡遺物出土状況（１）・（２）
図版５　第84号住居跡遺物出土状況（３）・同炉跡
図版６　第87号住居跡全景・同炉跡
図版７　第89号住居跡全景・同炉跡
図版８　第81号住居跡出土土器（１）
図版９　第81号住居跡出土土器（２）
　　第84号住居跡出土土器（１）
図版10　第84号住居跡出土土器（２）
図版11　第84号住居跡出土土器（３）
　　第３号単独埋甕
図版12　第81号住居跡出土石器
　　第84号住居跡出土石器（１）
図版13　第84号住居跡出土石器（２）
図版14　第87号住居跡出土石器
　　第89号住居跡出土石器
図版15　第81・84号住居跡出土土製品

Ⅰ　調査の概要

1　発掘調査に至る経過

狭山市教育委員会では、昭和58年度以降、民間開発及び個人住宅建設に係る埋蔵文化財確認調査を行い、後者については記録保存を目的とした発掘調査を実施している。これらの調査は通常、農業委員会事務局や建設部建築指導課などの開発行為に関わる部局との連絡、地権者との調整により随時行っている。

平成13年４月、狭山市笹井在住の浅見光男氏より、自宅脇に車庫を設置する旨、連絡があった。浅見氏自宅は平成４年度に実施した第５次調査区内にあり、本調査では縄文時代中期の住居跡８軒、平安時代の掘立柱建物跡４棟が検出されている。その結果から、隣接地には確実に遺構が所在すると判断された。車庫の設置については基礎工事に係る掘削深度が浅いため遺構に影響をあたえないと思われたが、隣接する畑地に耕作土を移動するためローム層直上までの掘削が予定されていた。これにより、現状保存は不可能となり発掘調査実施の対象となった。この点について現地で地権者と協議を行った結果、８月中を目途に終了することを条件に発掘調査実施の承諾を得た。また、県選定重要遺跡内における土木工事の実施については、県文化財保護課に代替地や計画変更の余地がない旨の協議文を提出し、発掘調査実施はやむを得ないとの回答を得た。これを受けて、地権者と日程調整を行い調査は６月中旬に開始することとし、平成13年６月６日付けで埼玉県教育委員会あて発掘調査の通知を提出した。６月11日より表土除去作業を開始し、本調査に入った。

なお、発掘調査実施に係る市町村通知番号は例言に示したとおりである。

遺　跡　名	所　在　地	開　発　者	調査面積	時　　代
宮　地　遺　跡 （県遺跡番号22－018）	埼玉県狭山市大字笹井 字宮地上1677番３	浅見光男	101㎡	縄文時代中期 奈良・平安時代

2　発掘調査の組織

発掘調査（平成13年度）

主体者	狭山市教育委員会	教育長	野村甚三郎
		次　長	濵野良一
担当課	社会教育課	課　長	名雲康仁
		主　幹	岡崎久雄
		主　査	小渕良樹
		主　任	大野美由紀
		主　任	石塚和則
調査担当者			石塚和則

整理・報告書刊行（平成17・18年度）

主体者	狭山市教育委員会	教育長	門倉節明
	生涯学習部	生涯学習部長	岸　一身（平成17年度）
			松本晴夫（平成18年度）

担当課	社会教育課	社会教育課長	仲川和光　（平成17年度）
			利根川忠男（平成18年度）
		主　幹	末吉　隆
		主　査	石塚和則
		主　事	田口　勉
		主　事	安井智幸
整理担当者			石塚和則

3　調査の経過

発掘調査（平成13年度）

平成13年

６月11日（月）～６月13日（水）

調査実施に関する諸手続きを終え、６月11日より表土除去開始。当初より遺構の所在が予想されていたが、耕作土中位で遺物が大量に出土する。表土除去は６月13日に終え、重機を回送する。

６月18日（月）

機材を搬入し、本調査を開始する。テント等の設営に並行して、遺構確認作業を行う。第５次調査で検出された第81・84号住居跡の残り部分の他、新たに１箇所、炉跡が検出される。基準点測量、水準測量及び測量用杭の設置終了。

６月19日（火）～６月28日（木）

第81・84号住居跡を中心に、掘り下げ開始。第81号住居跡は、何箇所かに遺物が集中するが、量はそれほど多くない。第84号住居跡は上層に大形の土器片がまとまるが、覆土中位で遺物量が減少する。上層の土器は、第５次調査で出土したものより新しい。６月28日には第81号住居跡の掘り下げをほぼ終える。第84号住居跡は、床面近くで完形に近い土器が４点ほど出土したが、上層の土器とは明らかに時期が異なる。

６月29日（金）～７月24日（火）

調査区中央、南側に新たに住居跡検出（第87号住居跡）。第81号住居跡掘り下げ終了。壁溝が２条認められ、拡張の可能性が高い。写真撮影を終える。第84号住居跡は床面まで掘り上がる。住居跡南東側に、小型の住居跡が重複していることが判明（第88号住居跡）。遺物出土状況図の作成。７月11日以降、猛暑が続き、半日作業日が多くなったため調査に遅延が生じる。

７月25日（水）～８月３日（金）

第81・84・88号住居跡の遺物取り上げを終える。この間、第87・89号住居跡の掘り下げを終える。８月３日に調査区全面を清掃し、各遺構の個別写真撮影を行う。

８月６日（月）～８月10日（金）

各遺構の平面図作成。第84号住居跡の炉跡と調査区壁のセクション図以外は作業を終える。８月10日、現場の主要機材の撤収。発掘調査協力員は、この日で終了。

８月13日（月）～８月15日（水）

調査区壁セクション図と第84号住居跡炉跡平面図の作成。８月15日、残りの機材を撤収し、現地作業を終える。

Ⅱ　遺跡の立地と環境

１　遺跡の概観

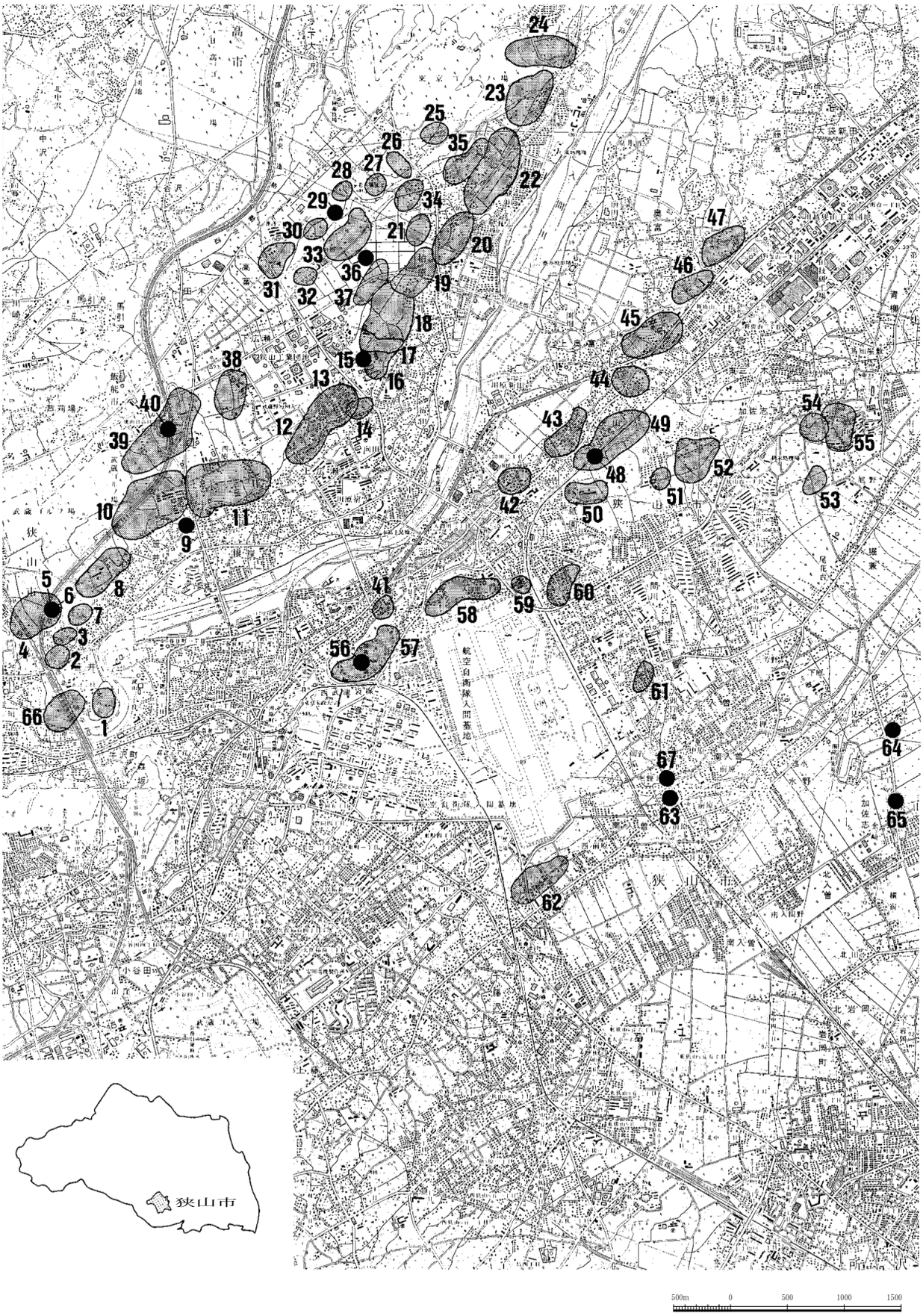
宮地遺跡は、狭山市大字笹井字宮地上地内に所在する縄文時代中期及び奈良・平安時代の集落遺跡で、西武新宿線狭山市駅より西へ約3.9㎞に位置している。遺跡内には、狭山市立笹井小学校が建ち、北側には首都圏中央連絡自動車道が走る。周辺は農業振興区域のため、桑畑等の田園風景が広がる。したがって、昭和40年代以降の急激な都市化は本地域に限っては顕著ではなく、遺跡の保存状態も、牛蒡の作付等の耕作による破壊が認められる程度で比較的良好と言える。本遺跡の南側には、外秩父山地の伊豆ケ岳、武川岳等に水源を有する入間川が北東方向に流れ、川越市付近で現荒川に合流するが、この間武蔵野台地を開折して流域両岸に河岸段丘を形成する。本遺跡立地面は、左岸に形成された３段の段丘面の最上位で標高約81～82m、遺跡南側は段丘崖で下位面との比高差は約12mを測る。

宮地遺跡の発掘調査は、現在までに今回報告分も含めて７回実施されている。ここでは、未報告分も含めて概要を記すこととする。本遺跡の最初の調査は、昭和45年に表面採集のため当地を訪れた高校生によって、偶然発見された敷石住居跡を対象として、翌年２月から３月にかけて行われた。10日余りの調査で、前述の敷石住居跡を含めて３軒の住居跡（加曽利ＥⅢ～後期初頭）が発見されている。報告は、昭和47年に調査担当者である城近憲市氏によってなされた。本市の周辺で当時調査が実施された著名な遺跡としては、所沢市膳棚遺跡、入間市水窪遺跡、坂東山遺跡などがあるが、本遺跡も1970年代初頭の縄文時代集落研究の隆盛の中で、ほぼ完全な敷石住居跡の発見とその詳細な分析により、一躍注目されるに至った。

第２次調査は、昭和56年１月から昭和57年１月にかけて、市立笹井小学校建設に伴い、調査面積11,000㎡、遺跡の主要部分の約1/4を対象として実施された。ただし、校庭部分については緩斜面であるため、盛土を１m以上施すことにより遺構は保存されている。検出された遺構は、縄文時代中期（勝坂期～後期初頭）の住居跡54軒、単独埋甕１基、平安時代の住居跡13軒、集石遺構４基、縄文及び平安時代の土壙200余基である。出土遺物は、縄文土器・石器を中心として膨大な量に及び、約300個体の縄文土器が復元されている。これらの土器群は、勝坂２式から後期初頭に及ぶもので、入間川流域における土器編年の基本資料ともなり得るものである。調査の概要については『狭山市史 原始・古代資料編』等で紹介され、出土遺物の一部は、現在市立博物館や市立笹井小学校で展示に供されているが、残念ながら正式な報告は、諸般の事情から現在に至るまでなされていない。なお、当該調査区と第１次調査区の位置関係から２つの環状集落が結合した双環状集落の存在を想定したのは、第５次調査終了後である。ただし、調査面積の量比は遺跡西側に偏っているため、確信には至っていなかった。

第３・４次調査は、いずれも個人住宅建設に伴って実施された。第３次調査は、昭和57年３月、第２次調査終了直後に実施された。検出された遺構は、縄文時代中期の住居跡４軒、平安時代の住居跡３軒である。第４次調査は昭和59年３月から４月に行われ、縄文時代中期の住居跡１軒が検出された。両調査についても、未報告である。

第５次調査は、平成４年に個人住宅建設に伴って実施された。調査の結果、中期勝坂２式から加曽利ＥⅡ式期の住居跡８軒、単独埋甕１基、奈良・平安時代の住居跡１軒、掘立柱建物跡４棟が検出されている。本調査区は、遺構集中の度合いが強く、双環状集落の接合点に当たるものと考えられた。なお、第５次調査について



第１図　　狭山市遺跡分布図

狭山市内遺跡一覧（括弧内は県遺跡番号）

1　東八木窯跡群（22049）奈・平
2　八木遺跡（22068）縄（前・中)、奈・平
3　八木北遺跡（22021）奈・平
4　八木上遺跡（22022）縄（前・中)、奈・平
5　沢口上古墳群（22020）古（後）
6　笹井古墳群（22019）古（後）
7　沢口遺跡（22080）縄（早～中)、古、奈･平
8　宮地遺跡（22018）縄（中)、奈･平
9　金井遺跡（22071）中
10　金井上遺跡（22023）縄 (草・前)、奈･平、中
11　上広瀬上ノ原遺跡（22005）縄（草)、奈･平
12　霞ヶ丘遺跡（22004）縄（中)、奈･平
13　今宿遺跡（22002）縄（早～中)、奈･平
14　上広瀬古墳群（22001）古（後）
15　森ノ上西遺跡（22079）先
16　森ノ上遺跡（22008）縄（中)、奈･平
17　富士塚遺跡（22009）縄（中)、奈･平
18　鳥ノ上遺跡（22010）奈･平
19　小山ノ上遺跡（22011）縄（中・後)、古～中
20　御所の内遺跡（22012）奈･平
21　英遺跡（22074）奈･平、中
22　城ノ越遺跡（22013）縄 (前・中)、奈･平、中
23　宮ノ越遺跡（22016）縄（前・中)、奈･平
24　字尻遺跡（22075）縄（前～後)、奈･平
25　丸山遺跡（22037）縄（草・前～後)、奈･平
26　金井林遺跡（22035）縄（前～後）
27　鶴田遺跡（22044）縄（前・中）
28　上の原東遺跡（22065）奈･平
29　上の原西遺跡（22063）縄（中）
30　半貫山遺跡（22061）中
31　稲荷山遺跡（22058）縄（後）
32　前山遺跡（22059）縄（中）
33　高根遺跡（22062）縄（早・中・後）
34　町久保遺跡（22034）縄（中)、奈･平、中
35　宮原遺跡（22017）縄（前～後）
36　下双木遺跡（22078）縄（草）
37　上双木遺跡（22077）縄（中・後)、奈･平
38　上広瀬西久保遺跡（22073）奈･平
39　西久保遺跡（22069）先、縄（草)、奈･平
40　東久保遺跡（22070）先
41　上諏訪遺跡（22086）縄（中・後)、
42　滝祇園遺跡（22066）縄 (草～後)、古、奈･平
43　峰遺跡（22024）縄（中・後)、奈･平
44　戸張遺跡（22026）縄（前・中)、奈･平
45　揚櫨木遺跡（22027）縄（前・中)、奈･平
46　坂上遺跡（22029）縄（中)、奈･平
47　稲荷上遺跡（22032）縄（前・中)、奈･平
48　上中原遺跡（22025）先
49　中原遺跡（22025）縄（早～後)、奈･平
50　沢台遺跡（22079）縄（中)、奈･平
51　沢久保遺跡（22041）縄（中）
52　下向沢遺跡（22042）縄（中・後)、奈･平
53　吉原遺跡（22067）縄（前）
54　下向遺跡（22085）縄（前～後）
55　台遺跡（22084）縄（前～後）
56　稲荷山公園古墳群（22052）古（後）
57　稲荷山公園遺跡（22051）縄（中）
58　石無坂遺跡（22083）縄（中)、奈･平
59　富士見西遺跡（22082）縄（中)、奈･平
60　富士見北遺跡（22072）縄（前・中)、奈･平
61　富士見南遺跡（22081）縄（中）
62　町屋道遺跡（22088）縄（前～後)、奈･平
63　七曲井（22046）中
64　堀兼之井（22047）中
65　八軒家の井（22076）中
66　八木前遺跡（22087）縄（前・後）
67　堀難井遺跡（22089）中

は平成９年に報告済みである。

平成16年には特別養護老人ホームの建設に伴う第7次調査が3,700㎡を対象として行われた。検出された遺構は、中期加曽利ＥⅠ式から加曽利ＥⅢ式期に至る住居跡29軒、土壙39基、単独埋甕１基、奈良・平安時代の住居跡2軒、土壙8基、溝1条である。縄文時代の遺構は、調査区北西から南東にかけて弧状に展開しており、この結果により本遺跡の東側環状集落の一端が明らかになったと言えよう。

以上、宮地遺跡の現在までに実施された発掘調査について概要を述べた。今後は、大規模な調査である第２・７次調査の整理作業を進めていく過程で、入間地区を含めた埼玉県西部域での本遺跡の重要度は更に増していくものと考えられる。

２　歴史的環境

宮地遺跡が立地する入間川流域には、両岸に縄文時代遺跡が多数分布している。特に本遺跡が立地する左岸域は日高市、飯能市を流れる南小畔川に展開する遺跡群を含めると高い密度を示している。これらの遺跡形成時期は、現在知られているところでは草創期から後期後半に至るが、その主要時期は前期及び中期中葉から後期前半にかけてである。ここでは、市内に展開する縄文時代遺跡について、近年の成果を含めて概観することとする。

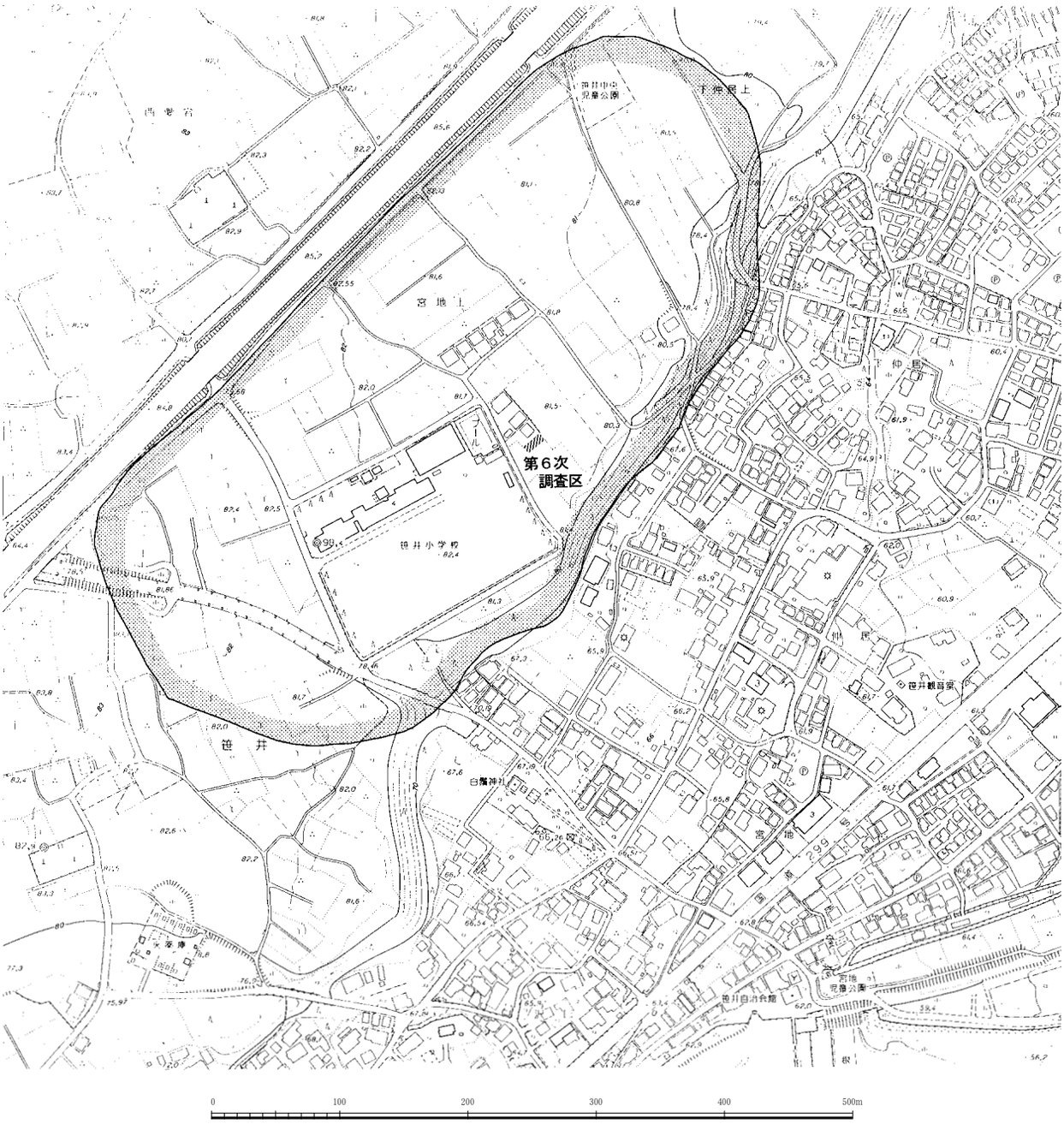
狭山市内には67箇所の遺跡が所在する（第１図）が、その大多数から縄文土器が出土している。特に昭和60年代以降、首都圏中央連絡自動車道（以下、圏央道）関係の調査を含めて、数々の発掘調査が実施され、多くの成果が上げられている。これらの成果の蓄積と継続的に行う分析により、今後市域を含めた本地域の縄文時代における歴史的動態を明らかにしていくこととなろう。ここでは、近年の新知見を含めて概述するとともに、市内の縄文時代遺跡群を俯瞰することにする。

市内における当該時代の遺跡は、大略草創期から後期後半までが確認されている。概観すると、前期黒浜期に集落規模の拡大、遺跡数の急激な増加等、大きな動きが認められるが、前述のように数的には中期中葉から後期前半のものが大勢を占めており、この時期偏差が市内の縄文遺跡を特徴づけている。過去の調査事例もこの時期に集中するが、その前後においても近年の調査で資料的蓄積が若干認められる。

草創期の遺跡としては、入間川左岸の金井上遺跡（10）、西久保遺跡（39）、上広瀬上ノ原遺跡（11）、下双木遺跡（36）、丸山遺跡（25）、右岸では滝祇園遺跡（42）と市内各地で当該期のものと考えられる尖頭器が出土している。今後も単独出土例が増加するものと思われるが、現時点では土器を伴っていないため本期の詳細については不明である。

早期では押型文土器の小破片が高根遺跡（33）で出土している他、隣接する同一水系の日高市向山遺跡では本段階主体の住居跡６軒が検出されている。南小畔川右岸沿いには該期の遺跡が多く分布する見通しがあり、今後の調査進展に期待するものである。早期後半には、市内でも動きが認められるようになる。今宿遺跡（13）では野島式に比定される条痕文系土器を伴う炉穴が確認されている。圏央道関連調査では、西久保遺跡で炉穴が検出された。構造や重複状況から早期のものと考えられるが、具体的時期は不明である。

前期前半では花積下層式が今宿遺跡で、関山式が宮原遺跡（35）で採集されているが、未だ遺構の検出を見ていない。黒浜期には、市内でもまとまった集落調査例がある。昭和56年に調査された入間川右岸の揚櫨木遺跡（45）では、段丘崖に沿って線状に延びる住居跡群が検出されている。本遺跡に近接する稲荷上遺跡（47）でも、平成７年度実施の調査において同時期の遺構が検出され、良好な一括資料を得ている。



第２図　　宮地遺跡第６次調査区位置図

また、左岸では笹井地区に該期遺跡の集中があり、八木前遺跡（66）、八木遺跡（２）、八木上遺跡（４）では、圏央道関連の調査において黒浜期の遺構が調査され、これらを含めれば入間川両岸にわたって広く黒浜期集落が展開していた様相が明らかとなっている。諸磯期以降の遺跡としては、笹井に所在する金井上遺跡（10）、八木上遺跡があり、前者では前期後半の包含層、後者では前期終末期の住居跡が１軒検出されている。該期に遺跡減少、縮小傾向があることは周知であるが、市域においても例外ではない。

中期には表面採集資料も含めてであるが、遺跡数は39箇所と急増し市内遺跡全体の60％を超える。特に中葉からの増加、集落規模の拡大は顕著となる。代表的な遺跡としては、比較的短期間の小規模集落が検出された丸山遺跡、前期から後期後半までの継続が確認されている宮原遺跡が市域東部の柏原に、市西部の笹井に位

置し大規模な集落跡として著名な本遺跡が、いずれも入間川左岸に立地する。近年の調査で集落規模が概ね明確となった稲荷上遺跡（47）は入間川右岸に立地するが、時期的には、右岸域では他に同規模の遺跡は見られず、左岸域に該期の優位性が認められる。これらの遺跡は、時期的には勝坂２式の後半から集落が開始され、中期後半加曽利ＥⅢ式段階まで継続するものが多い。中期末では、入間川左岸において前述の宮地遺跡、柏原地内の森ノ上遺跡（16）、字尻遺跡（24）、右岸では揚櫨木遺跡等、市内各地で継続期間が限定的な小規模な集落跡が確認されており、加曽利ＥⅢ期から後期初頭の柄鏡形住居跡が数軒単位で検出されている。また今宿遺跡では、同時期であるが張り出しを持たないタイプの径３m前後の小型住居跡が確認されている。本タイプの住居跡は、日高市宿東遺跡等でも検出例があり、柄鏡形住居跡との系統性、共存関係等、興味深い問題が提起されている。

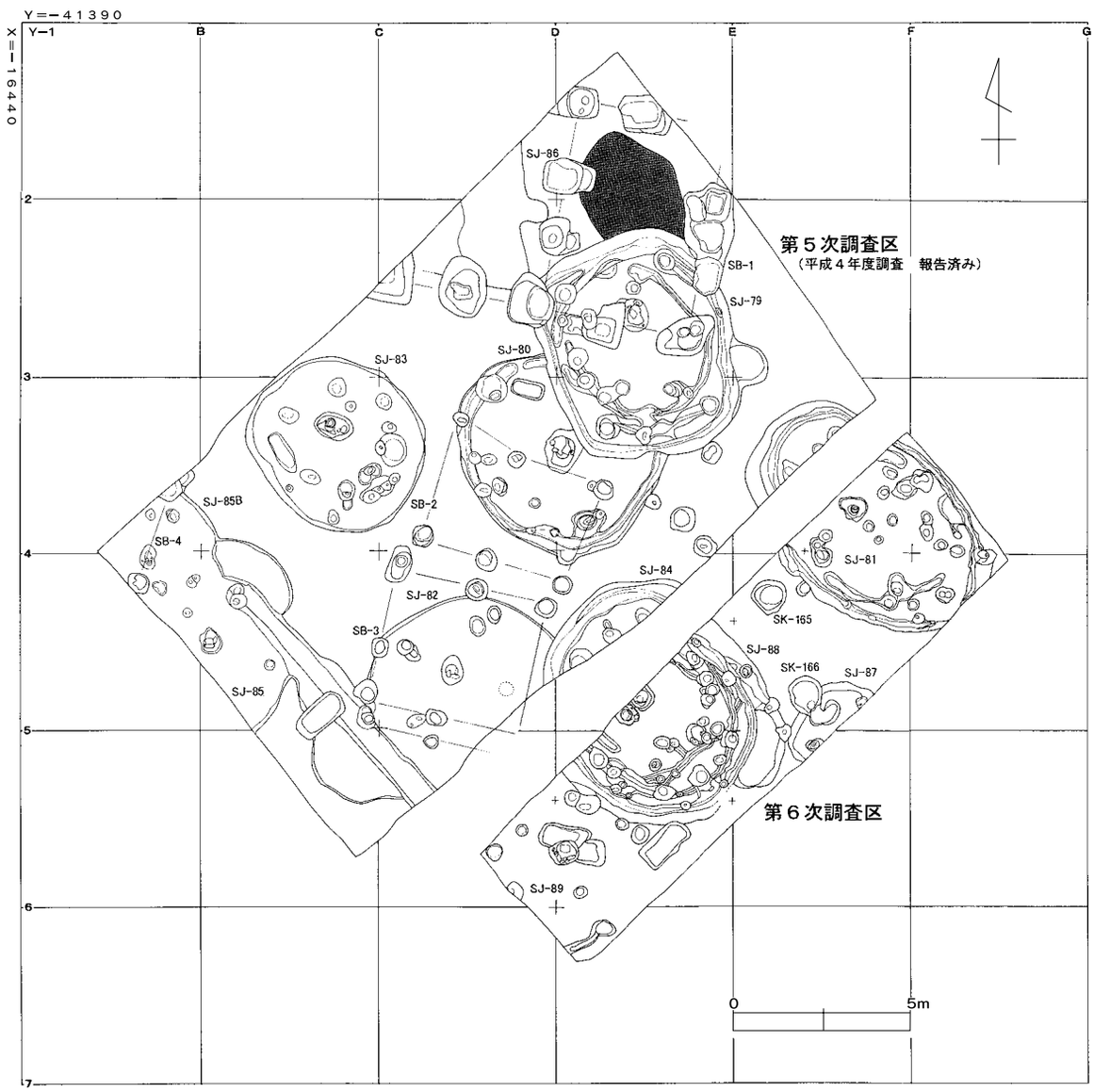
後期の遺跡としては17遺跡が確認されているが、中期末からの遺構減少、遺跡規模の縮小がそのまま継続しているものと言えよう。また、遺跡立地は台地低位に移る傾向が認められる。調査事例は少なく、遺構が検出された遺跡は３遺跡を数えるのみである。市域南部、久保川流域に立地する下向沢遺跡（52）では、昭和26年、入間川町誌編纂事業の一環として調査が実施され、狭山市における発掘調査の嚆矢となっている。『入間川町誌』の記述によれば、縄文時代後期の住居跡1軒、集石土壙1基、土壙1基が検出されている。その後、同遺跡では２回にわたって調査が実施され、中期末から後期初頭にかけての住居跡状の遺構が検出されているが、上層部の撹乱が著しくその様相は不明確となっている。柏原所在の高根遺跡は丸山遺跡と同様、智光山公園に水源を有する小河川に面して立地する。昭和59年度の市立動物園建設に伴う発掘調査では後期前半の住居跡１軒、後期初頭から前半にかけての屋外埋甕５基、土壙多数が検出された。高根遺跡の北東に位置する同水系の宮原遺跡は、前期から後期後半に至る大規模な遺跡である。市域で唯一、加曽利Ｂ式が表採されているため、長らく調査が待たれていた。平成13年、携帯電話中継基地建設を契機として初めての調査が実施された。調査対象となったのは、南側に丸山遺跡を望む遺跡北斜面の一部で、堀之内期の住居跡５軒、屋外埋甕１基、後期前半を主体とする土壙群、後期を主体とする遺物包含層が確認され、少なくとも加曽利Ｂ期まで継続する集落の一端が明らかとなった。遺物の中には注口土器や筒形土偶の顔面部を含み、貴重な成果が得られた。また、本遺跡の南側に接する城ノ越遺跡（22）では、平安時代の遺構覆土からの出土であるが、安行Ⅱ式土器の口縁部破片が確認されており、宮原遺跡が後期末まで継続する可能性を示唆している。しかし、宮原遺跡断絶後、宮地遺跡周辺も含めて、市域から人間活動の痕跡は消え、営為の歴史は古墳時代後期になって、ようやく入間川流域の段丘上に再登場することとなる。

Ⅲ　検出遺構と出土遺物

１　調査成果の概要

今回報告する宮地遺跡第６次調査区は、第２次調査区である狭山市立笹井小学校及び既報告の第５次調査区に隣接する。第５次調査では、既に述べたように、中期勝坂２式から加曽利ＥⅡ式期の住居跡８軒、単独埋甕１基、奈良・平安時代の住居跡１軒、掘立柱建物跡４棟が検出されている。第６次調査では、第５次調査で検出された第81・84号住居跡の残り部分の他、新たに３軒の住居跡、単独埋甕１基、土壙２基が検出された（第３図）。第81・84号住居跡は今回の調査で全体形が確認されたが、第５次調査時に個人住宅の庭とするため土取りが行われなかった部分があり、未調査となってしまったことが悔やまれる。

検出された遺構の時期は、第81・84号住居跡が勝坂式最終末・加曽利ＥⅠ式古段階で、両者からは比較的良好な一括資料を得ることができた。また、第84号住居跡覆土上層からは、加曽利ＥⅠ式土器新段階の土器が出土している。第89号住居跡は炉跡内出土土器から加曽利ＥⅠ式新段階と推定されるが、第87・88号住居



第３図　　宮地遺跡第５・６次調査区全測図

跡は出土土器が各時期混在するため不明である。第３号単独埋甕は第84号住居跡覆土中に埋められており、土器は口縁部を欠損するが、加曽利ＥⅡ式土器と思われる。第165号土壙は奈良・平安時代、第166号土壙は縄文時代中期のものと思われる。

出土遺物はコンテナ６箱であるが、第81・84号住居跡出土土器を中心に29個体の土器が復元された。出土遺物には他に、打製石斧を中心とする石器、土製円盤がある。

なお、本報告の遺構の検出位置等の記述は、第５次調査とあわせて設定したグリッドを基準として行った。また、出土遺物及び遺構の時期の記述は、勝坂式土器は概ね鈴木保彦氏の編年案（鈴木1982）、加曽利Ｅ式土器については谷井彪・細田勝両氏の編年案（谷井・細田1997）に準じた。

２　検出遺構

住居跡

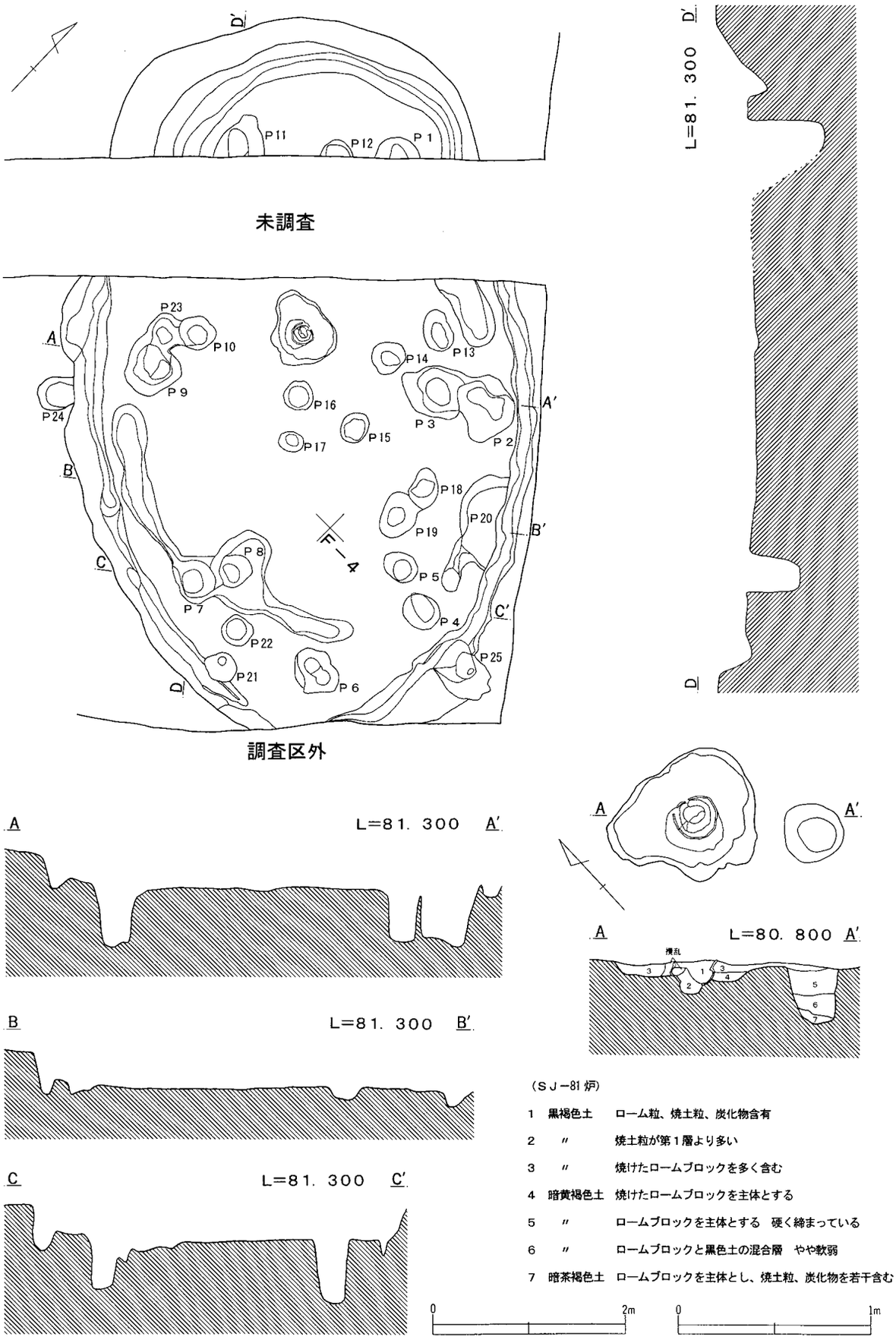
第81号住居跡（第４図）

本住居跡は、調査区の東端で単独で検出された。Ｅ・Ｆ－３・４グリッドに位置する。遺構北側、約１/４は第５次調査区内にある。奈良・平安時代のピットに壁の一部を破壊されているが、遺存状態は良好である。床面の標高は80.7m前後を測る。また、南西約2.5mには第84号住居跡が位置する。

平面プランは、北西方向に長軸を有する長楕円形を呈している。規模は長径推定7.68m、短径4.94m、深さは38cm前後を測る。炉跡の中軸線を主軸とすると、方位はN－42°－Wを指す。遺構内にはもう１条の壁溝が認められ、少なくとも１回の拡張が想定される。旧住居の規模は長径推定6.55m、短径4.32mを測る。内側壁溝は第５次調査区部分と連続しており、壁との距離が開く遺構南東側の長軸方向に大幅な拡張がなされたと考えられる。床面は概ね平坦で炉跡周辺は硬化が著しいが、拡張部分は若干高くなり軟弱であった。ピットは25箇所検出された。内、Ｐ24・25は覆土から奈良・平安時代のピットとした。各々の深さは、Ｐ１＝18cm、Ｐ２＝62cm、Ｐ３＝58cm、Ｐ４＝68cm、Ｐ５＝38cm、Ｐ６＝64cm、Ｐ７＝58cm、Ｐ８＝40cm、Ｐ９＝59cm、Ｐ10＝36cm、Ｐ11＝79cm、Ｐ12＝13cm、Ｐ13＝７cm、Ｐ14＝37cm、Ｐ15＝18cm、Ｐ16＝32cm、Ｐ17＝23cm、Ｐ18＝18cm、Ｐ19＝12cm、Ｐ20＝10cm、Ｐ21＝86cm、Ｐ22＝８cm、Ｐ23＝17cm、Ｐ24＝13cm、Ｐ25＝11cmをそれぞれ測る。これらの内、位置関係と深さから最終的な主柱穴と考えられるのは、Ｐ１、Ｐ２、Ｐ４、Ｐ７、Ｐ９、Ｐ11で、６本柱の配列が想定される。旧住居の主柱穴はＰ２・４・７・９の内側に位置するＰ３・５・８・10と思われる。北側については不明であるが、規模から考えて５本柱の可能性が高い。壁はわずかに外反して立ち上がるが、第５次調査区内の壁は緩やかに傾斜していた。新住居の壁溝は、南側入口部分以外は全周し、幅20cm前後で巡る。旧住居の壁溝は断続的かつ浅く、拡張時に床面を若干掘り下げた可能性を示している。

炉跡は遺構中央やや北寄りに位置する。口縁部の一部と、胴下半部を欠く深鉢を使用した土器埋設炉で、土器口縁部は床面より若干上に突出する。掘り方のプランは不整楕円形で、長径80cm、短径72cm、深さは22cmを測る。埋設土器内側に焼土、炭化物はほとんど認められず土器内面の被熱痕跡も弱いが、土器固定土には焼けたロームブロックを多く含んでいた。なお、本炉跡の位置から考えて、本住居の拡張時に新規の炉設置はなかったものと思われる。

本住居跡出土土器で復元し得たものの多くは第１次埋没層直上から出土しており、特に炉跡付近に遺物のまとまりが認められた。組成は勝坂式最終末を主体とするが、加曽利Ｅ系、曽利系、大木系と多岐に渡っている。


D′
P11
P12
P1
未調査
L=81.300 D′
D
A
A′
B
B′
C
C′
D
P23
P10
P9
P24
P14
P13
P16
P3
P2
P15
P17
P18
P19
P20
P8
F−4
P5
P7
P4
P22
P25
P21
P6
調査区外
A
L=81.300 A′
B
L=81.300 B′
C
L=81.300 C′
A
A′
A
L=80.800 A′
攪乱
(SJ−81 炉)
1 黒褐色土 ローム粒、焼土粒、炭化物含有
2 〃 焼土粒が第1層より多い
3 〃 焼けたロームブロックを多く含む
4 暗黄褐色土 焼けたロームブロックを主体とする
5 〃 ロームブロックを主体とする 硬く締まっている
6 〃 ロームブロックと黒色土の混合層 やや軟弱
7 暗茶褐色土 ロームブロックを主体とし、焼土粒、炭化物を若干含む
0 2m
0 1m

第4図　第81号住居跡

本住居跡の時期は、炉埋設土器及び覆土出土土器から勝坂式最終末（勝坂３ｂ式）・加曽利ＥＩ式古段階と考えられる。

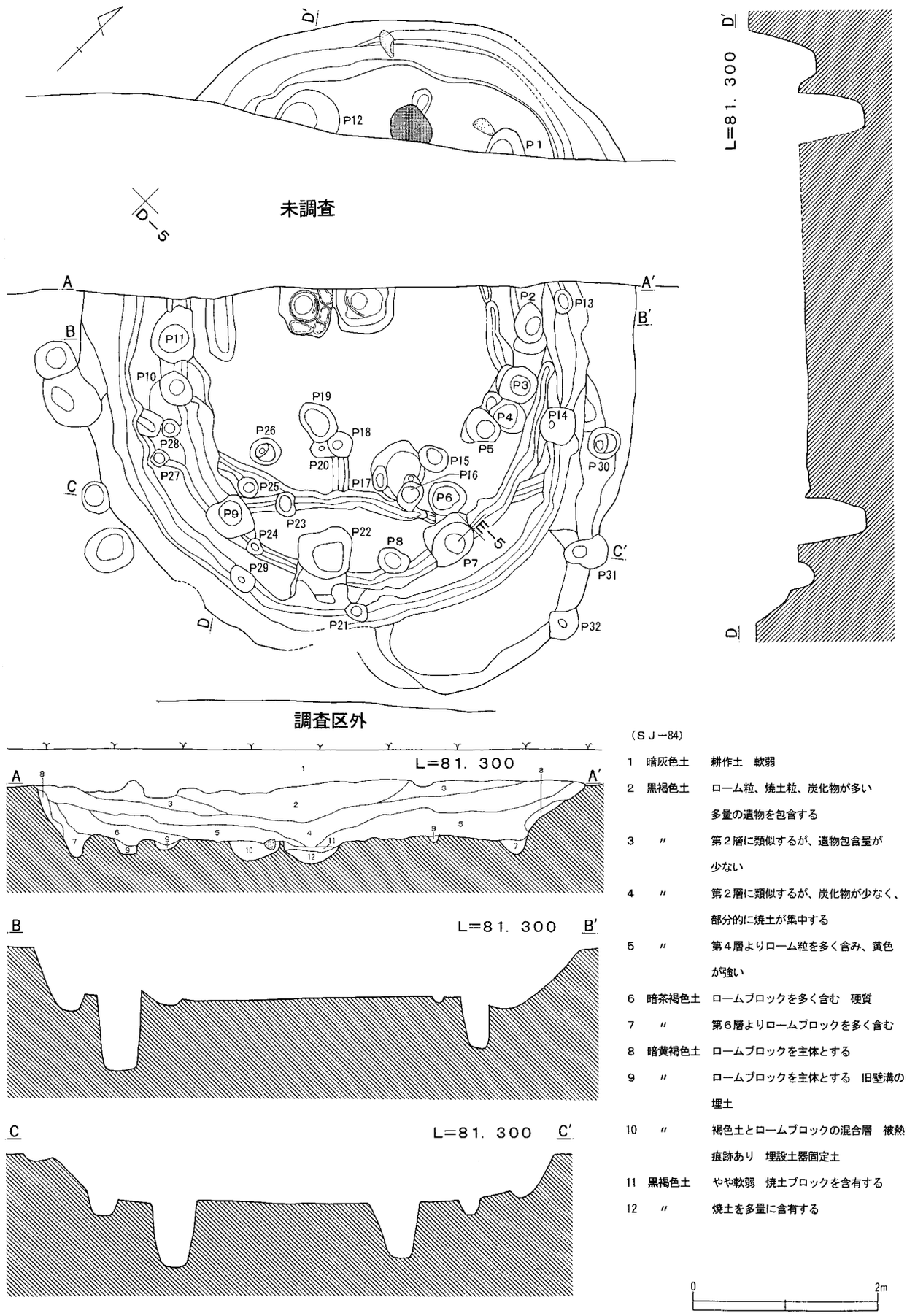
第84号住居跡（第５・６図）

本住居跡は調査区中央で検出され、Ｃ－４、Ｄ－４・５、Ｅ－４・５グリッドにまたがる。今回検出された遺構の中では最も深く、床面の標高は70.6m前後を測る。遺存状態は遺構、遺物ともに極めて良好であった。本遺構の北西側には第82号住居跡（第５次調査区）、南西側に第89号住居跡、東壁側には第88号住居跡が重複している。本住居跡と第88号住居跡の新旧関係は明らかにし得なかったが、調査時の所見では、本住居跡の壁検出時に掘り込みがあることが判明したため、本住居跡の方が後出すると思われる。また、覆土上位、東壁近くに第３号単独埋甕が埋設されていた。

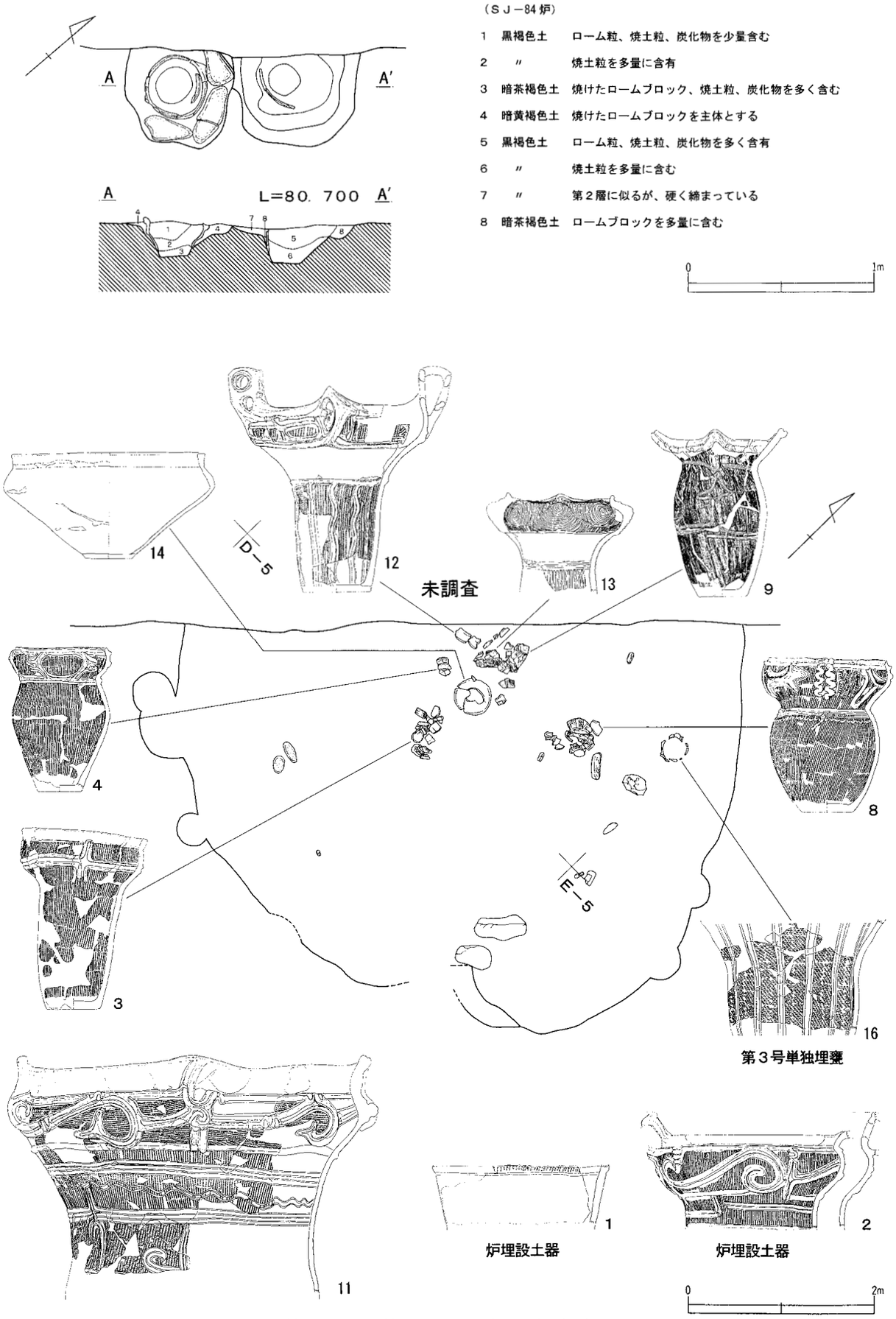
平面プランは比較的整った楕円形を呈する。東側炉跡中央と、入口施設と思われるＰ22を結んだ線を主軸とすれば、方位はＮ－35°－Ｗを指す。壁溝は３条認められ、少なくとも２回の拡張が想定される。遺構北側の壁溝の状態から、南側への段階的な拡張が看取される。最終的な規模は長径6.8m、短径6.15m、深さは遺構中央で75cmを測る。構築当初の遺構規模は、長径5.45m、短径3.35m、最初の拡張時が長径6.3m、短径4.34mと考えられる。また、最後の壁溝に比して内側の壁溝は浅く、拡張時に掘り下げられた可能性が高い。床面は、概ね平坦で堅緻である。ピットは遺構内で29箇所検出された。それぞれの深さはＰ１＝55cm、Ｐ２＝57cm、Ｐ３＝66cm、Ｐ４＝48cm、Ｐ５＝69cm、Ｐ６＝53cm、Ｐ７＝112cm、Ｐ８＝54cm、Ｐ９＝75cm、Ｐ10＝66cm、Ｐ11＝54cm、Ｐ12＝75cm、Ｐ13＝24cm、Ｐ14＝37cm、Ｐ15＝37cm、Ｐ16＝37cm、Ｐ17＝16cm、Ｐ18＝33cm、Ｐ19＝51cm、Ｐ20＝24cm、Ｐ21＝23cm、Ｐ22＝15cm、Ｐ23＝22cm、Ｐ24＝36cm、Ｐ25＝12cm、Ｐ26＝38cm、Ｐ27＝26cm、Ｐ28＝14cm、Ｐ29＝24cmを測る。主柱穴配置は、最終的にはＰ１、Ｐ３、Ｐ７、Ｐ９、Ｐ11、Ｐ12で、６本柱の配置が考えられるが、構築当初及び初回拡張時の配置については未調査区域を多く残してしまったため断定はできない。なお、調査時の所見では、Ｐ２、Ｐ15、Ｐ26はロームブロックを充填して埋め立てられていたため、これらが位置、深さから考えて本住居跡構築当初の主柱穴の可能性が高い。その場合、遺構規模から５本主柱と考えるのが妥当であろう。

炉跡は遺構中央やや北寄りから２箇所検出されており、東側が旧炉、西側が新炉である。両者とも北側の一部が調査区外にある。旧炉は、深鉢胴下半部を使用した土器埋設炉と思われる。埋設土器は全体の１/３を残し、他は抜き取られたものと考えられる。土器周辺の掘り方から、縁石があった可能性がある。掘り方は検出部分で隅丸長方形を呈し、規模は東西径56cm、床面からの深さは21cmを測る。南北径は不明である。覆土は下位で焼土を多く含んでいた。使用した土器は勝坂式最終末の所産で、内面は被熱痕跡が顕著である。新炉は、加曽利ＥＩ式古段階の深鉢口頸部を使用した土器埋設石囲炉である。位置が住居主軸から外れるが、残存状況から遺構最終段階の炉と判断した。掘り方上面のプランは、検出部分では不整楕円形を呈している。旧炉に同じく南北径は不明、東西径55cm、深さ22cmを測る。土器埋設部分の掘り方は土器形状に合わせて掘られており、土器周囲の縁石は自然石を未加工で、土器に密接して設置されている。土器内覆土は中位以下に焼土、炭化物が顕著であったが、土器内面の被熱痕跡はあまり認められない。

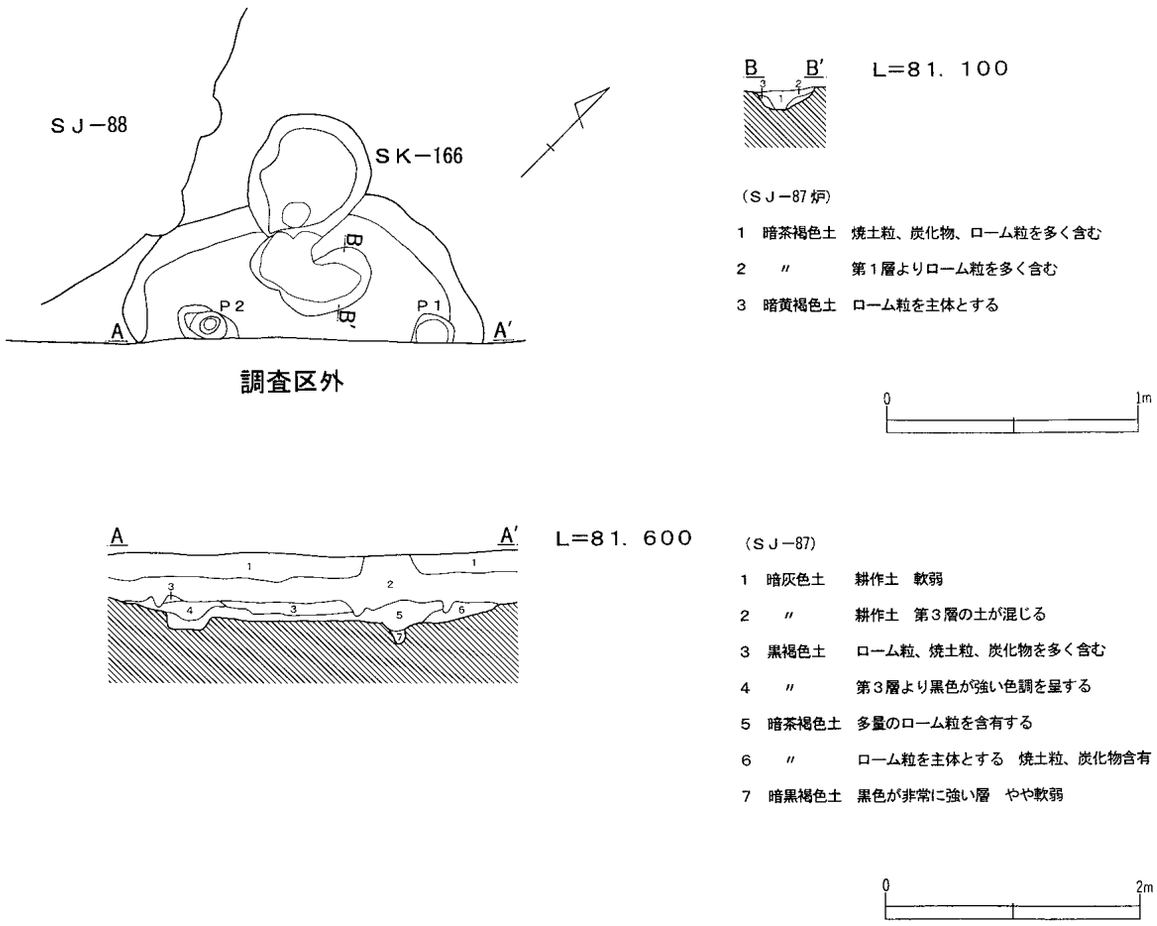
本遺構の覆土は全体的に黒色の強い色調を呈していた。遺物は、遺構中央上位の第２層中と下位に広がる第４層中及び第５層直上に別個のまとまりが見られた（第６図）。11～13は第２層中出土、３・４・８・９・14は第４層出土土器で、両者には、11を除けば明確な時間差が看取される（遺物番号は第14～18図に準ずる）。11～13は破片が折り重なるようにして出土しているうえ、11は多くの破片が脆く、焼成時の失敗により廃棄



第5図　第84・88号住居跡（1）



第６図　　第84・88号住居跡（２）



第７図　　第87号住居跡

されたような様相を呈していた。11は、時間的に12・13よりむしろ第４層出土土器群に近いと考えられるため、出土状況と本住居の埋没過程について、類似事例との比較検討が必要となろう。なお、第４層中の土器群のうち８・９・14は、その破損状況から投棄されたというより、置かれた後に土圧で潰れたような出土状況を呈していた。これらの所見から、本事例は土器廃棄、住居埋没過程について非常に興味深いものと言えよう。

本住居跡は、新炉埋設土器と覆土出土土器から勝坂式最終末（勝坂３ｂ式)・加曽利ＥＩ式古段階と思われる。

第87号住居跡（第７図）

本住居跡はＥ－４・５グリッドで検出された。遺構東側の大部分は調査区外にあり、全体形、規模等は不明である。北壁には第166号土壙が重複し、検出状況から本住居跡に後出するものと判断した。

平面プランは、検出部分では概ねやや不整な円形を呈している。東西幅2.5m、深さ15cm前後を測る。主軸方位は、仮に検出部分の中央と考えればＮ－43°－Ｗを示している。床面は軟弱で、やや凹凸が目立つ。壁は緩やかに傾斜しており、全体の断面形は鍋底状を呈する。ピットは２箇所検出された。深さは、床面よりＰ１＝20cm、Ｐ２＝33cmを測る。Ｐ２は、その深度から主柱穴の可能性がある。

炉跡は北壁付近に位置し、第166号土壙に隣接している。位置的に無理があるが、覆土上層で多量の焼土、炭化物が認められたため炉跡と認定した。形式的には、床面を掘り窪めて構築した地床炉である。ただし、炉底部の被熱は顕著ではない。平面形は東西に長い不整楕円形で、断面形は鍋底状を呈している。規模は、長径102cm、短径75cm、深さ20cmを測る。

覆土は５層に分かれるが、第４層を除いて全体に黄色が強い色調を呈する。

本住居跡の出土遺物は少なく、時期を決定し得る資料を欠く。ただし、加曽利ＥⅡ式以降の土器片が比較的多く出土しているため、当該時期の可能性もある。

第88号住居跡（第５図）

本住居跡は、調査区中央で検出された第84号住居跡の南東壁に重複する。大部分は当該住居跡に破壊されており、東及び南壁と床面の一部が確認されたのみである。Ｅ－４・５グリッドに位置している。

大部分が破壊されているため、規模、主軸方位などは不明であるが、平面形は残存部分から比較的小規模な不整楕円形を呈するものと推定される。遺構確認面からの深さは、第84号住居跡より若干浅く、50cm前後を測る。床面は比較的軟弱であった。ピットは床面残部分からは検出されていないが、第84号住居跡南西側のピット群の一部が本住居跡に帰属する可能性がある。炉跡及び壁溝も確認されなかった。

本住居跡は第84号住居跡と並行して掘り進めたため、遺物の分離ができなかった。したがって、遺構の時期は不明であるが、第84号住居跡と同時期かそれ以前の所産と言えよう。

第89号住居跡（第８図）

本住居跡は、調査区の南西端で表土除去時に炉縁石の露頭によって確認された。遺構東側に第84号住居跡が重複し、北側は調査区外にある。Ｃ・Ｄ－５・６グリッドに位置する。床面は攪乱によって破壊されている。また、壁も一部残っていた壁溝で確認された部分以外は残存しない。

平面形及び規模は不明であるが、柱穴の分布状況から不整円形を呈し、北側及び西側の一部は未調査区に張り出していると思われる。炉縁石から主軸を想定すると、方位はＮ－25°－Ｗを指している。明確な床面は、炉跡周辺も含めて確認できなかった。ピットは９箇所検出された。床面からの深さは、Ｐ１＝62cm、Ｐ２＝37cm、Ｐ３＝６cm、Ｐ４＝125cm、Ｐ５＝13cm、Ｐ６＝14ｃｍ、Ｐ７＝27cm、Ｐ８＝10ｃｍ、Ｐ９＝９cmをそれぞれ測る。深度から、主柱穴と考えられるのはＰ１のみである。壁溝は南側で一部検出され、幅20cm前後で深さ９cmを測る。

炉跡は遺構中央に位置すると思われる。大形の川原石を使用した石囲炉で、炉縁西側と南側に縁石が残存する。北及び東側は攪乱によって抜かれたと考えられる。掘り方のプランはやや整形な隅丸方形を呈している。規模は南北径65cm、東西径89cm、深さは42cmを測る。最下層は被熱ロームの層で、直上の第４層に焼土が顕著であった。炉縁石は被熱により赤色に変色し、亀裂が多く入っている。

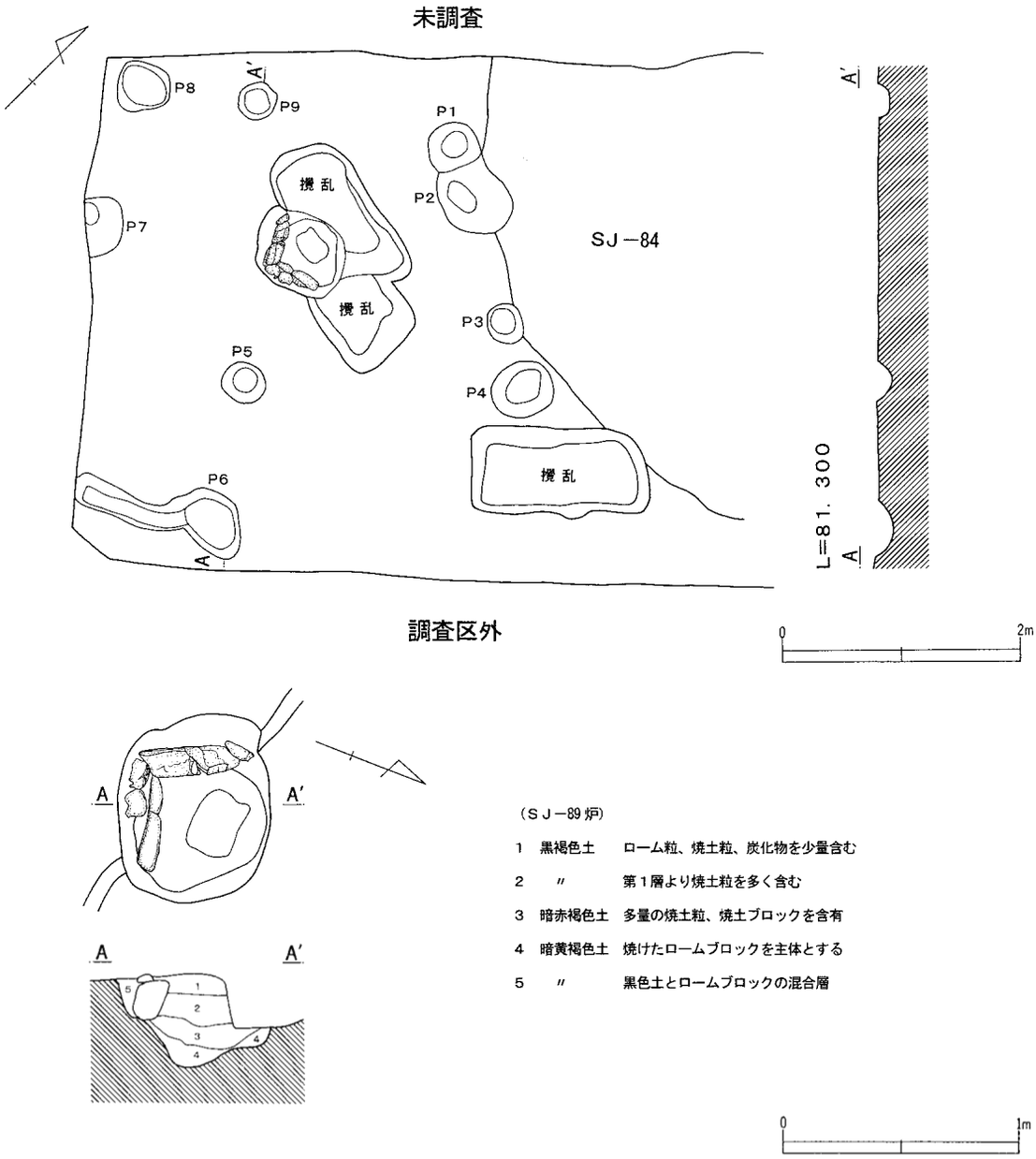
本住居跡は覆土がないため出土遺物は僅少で、時期決定資料を欠く。ただし、炉跡内及びピット内から出土した土器は加曽利Ｅ新～加曽利ＥⅡ式土器が主体を占める。また、炉が大形縁石を持つ石囲炉であることから、重複する第84号住居跡と同時期か後出するものと思われる。

単独埋甕

第３号単独埋甕（第6図）

第84号住居跡覆土上層に埋設されていたもので、同遺構確認時に既に認識されていた。Ｄ・Ｅ－４グリッドに位置している。

埋設されていた土器は、深鉢の口縁部及び胴下半部を欠いたもので、時期は加曽利ＥⅢ式古段階と考えられる。埋設時の掘り方の平面形、規模等の詳細は不明である。



第８図　　第89号住居跡

土　壙

第165号土壙（第９図１）

本土壙は、Ｅ－４グリッドで検出された。第81号住居跡西側に位置している。

平面形は不整円形を呈し、南西壁が直線的になっている。南北径0.92m、東西径0.96m、確認面からの深さは22cmを測る。断面形は鍋底状で、壁は緩やかに傾斜している。壙底は段差がつき、一部テラス状を呈する。

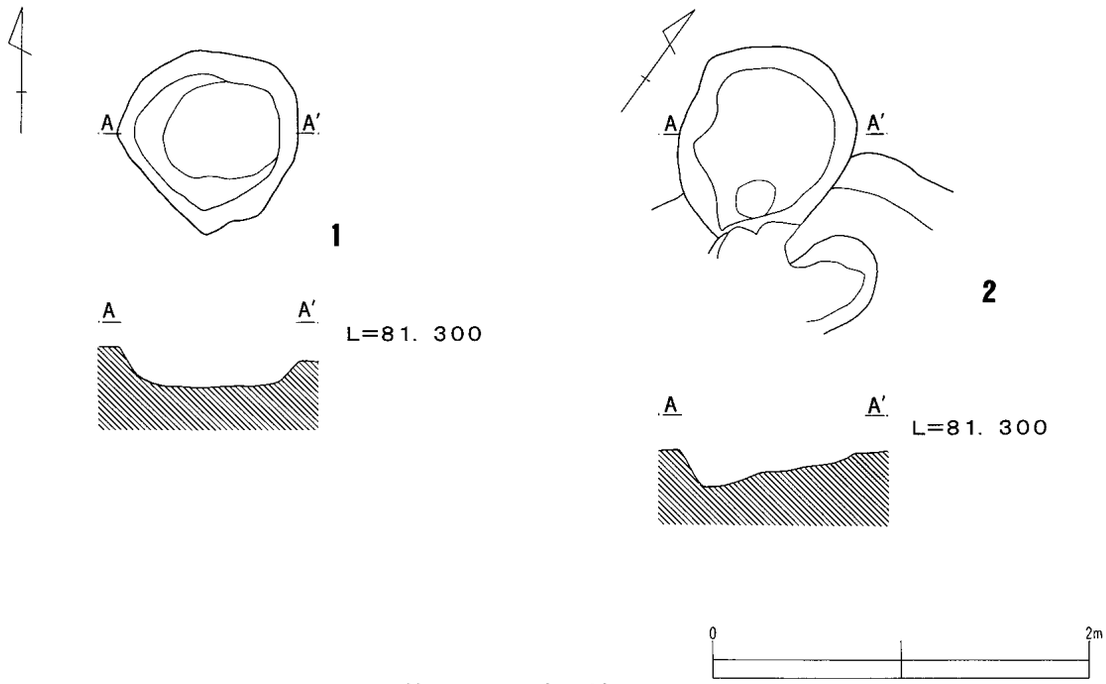
覆土は黒色土の単純層で、炭化物、焼土を若干含む。出土遺物は縄文土器の細片のみである。

本土壙は時期決定資料を欠くが、覆土の色調から奈良・平安時代のものと思われる。

第166号土壙（第９図２）

本土壙はＥ－４グリッドに位置し、第87号住居跡北壁に重複している。

平面形は南北方向に長軸を有するやや不整な楕円形を呈し、南壁の一部が第87号住居跡炉跡にかかる。南



第９図　　土　壙

北径1.12m、東西径0.94m、確認面からの深さは22cmを測る。壙底は概ね平坦であるが、西側に傾斜している。

覆土は茶褐色土の単純層で、第84号住居跡側は焼土を多く含有する。出土遺物は縄文土器の細片のみである。

本土壙は明確な時期決定資料を欠くが、縄文時代中期の所産と考えられる。

３　出土遺物

土　器

第81号住居跡出土土器（第10～13図）

本住居跡の出土土器は比較的多く、図化し得たものは炉埋設土器を含めて13個体である。いずれも、勝坂式最終末（３ｂ式）段階・加曽利ＥⅠ式古段階に比定できよう。

１は炉埋設土器で、球状の口頸部が特徴的である。口縁形状は一対の波頂部を推定４単位配する波状口縁で、幅広の無文帯である。強く外傾する。口唇部内側は断面角状の稜を持つ。無文帯直下に幅広の浅い沈線を巡らし、口頸部文様帯と区分する。口頸部文様は中位に連鎖状隆帯を巡らすシンプルなもので、面取りしたような丁寧な作りで13単位配している。各連鎖接合部には刻目、隆帯上には沈線を引く。地文は単節ＲＬの斜位施文で、連鎖状隆帯貼付け後に施し一部隆帯にかかる。口頸部上位には施されず、口縁部無文帯とともに丁寧なナデがなされている。器形、器面構成は中峠式の類型に類似するもので、連鎖状隆帯の置かれた部位も口頸部中位から上半部に文様を展開する同類型群に特徴的である。文様作出技法は勝坂式の作法を踏襲しているが、転換期における外圧を象徴する土器と言えよう。残存率は図化部分で、約80％である。現存高17.2cm、口径22.0cm、器厚0.8～1.1cmを測る。内面に被熱による荒れが認められるが、焼成は良好である。

２は勝坂式最終末の円筒形土器である。口縁部は推定２単位の突起を置く幅広の無文帯で、緩く外反する。口唇部内面には稜を有し、成形時の輪積痕を外面に残している。胴部上半部に、上端を沈線、下端を隆帯で区画した縦位区画文類似文様を展開する。文様は突起より垂下する隆帯により２分割し、間に枠状区画、斜行隆

帯による三角区画等を配する。主文様を形成する隆帯上には粗い刻目、隆帯脇には沈線を施している。また、縦位隆帯下端は瘤状を呈するものがある。区画内は集合沈線、線状三叉文を描いているが、いずれも粗い。無文区画も認められ、区画充填手法としては末期的なものと言えよう。胴部下半部は地文撚糸Ｌを縦位に施している。全体の約50％が残存する。器高31.6cm、口径推定21.0cm、器厚1.0～2.1cmを測る。焼成良好。

３も勝坂式最終末の円筒形土器であるが、２より粗い作りである。上下で径の増減が極めて少ない。口縁部は直立する幅狭の無文帯で、主文様隆帯から立ち上がる小突起を２箇所に配する。小突起の片方は、簡略化した蛇体文である。文様帯は縦位区画文に類似し、胴部上半部に展開する。小突起に連結する縦位隆帯で２分割し、小突起間に各々３単位の区画文を太い隆帯で作出している。隆帯上には背割沈線、綾杉文、交互刺突文、粗い刻目が付される。背割沈線が施された部位は連鎖状を呈している。区画隆帯脇には沈線を引き、区画内は２と同様、粗い充填文を施すか、空白となっている。充填文には集合沈線、三本指状沈線が見られる。文様帯下端は明確な区画文が無く、文様区画隆帯下端も地文部に吸収される。胴下半部には地文０段多条の単節ＲＬを斜位に施文している。残存率は、図化部分で約70％。現存高31.7cm、口径推定17.7cm、器厚1.0～1.4cmを測る。焼成は不良で、文様及び器面に剥離が認められる。

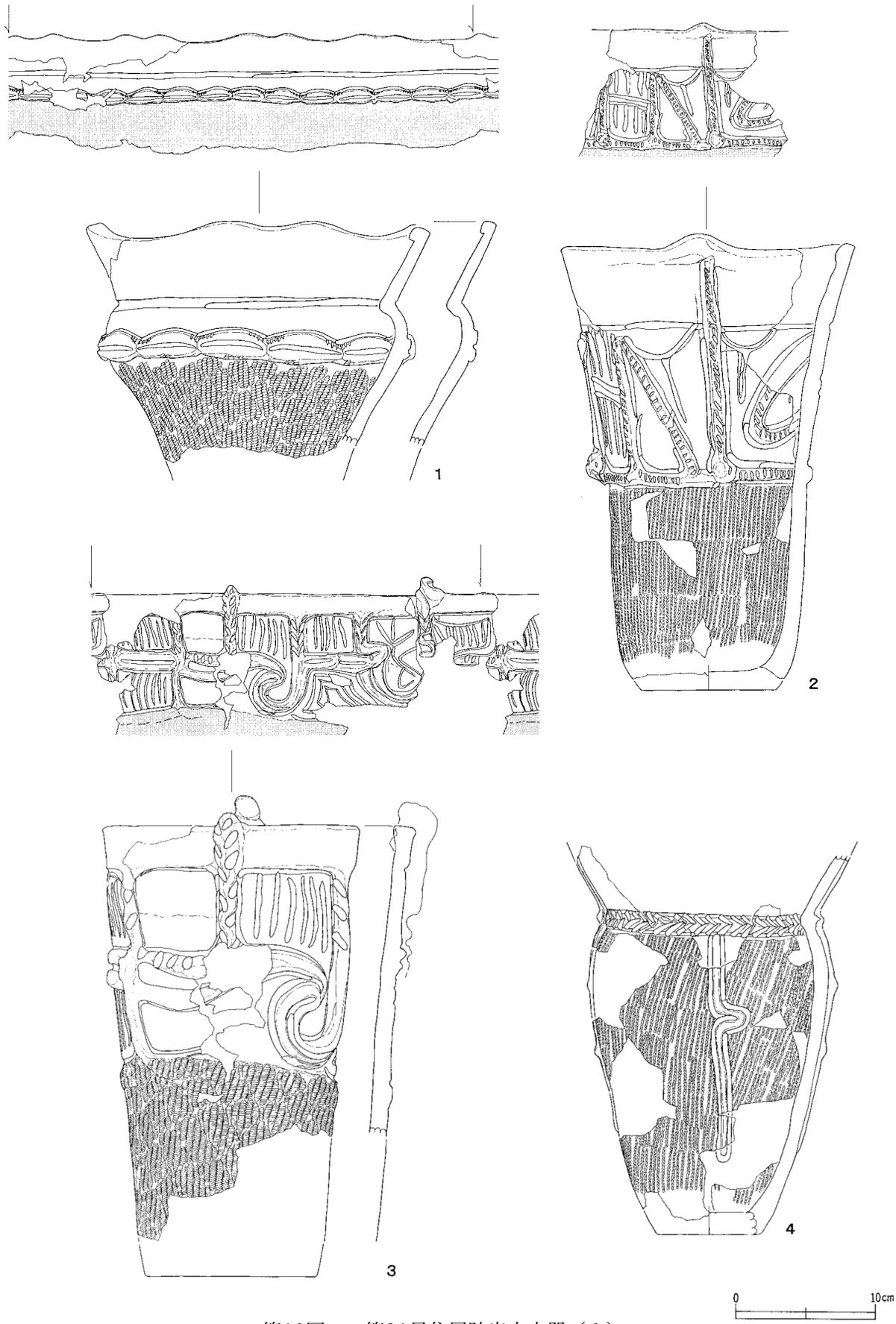
４は無文の口縁部を持つ甕形の土器である。勝坂式最終末のものと思われる。口縁部から頸部の大半は欠損するため詳細は不明であるが、胴部に置かれる懸垂文の内、２単位は口縁部まで伸びる。口縁部無文帯と胴部は、頸部の粗い綾杉文で分割している。胴部の懸垂文は４単位垂下する。縦位の連鎖状文と、棘状の屈曲を持つ隆帯を交互に配する。連鎖状文は隆帯脇に沈線を伴わない。地文は撚糸Ｒで縦位、斜位施文している。現存高27.7cm、底径推定7.2cm、器厚0.7～1.6cmを測る。図化部分で40％残存。焼成良好。

５・６は加曽利ＥⅠ式古段階の土器であるが、系統を異にする。５は、幅の狭い無文口唇部が直立する小型のキャリパー形土器である。口頸部は球状に膨らみ頸部区画隆帯以下は徐々に径を減じる。口縁部文様帯は幅広で、上下を隆帯で分割する。残存部分には隆帯による横Ｓ字文とクランク文が見られるが、全体の単位数は不明である。両者とも上位区画隆帯に接合させ、区画文状を呈している。基本は２本組み隆帯であるが、一部１本になる箇所がある。横Ｓ字文は先端が突起となり、孔を開ける。隆帯脇には明確な沈線を引く。また、隆帯接合部には交互刺突文を付す。地文は撚糸Ｌで、隆帯貼付前に縦位に施文している。現存高17.8cm、口径推定15.6cm、器厚0.5～0.9cmを測る。焼成良好。図化部分の約40％残存。

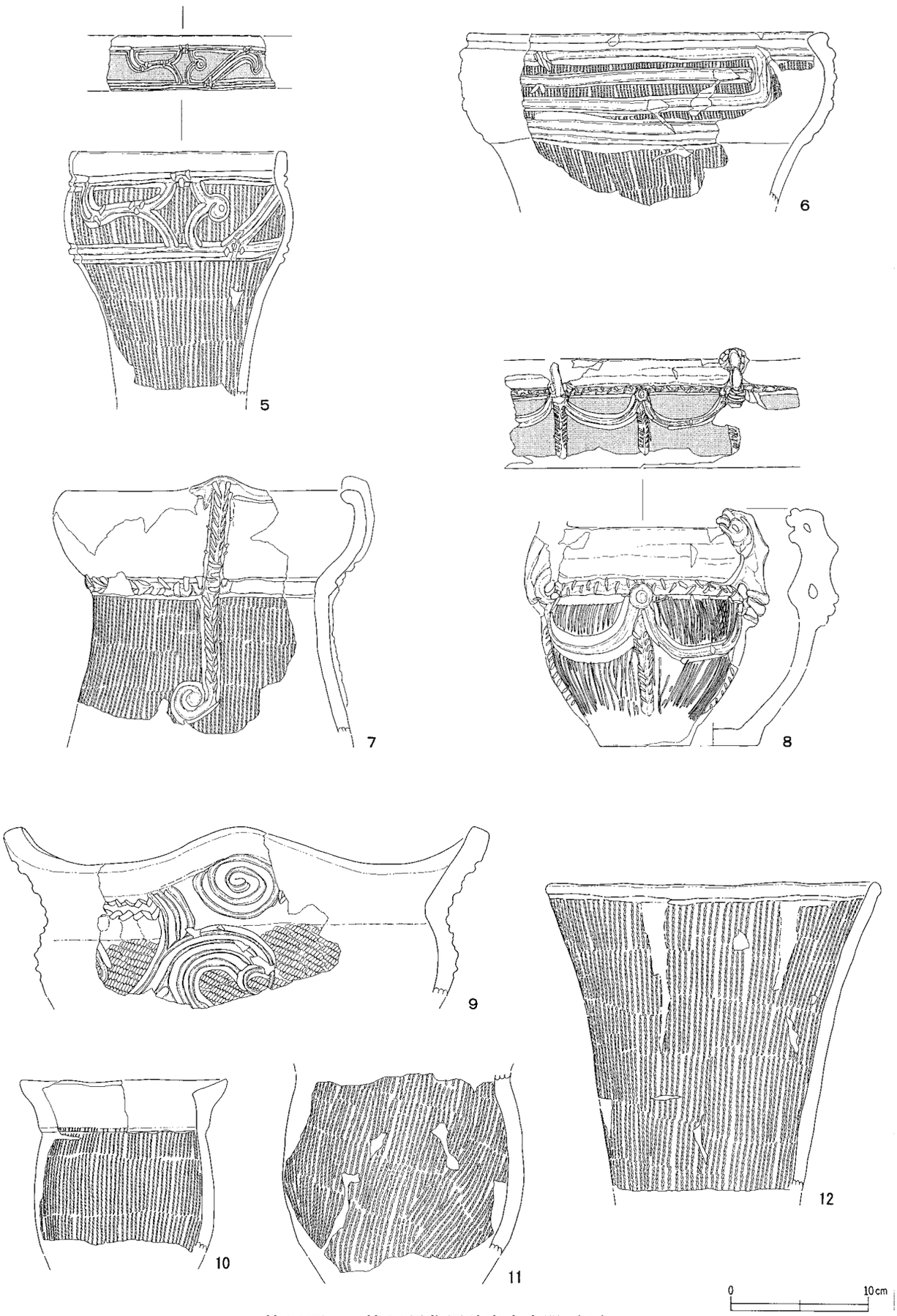
６は口縁部破片からの推定復元である。キャリパー形の深鉢で、口縁部は内湾する。口縁部文様帯は上端を１本隆帯、下端を２本隆帯で区画し、内側にクランク文を配する。単位は不明である。また、クランク文間に隆帯を横走させる。各隆帯は両側に沈線を伴う。地文は細かい撚糸Ｌで縦位に施文している。図化部分の約20％が残存する。現存高12.5cm、口径推定24.8cm、器厚0.7～1.2cmを測る。焼成良好。

７は曽利Ⅰ式土器であるが、文様描出の手法は、勝坂式最終末の様相を持つ。口縁部は幅広の無文帯で、口唇部は内屈する。頸部は、くの字に屈曲し、胴下半部に向けて径を増やす。底部近くに最大径を持つと思われる。口唇部には１箇所あるいは２箇所の突起を置く。突起からは、胴部に向けて頸部分割隆帯に直交して、隆帯を垂下させる。垂下隆帯下端は渦巻となるが、見た目には多喜窪タイプの文様に類似している。隆帯上には綾杉文、頸部隆帯と交差する部分には交互刺突文を施し、両脇には沈線を引く。沈線の一部には裁痕状の刺突を加えている。地文は撚糸Ｌの縦位施文で、隆帯貼付前に施している。図化部分で約40％残存。現存高18.6cm。口径推定19.5cm、器厚0.8～1.1cmを測る。焼成良好。

８も曽利Ⅰ式土器である。櫛形文土器の下半部を模したような土器である。口縁部は幅広の無文帯で、輪



第10図　　第81号住居跡出土土器（1）



第11図　　第81号住居跡出土土器（2）

積痕が残る。また、胴部懸垂隆帯から伸びる把手が２単位対峙する。把手は正面が連鎖状、側面は鳥類の頭部を模したような造形が見られる。頸部区画隆帯に連結する部位に孔を持つ。頸部区画隆帯は、上下交互に刻みを入れ、波状隆帯状の効果を出している。胴部文様は所謂櫛形文である。把手間に円形貼付を付し、それぞれを弧状の隆帯で繋ぐ。連結部には把手と同様、隆帯を垂下させ、綾杉文を施している。櫛形の隆帯両脇には、地文施文前にナゾリを入れる。地文は集合沈線あるいは粗い条線を施している。全体の約55％残存。器高17.1cm、口径推定11.2cm、底径推定6.0cm、器厚0.7～1.0cmを測る。焼成良好。

９は大形の破片から復元したもので、大木８ａ式土器である。図化部分で約20％が残存する。口縁部は4単位の波状口縁で、直線的に開き口頸部は球形に膨らむ。文様は波頂部直下に隆帯による渦巻文、無文帯直下に交互刺突状の波状沈線、口頸部には数条の弧線隆帯を貼り付けている。弧線隆帯の脇には沈線を引くが、施さない部位もある。地文は単節ＬＲ斜位で、隆帯貼付前に施文している。現存高13.1cm、口径推定32.6cm、器厚1.1～1.6cmを測る。焼成良好。

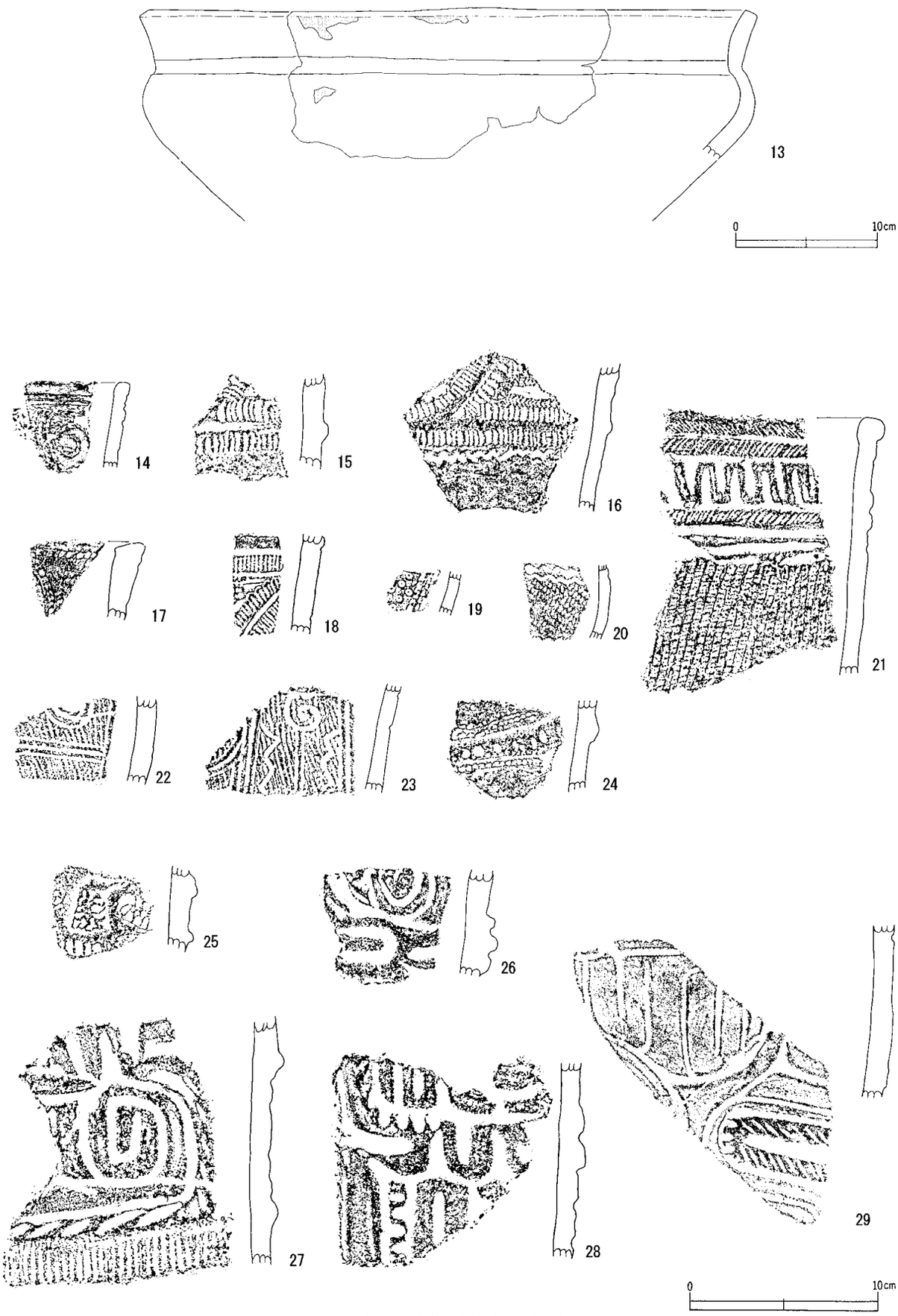
10～12は地文のみの土器である。10は比較的小形の土器で、無文の口縁部を持ち胴部がやや膨らむ器形を呈する。口縁部は外傾し、内面に稜を持つ。口縁部と胴部の接合部は、段差を有する。胴部の地文は撚糸Ｌで縦位に施文している。図化部分で約20％残存。現存高12.5cm、口径推定14.8cm、器高0.7～1.0cmを測る。焼成良好。

11は胴部地文部分のみ残存する。胴部中位が膨らむ器形で、東関東系の土器の可能性がある。地文は撚糸Ｒで、縦位、斜位に施している。現存高14.5cm、器厚1.1～1.3cmを測る。図化部分で約40％を残す。焼成良好。

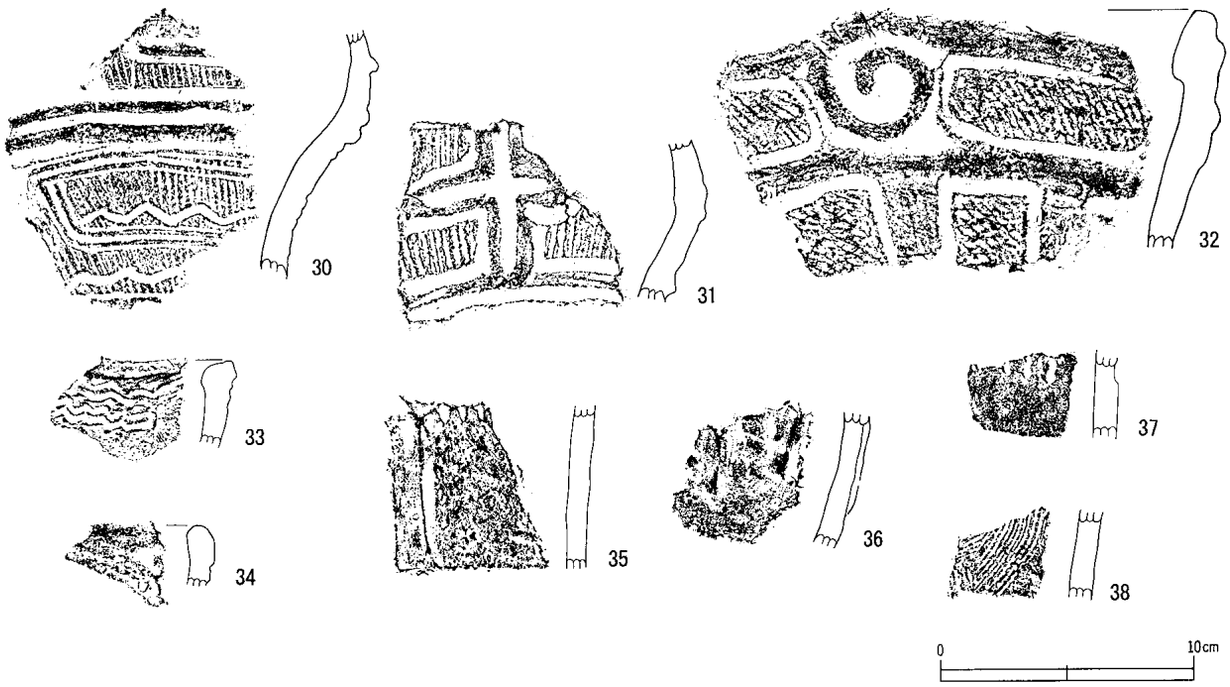
12は、やや外反気味に開く器形の深鉢である。口唇部は幅の狭い無文帯で、直下にナゾリ状の沈線を引く。以下は地文撚糸Ｌを縦位、斜位に施文しているが、口唇部直下のナゾリと同様、部分的に縦位に磨り消している。現存高22.5cm、口径23.4cm、器厚0.9～1.1cmを測る。焼成やや不良。図化部分で90％残存。

第12図13は浅鉢で、破片からの推定復元である。口縁部は断面板状を呈し、緩く外反する。頸部には幅広の沈線を引き、胴部上半は膨らむ。部分的に赤色塗彩の痕跡を残している。現存高10.7cm、口径推定42.2cm、器厚0.9～1.3cmを測る。焼成良好。

14～30、第13図31～39には、各層から出土した破片を掲載した。14は口縁部破片で、狢沢式と思われる。薄手の土器で、ペン先状施文具による角押文で渦巻文を描出している。15・16は隆帯脇に粗い爪形文を沿わせる。15は隆帯上にこれがかかる。16は爪形文に平行して、三角押文と同一施文具による波状文を施している。17は胎土に金雲母を含んでいる。並列する角押文を施す。阿玉台Ⅱ式。18は縦位区画文土器の胴部破片と思われる。パネル文の一部で、半裁竹管による平行沈線で区画し、内側に爪形文や蓮華文を充填する。19は細隆帯の両脇に角押文を伴う。竹管による円形刺突を充填している。20は口縁部破片で、口唇部直下に鋸歯状の沈線を１条引く。地文は単節ＲＬで横位施文。21は口縁部がわずかに開く円筒形の土器である。口唇部は肥厚する。口縁部文様は上下を沈線で区画し、内側に上下互い違いにＵ字状沈線を入れ波状文を作出する。口唇部及び波状文上下には斜行する刻目を密に施している。地文は０段多条の単節ＲＬで、やや斜位に施文している。22・23は同一個体である。地文に撚糸Ｌを斜位に施し、半裁竹管による平行沈線や1本沈線による蛇行懸垂文、渦巻文を描く。文様描出の手法は大木８ａに近いが、地文が撚糸であるところや1本沈線を併用するなど、異なる部分も多い。24は胎土に金雲母を多量に含む。隆帯脇に2条の角押文を施している。17と同じく、阿玉台Ⅱ式と思われる。25は隆帯による楕円区画文の一部と思われる。隆帯脇に粗い爪形文を施している。26～29は勝坂式最終末のもので、円筒形土器の胴部破片である。26～28は主文様である隆帯の作出に交



第12図　　第81号住居跡出土土器（3）



第13図　　第81号住居跡出土土器（４）

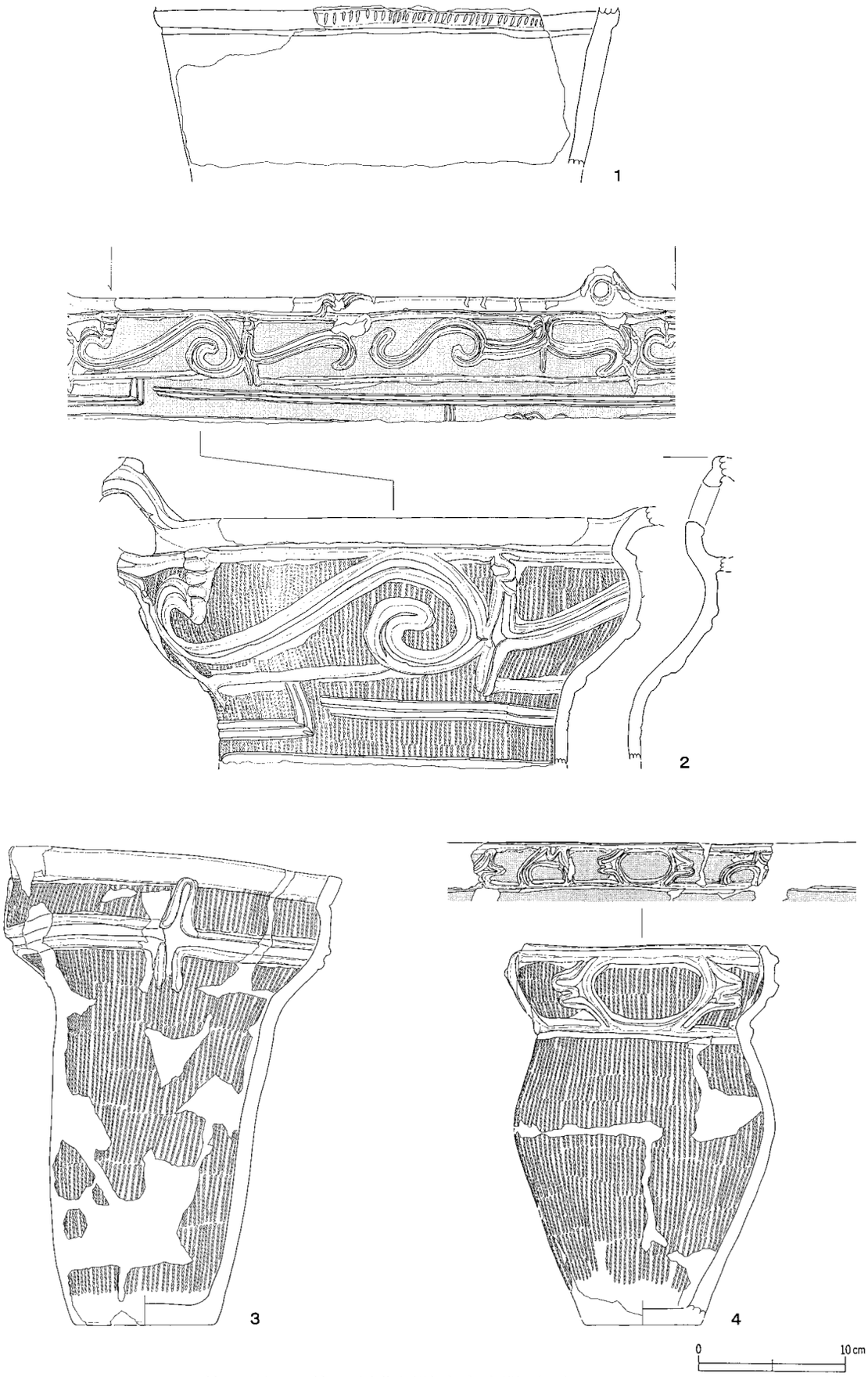
互短沈線による波状文、背割沈線が多用され、空間の充填手法にも類似点が認められる。文様構成は、矩形区画を基調とするものと思われる。27は文様帯を隆帯により胴下半部と明確に分割し、下半部には粗い撚糸Ｌを施文している。なお、26・27は胎土、色調から同一個体の可能性が高い。29は主文様の様相が不明確であるが、半円状の区画内にフォーク状沈線文や沈線による三叉文等、粗い充填手法に該期の特徴が明確である。

第13図30・31は加曽利ＥⅠ式土器で、古段階のものである。30は頸部から胴部上半の破片である。口縁部文様隆帯脇には沈線を引く。文様帯下端は２条の隆帯で区画されている。区画隆帯直下には、半裁竹管の重複施文で３条の平行沈線を引く。胴部文様は同一技法でクランク状文を描き、１本沈線の波状文を付す。隆帯、沈線ともに地文撚糸Ｌ縦位施文後に施している。31は口縁部文様の十字文を残す。幅広の隆帯に背割沈線を加え、２本とする。隆帯脇及び文様帯下端隆帯脇にも太い沈線を引く。地文は撚糸Ｌで、隆帯貼付前に施文。32は加曽利ＥⅡ式土器で、新段階と思われる。口縁部文様は、渦巻文と楕円区画文の交互配置で、渦巻文直上は若干突出する。文様帯下端は隆帯で明確に区画している。胴部は磨消懸垂文を施すが、地文施文部の上端は区画隆帯直下で閉塞する。地文は口縁部、胴部ともに単節ＬＲの縦位施文。33～37は阿玉台式土器で、Ⅱ式と思われる。いずれも雲母末を多く含む。33は口縁部破片で、口唇部直下に４条の鋸歯状文を横走させる。34も口縁部破片で、区画に沿って、複列の角押文を施す。35～37は胴部破片で、隆帯懸垂文と刻目列が認められる。38は深鉢胴部破片で、櫛歯状施文具による沈線文が施されている。

第84号住居跡出土土器（第14～20図）

第81号住居跡と同様、本住居跡も出土土器が多く、図化し得たものは15個体を数える。２個体の炉埋設土器を含めた覆土下層（第４層）出土土器群は、勝坂式最終末（３ｂ式）段階・加曽利ＥⅠ式古段階に比定できるが、上層（第２層）出土土器は加曽利ＥⅠ新段階を主体とするものである。

第14図１は東側の旧炉跡に埋設されていたもので、勝坂式最終末に比定できよう。深鉢の胴部文様帯の下端隆帯を一部に残す。隆帯上には粗い刻目、直下に沈線を引く。下半部は無文である。全体の器形を窺うこと



第14図　　第84号住居跡出土土器（1）

はできないが、円筒形あるいは甕形が想定できよう。現存高9.8cm、器厚1.1～1.4cmを測る。焼成は良好であるが、内面は被熱のため荒れている。図化部分の約40％残存。

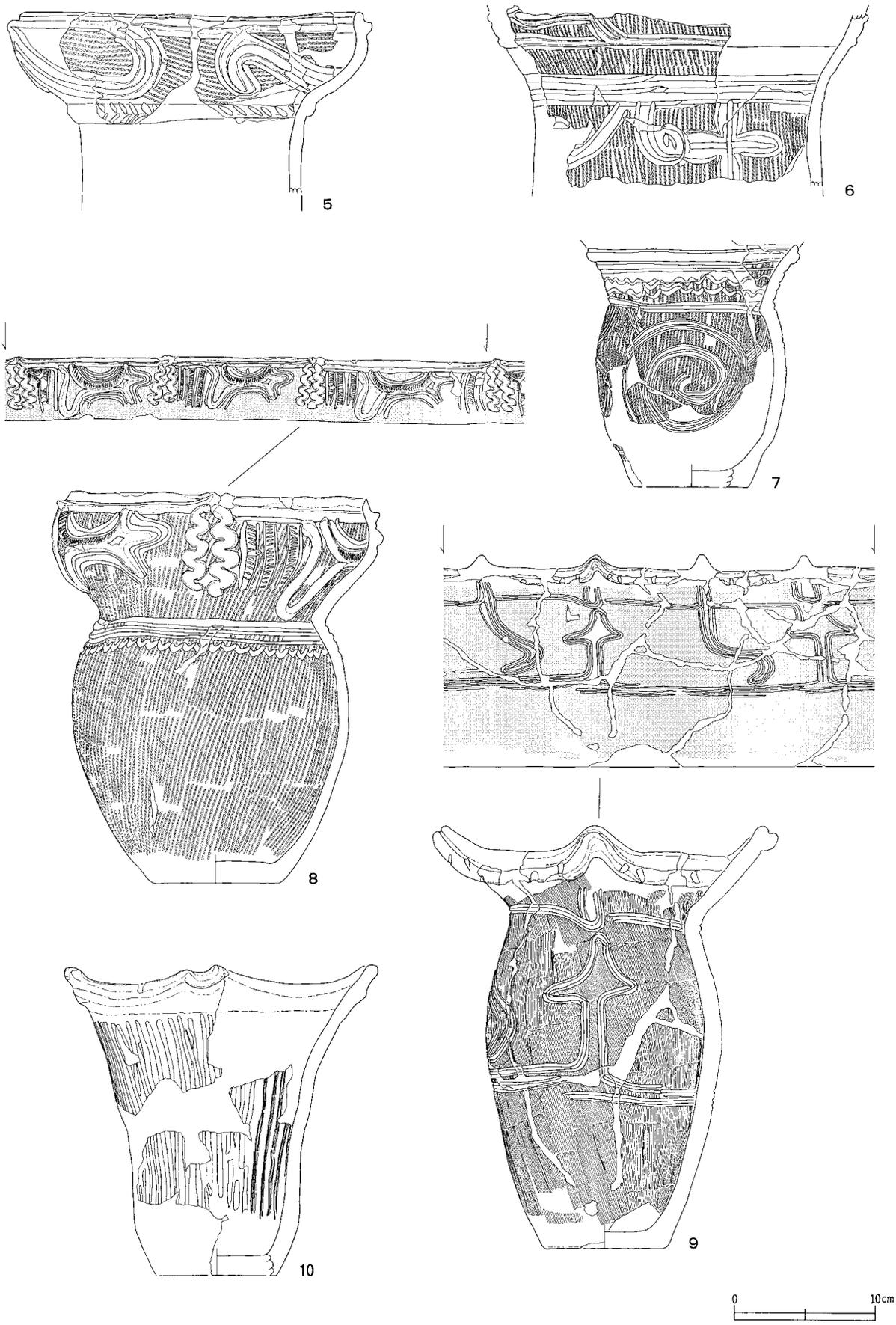
２は西側の新炉跡に埋設されていたもので、2箇所の把手と口唇部の1／3を欠くが、口頸部が全周する。加曽利ＥⅠ式古段階。口縁部はやや幅広の無文帯で、外傾する。口頸部は球状で、残存する胴上半部は円筒形を呈する。口縁部には２箇所の把手を対面して配するが、両者とも埋設時に壊されているため全体形は不明である。口頸部文様は、上下を隆帯により区画するが、下端隆帯は一部途切れる。文様はＳ字文とそれに連結するＪ字文を２本組隆帯により各２単位作出し、連結部には十字類似文を挟む。また、Ｊ字文の１単位はＳ字文との間に弧状隆帯が連結し、さらに連結部に眼鏡状把手を置く。部分的に交互刺突文等を使用するなど、古い要素も点在する。隆帯脇処理は、基本的には擦り付けたような痕跡を残すのみで沈線は伴わず大木式に類似した手法を採っている。また、一部に半裁竹管による平行沈線を沿わせる。頸部直下及び胴部には半裁竹管重複施文の３本沈線で格子状文、波状沈線文を施している。地文は撚糸Ｌで、縦位に施文している。現存高20.5cm、口径31.8cm、器厚0.8～1.2cmを測る。内面は被熱により若干荒れているが、焼成良好。

３は、全体の約60％が残存するが、製作時の歪みが顕著である。第４層出土。加曽利ＥⅠ式古段階並行。口縁部は２と同様、やや幅広の無文帯で外傾する。口頸部は弱い球状を呈し、緩やかに円筒状の胴部に移行する。口頸部文様は、上端は無文帯直下とし下端は区画していない。文様は、十字文を連結する形で、２本隆帯で４単位作出する。十字の下端は開放する。文様作出隆帯には２と同様、明確な沈線が伴わず、ナゾリ状の処理がなされている。また、隆帯間にも念入りにナゾリが施されている。地文は撚糸Ｌの縦位施文。器高32.6cm、口径21.1cm、底径9.4cm、器厚0.8～1.5cmを測る。焼成は、やや不良で胴下半部には被熱痕跡が認められる。

４は口縁部が内湾し、頸部で屈曲し、胴部中位で膨らむ器形を呈する。口径と胴部最大径はほぼ一致する。３と同様、第４層中から出土しており、加曽利ＥⅠ式古段階のものと考えられる。口縁部文様帯は上下端を１本隆帯で区画し、棘状文が付随する楕円区画文２単位の他、計４単位の文様を独立して配すると思われる。ただし、楕円区画文以外は、全体形が不明である。文様作出の手法は２本組隆帯によるもので、背割沈線状のナゾリを加えている。隆帯脇には、２・３とは異なり沈線を施すが、ナゾリ状処理も認められる。地文は撚糸Ｌで、縦位施文。器高25.4cm、口径16.2cm、器厚0.8～1.2cmを測る。焼成良好。

第15図５は口縁部及び胴部上半の破片から復元したもので、図化部分の約40％が残存する。加曽利ＥⅠ式古段階の深鉢。口縁部は、口唇部近くが直立気味に立ち上がり、頸部で絞り込まれる。胴部は円筒形を呈すると思われる。口縁部文様は上下を隆帯で区画し、やや幅の狭い空間に２本隆帯によるＳ字文等を配する。Ｓ字文で明確なのは２単位のみで、他のモチーフは不明である。Ｓ字文の上端は、文様区画隆帯に連結し突起状を呈するが、下端は区画隆帯と離れる。背割沈線及び隆帯脇沈線は比較的深い。文様下端区画隆帯上には、粗い横位綾杉文と刻目を施している。地文は、口縁部が撚糸Lの横位施文、胴部は縦位施文である。現存高12.7cm、口径推定22.8cm、器厚0.8～1.0cmを測る。焼成やや不良。

６も５と同様、破片から推定復元したものである。加曽利ＥⅠ式古段階。器形は、太目の胴部から緩やかに外反する。図化部分の30％を残す。口縁部文様については、残存部分がほとんど無いため不明であるが、２本組隆帯で文様を作出していたと思われる。隆帯脇には沈線を伴うが、文様下端区画隆帯直下は沈線ではなく、ナゾリ状の処理が施される。頸部には素文帯を置く。胴部は上位を３本沈線で区画し、直下にクローバー状の文様や垂下する渦巻文を沈線で描いている。地文は、口縁部、胴部ともに撚糸Ｌの縦位施文である。現存高12.9cm、器厚0.7～1.0cm。焼成良好。



第15図　　第84号住居跡出土土器（2）

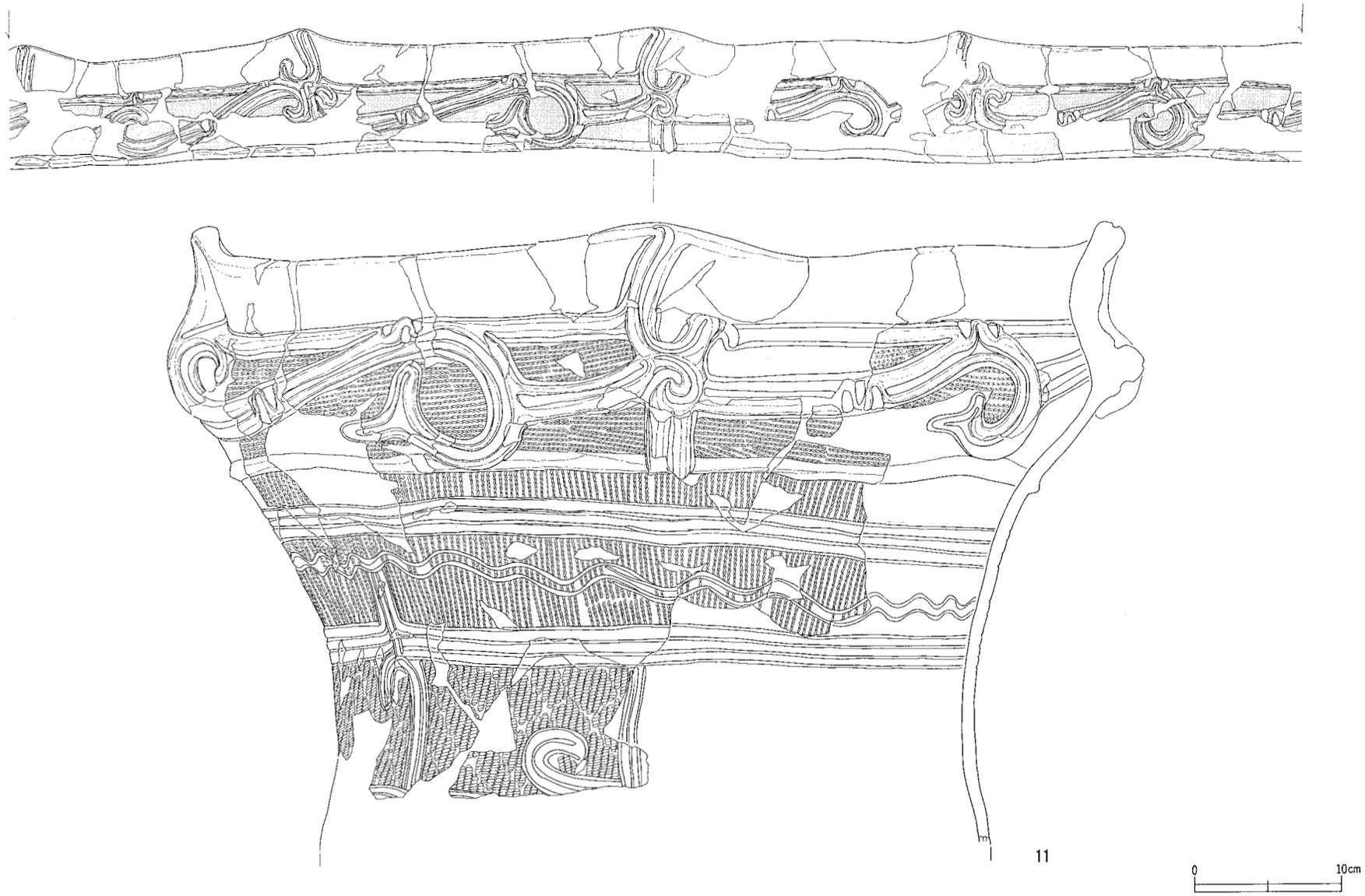
７は図化部分の30％が残存する。胴部は樽形で、頸部で括れ、口縁部は強く外反する。底部は比較的大きめである。口縁部は極一部が残るのみであるが、３単位あるいは４単位の波状口縁を呈すると思われる。頸部は、口唇部直下の隆帯と沈線及び２条の胴部区画沈線で区画し、２条の波状沈線を引く。胴部には、半裁竹管重複施文による３本の平行沈線で大柄な渦巻文を描いている。推定４単位であるが、交互に巻きが逆になるものと思われる。現存高17.2cm、口径推定14.4cm、底径推定8.0cm、器厚0.7～1.3cm。焼成やや不良。

８は、口唇部及び胴部の一部を欠くが、ほぼ完形である。第４層下位から横倒しの状態で出土している。破損状況は、輪積み部分での剥離が顕著である。勝坂式最終末並行であるが、同時期の他型式の影響を強く受け勝坂式の作法を逸脱した土器である。胴部は樽形で、頸部で強く括れ、球形に近い形状の口縁部が付く。器形から受ける印象は、大木８ａ式的と言えよう。口唇部は削ぎ取ったような断面三角形で、やや内傾する無文帯である。口唇部直下には断面三角形の突帯を巡らし、３箇所にX字状の小突起を配する。口縁部文様は、X字状小突起より垂下する２本の蛇行隆帯により、器面を３分割する。蛇行隆帯は裾部が未処理で、曽利式の様相を持つ。主文様は隆帯で作出された三本指のモチーフに三角形の尾を付けたもので、突帯と同様、断面三角形を呈する。各単位の中央部は隆帯に平行して沈線を引き、上下対弧文の効果も併せ持つ。また、上位弧状部分には刻目を施している。副文様は、蛇行隆帯と三角尾の間に置かれるが、３単位とも異なった文様を描いている。展開図左側は三叉文＋刻目、中央は２本沈線間に刻目、右側は主文様の両側に同様のものを施す。口縁部と胴部は３本の平行沈線で区画される。区画沈線直下には弧状沈線の連続施文による波状沈線を巡らす。地文は撚糸Ｌで、文様描出前に縦位あるいは斜位に施されている。器高27.7cm、口径20.8cm、底径8.9cm、器厚0.6～1.5cmを測る。焼成良好。

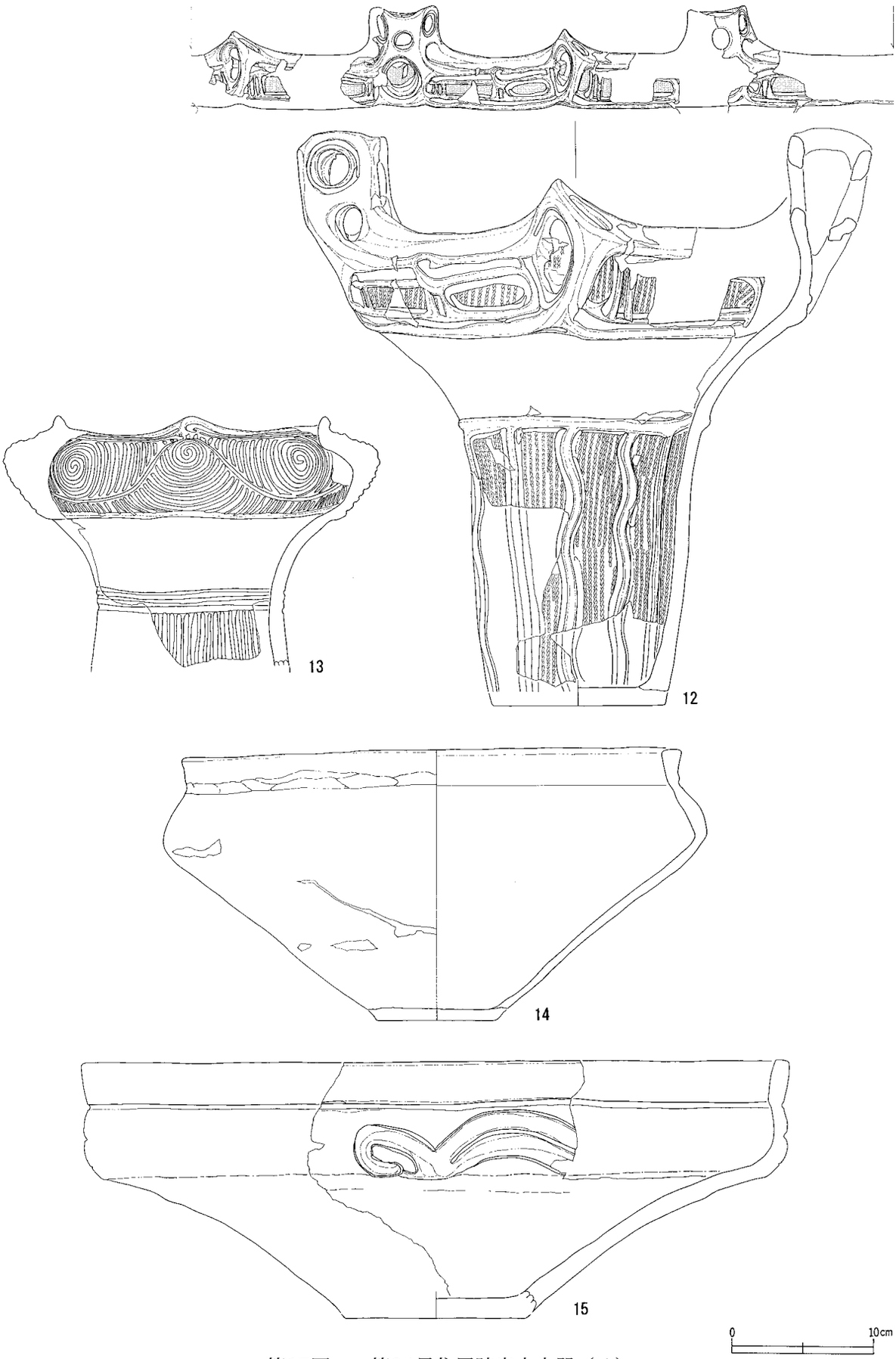
９は東関東系４単位波状口縁の深鉢であるが、波頂部３単位を欠く。８と同様、第４層下位から横倒しの状態で出土している。土圧による歪みが著しい。胴部は長胴の樽形を呈し、頸部は口縁部直下にある。口縁部は上下動の弱い波状を呈する。口唇部は外側に突出する形で太い隆帯が貼り付けられ、隆帯上には粗い交互刺突を、間隔をあけて施している。胴部は地文に細かい条線を施文した後に、半裁竹管による深い平行沈線文を描く。文様は上下を平行沈線で区画し、その間に波頂に合わせて釣針状モチーフと槍先状モチーフを交互配置する。後者の上位にはU字文を置く。また、槍先状モチーフの１単位は上端が開放する。いずれも同一施文具で施している。器高30.0cm、口径推定2.8cm、底径8.4cm、器厚1.0～1.3cm。焼成やや不良。

10も４単位波状口縁の土器であるが、加曽利ＥⅠ式新段階と思われる。全体の約40％が残存する。底部は丸みを帯び、胴部は緩く外反し開くように口縁部に至る。口縁部は上下動の少ない波状を呈し、波頂部は唇状に窪ませる。口唇部に隆帯貼付はなく、浅いナゾリ状の沈線で段差を作り、隆帯様の表現をしている。胴部は半裁竹管の両面を使用した沈線文を施す。器高22.0cm、口径推定20.0cm、底径推定8.6cm、器厚0.7～1.3cmを測る。焼成やや不良。

第16図11は大形の深鉢で、第２層中からまとまって出土した。図化部分の約50％を残す。加曽利ＥⅠ式古段階。口縁部は緩く外反する幅広の無文帯で、弱い４単位波状口縁を呈する。口頸部は球形に近い形状を呈し、胴部上位まで窄まり、胴部中位で膨らむ。口縁部文様は、上下を隆帯で区画し、２本組み隆帯による横Ｓ字文とそれに連結する横Ｊ字文を基調に４単位構成の文様を作出しているが、１単位のみ両者の位置関係が逆転している。各文様の末端は、波頂部より垂下するＪ字文下に置かれた把手に連結し、X字条把手を作出する。横Ｓ字文は上下が区画隆帯に接し、単位中間と上部連結部に交互刺突文を施す。また、内側に巻くＳ字末端のいくつかは三叉状を呈する。隆帯脇には沈線が引かれる。口縁部文様下端の隆帯直下には半裁竹管重複施



第16図　　第84号住居跡出土土器（3）



第17図　　第84号住居跡出土土器（4）

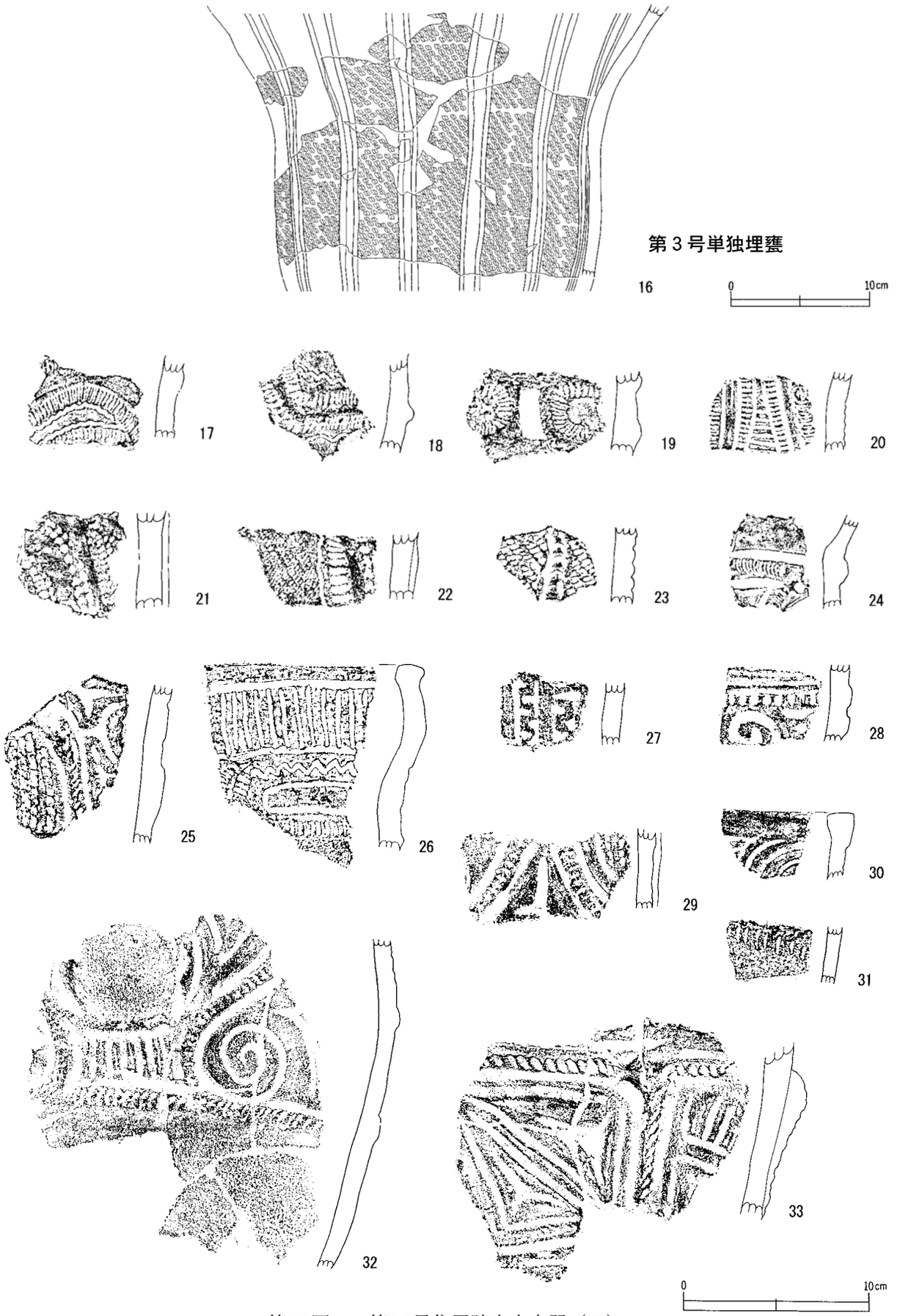
文による４条の沈線を巡らし、両者間に幅の狭い素文帯を形成する。この４本沈線は胴部を多段に分割する役割を有し、間に波状平行沈線やＪ字沈線文などを配する。また、単位は不明であるが、部分的に上下の連結沈線を施し横位分割も行っている。地文は、口縁部が撚糸Ｌの横位施文、胴部上位が撚糸Ｌ縦位、胴部中位以下が単節ＲＬの斜位施文である。現存高42.5cm、口径60.5cm、器厚0.8～1.8cmを測り、大きさのわりに胴部は薄手である。焼成は不良で、接合する破片同士で焼成色が明確に異なる部位が多く、その薄さゆえか、焼成時に破損して一括破棄された可能性がある。

第17図12は4単位の把手を口縁部に配する土器で、所謂「下総型（谷井1987）」の深鉢である。11とともに第２層中から出土している。加曽利ＥⅠ式新段階。器形は、円筒形の胴部から頸部で強く外反し、口縁部はほぼ直立する。胴部は短く、やや寸詰まりの印象を与える。４単位の把手は大小２種ある。大把手は箱状で、１単位のみ全体形が想定できるが、おそらく同じ形状を呈すると考えられる。頭頂部、正面、背面、側面に合計８箇所の貫通孔を有する。頭頂部は弧状に窪む。小把手は斜めに付けられたＸ字状把手で、斜位の頭頂部に貫通孔を持つ。口縁部文様は、これらの把手により４単位に分割され、各単位が隆帯により更に２分割されるものと思われる。各単位は長方形の枠状あるいは楕円形状を呈する。隆帯脇の処理は、沈線を伴う部位とそうでない部位があり、一定していない。区画隆帯上には、横位の蕨状文が部分的に施されている。頸部は無文帯で、上下端は太い隆帯で区画されている。胴部は頸部下端隆帯から１本隆帯を垂下させ、５単位に分割する。各単位の中央に蛇行垂下隆帯を置くが、１単位のみ２本施す。隆帯脇の処理は、明確な沈線ではなく、ナゾリ状である。地文は口縁部、胴部ともに撚糸Ｌで縦位施文。現存高39.4cm、口径推定28.5cm、器厚0.7～1.4cmを測る。図化部分の約60％残存。焼成良好。

13は、11・12とともに第２層中から出土したもので、図化部分の約30％が残存する。重弧文土器の系譜に位置付けられるもので、加曽利ＥⅠ式新段階並行。器形は４単位の突起を有する口縁部が強く屈曲し、口縁部文様直下から括れる頸部に至り、胴部はやや膨らむ。口唇部は突起部の小渦巻文から流れる沈線を巡らし、平行して文様区画沈線を施す。口縁部文様は、突出する渦巻文が突起に対応して４単位置かれる。突出部間は中央に沈線渦巻文を描く。両者は沈線により波状に区画され、空間は弧状沈線を同心円状に充填する。口縁部文様下端は、隆帯で区画する。頸部は幅広の無文帯で、下端に３条の沈線を巡らす。胴部には縦位集合沈線を施している。文様描出後に全体にナデを入れ、つぶすような処理がなされている。現存高17.4cm、口径推定18.4cm、器厚0.7～1.1cmを測る。焼成良好。

14は浅鉢で、遺構中央に逆位で置かれたような状態で出土した。第４層下位出土。底部を欠くが、他はほぼ完形。出土層位から、勝坂式最終末・加曽利ＥⅠ式古段階並行と思われる。口唇部は平坦で、口縁部は直立し、下端にはケズリ状の調整が入る。断面は三角形を呈する。胴部上位は、くの字に屈曲し直線的に径を減じつつ底部に至る。内外ともに丁寧なナデ調整が施されている。現存高18.3cm、口径31.9cmを測る。器厚は0.5～1.3cmと、胴部の薄さが顕著である。焼成は良好であるが、内面には黒褐色の焼きムラが目立つ。

15は第４層下位から出土した破片から推定復元したもので、全体の約20％が残存する。勝坂式最終末並行。口縁部はわずかに外傾し、胴部上位が直立、屈曲後直線的に底部に至る。口径に比して、器高が低い。口縁部は、やや幅広の無文帯で直下に区画沈線を引く。文様は区画沈線と屈曲部間に施され、楕円文あるいは渦巻文に弧状文を付加した文様を幅広の隆帯で作出している。隆帯脇には細い沈線を引く。また、弧状文には背割沈線を施す。文様は各々独立して置かれ、単位数は５～６単位と思われる。内外ともに、丁寧なナデ調整が施されている。現存高17.6cm、口径推定47.8cm、器厚0.9～1.5cmを測る。焼成良好。

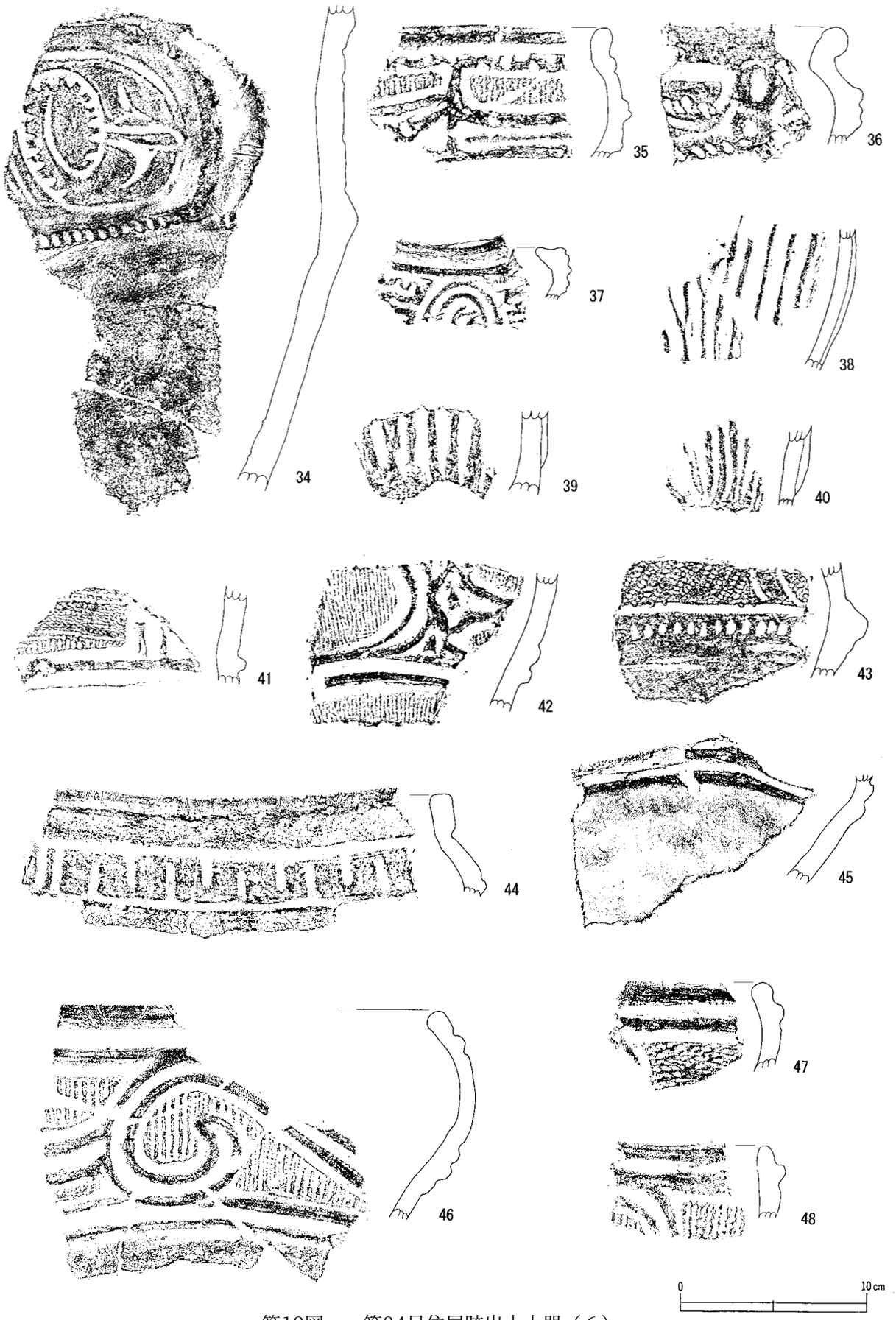


第18図　　第84号住居跡出土土器（５）

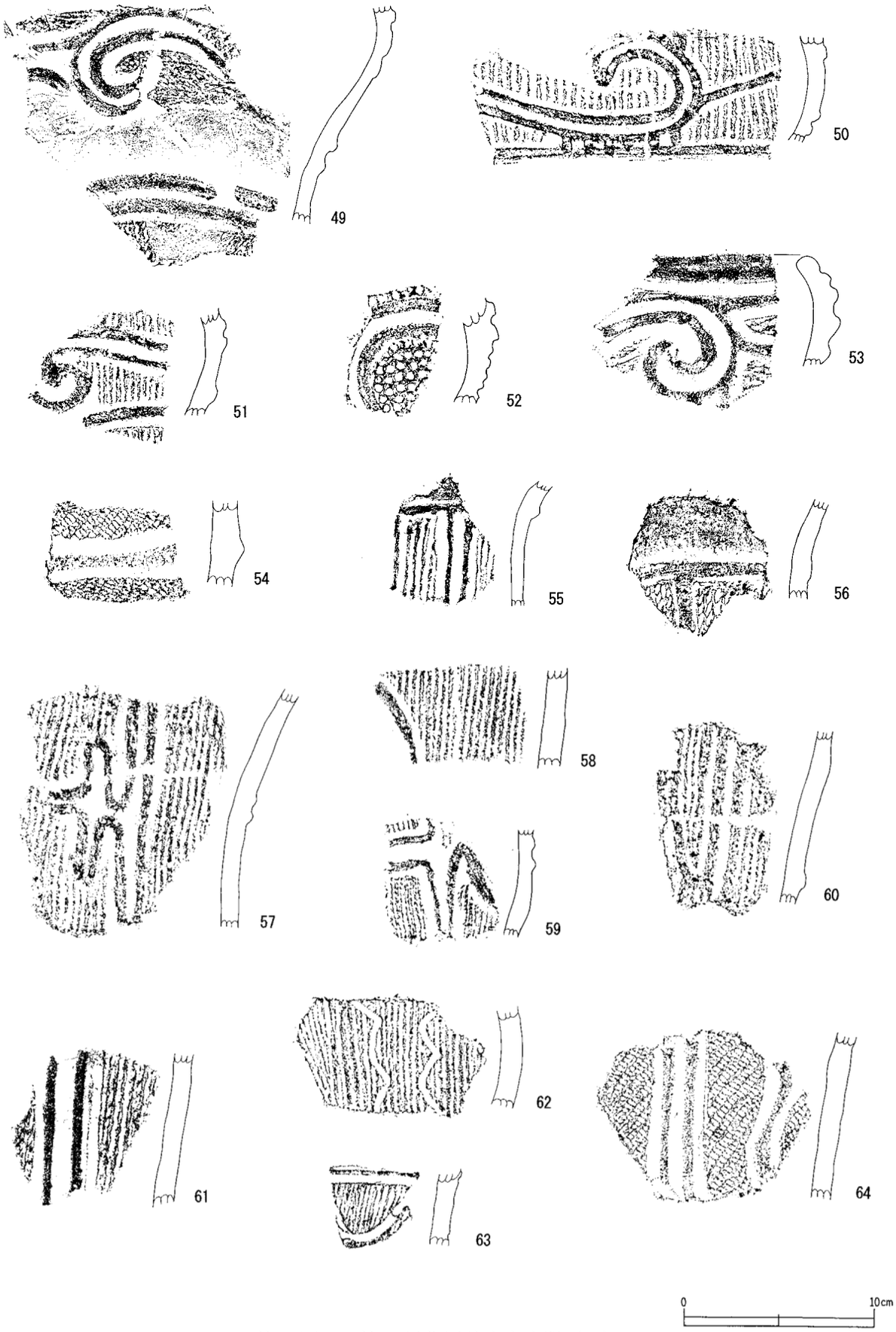
第18図16は第３号単独埋甕である。第84号住居跡東壁際、上層に埋設されていたものである。加曽利ＥⅡ式新段階あるいはⅢ式と思われる。口縁部と胴部下位を欠損する。図化部分で約40％残存。器形は胴部上位で括れ、胴下半部は若干膨らむ。胴部文様は２本沈線による幅の狭い磨消懸垂文を14単位配する。地文は、複節ＬＲＬの縦位施文である。沈線、地文ともに施文時に滑った感じで、水分含有量が多いまま製作された可能性がある。口縁部文様があったかどうかは不明である。現存高19.1cm、器厚0.8～1.2cm。焼成不良。なお、第84号住居跡覆土上層からは同時期の土器片が数点出土している。

17～33、第19・20図には、各層から出土した破片を掲載した。17～20、22～30は勝坂式、21・31は阿玉台式である。17は抽象文土器と思われる。細かい爪形文に波状沈線が併走する。18は隆帯の両脇に爪形文を施し、鋸歯状の波状沈線を付す。19は底部付近に置かれた楕円区画文の一部であろう。区画内側に隆帯に沿った爪形文を施す。20は縦位区画文土器で、半裁竹管の平行沈線でパネルを作出し、内側に爪形文や半円形刺突を施している。21は阿玉台Ⅱ式と思われる。胴部懸垂文の一部で、隆帯に併走する２条の角押文が見られる。22は地文に単節ＲＬを縦位施文後、隆帯脇に爪形文を施す。23は粗い単節ＲＬを縦位施文後、半裁竹管内皮面使用の押引文を施す。24は隆帯上に爪形文を施し、隆帯脇に沈線を引く。三叉文の一部が認められる。25は円筒形土器の胴部である。主文様たる隆帯上には刻目を施し、空間には半肉彫の三叉文や角押文を充填する。26は頸部に楕円区画文を配する土器であるが、区画隆帯が低い。口縁部は通常、無文帯となるが、本例は集合沈線を施している。楕円区画内は隆帯脇に爪形文、鋸歯状文を施し、角押文を併走させる。胴部は０段多条の単節ＲＬを横位施文している。27は縦位区画文土器で、縦位の交互刺突文が見られる。28は口縁部文様の一部で、口唇部直下に刺突を巡らし、下位に渦巻文を置く。中峠類型の可能性がある。29は円筒形土器の胴部で、隆帯上に刻目を施し隆帯脇に沈線を引く。区画内には沈線描出の三叉文が認められる。30は口縁部破片で、区画隆帯上に背割沈線が認められる。区画内には三叉文の一部が残存する。31は阿玉台Ⅱ式で、胴部の横走する爪形文が認められる。雲母片を多く含有する。32は樽形の器形を呈する土器である。文様は胴部上半に展開すると思われる。隆帯による三角区画が認められ、区画内には沈線渦巻文、集合沈線、三叉文が施されている。文様帯下端は隆帯で区画されている。胴下半部は無文である。33は円筒形土器の胴部である。刻目を付した隆帯で器面を枠状に区画し、空間に三角区画、矩形区画を沈線で描き、集合沈線、三叉文を充填する。

第19図34は、胴部下位で屈曲する器形を呈する。文様は上半部に限定され、下半部は無文である。残存する文様は楕円区画の一部と思われ、末端が耳状になっている。隆帯上には刻目を施している。区画内には沈線渦巻文に刺突を付し、空間に三叉文を上下に対峙して描く。35・36は中峠式の類型と思われる。35は無文の口縁部が外傾し、直下に交互刺突文を巡らす。口頸部は球状を呈し、文様はこの部位に展開する。地文に撚糸Ｌを施文後、隆帯を貼り付けて文様を作出する。部分的に隆帯に刺突を付す。36も口縁部の無文帯が外傾するが、交互刺突文は見られない。口頸部は球状を呈し、下端を刻目付の隆帯で区画する。口縁部から下端隆帯間に縦位の連鎖状隆帯を貼り付け、器面を分割する。区画内には沈線文、刺突文が認められる。37は褶曲文土器の類型で、口唇部が内側に突出し幅広の平坦面を形作る。同心円文や交互刺突文が施されている。38～40は縦位に集合隆帯を貼り付ける土器で、出自、系譜が不明確な一群である。勝坂式最終末・加曽利ＥⅠ式古段階に伴う。38は胴下半部、39は底部近く、40は隆帯の下端が認められ、頸部付近の破片と思われる。41・42は加曽利ＥⅠ式古段階の深鉢である。41は頸部の破片で、口縁部文様の区画下端隆帯が残存する。文様は２本組隆帯で作出されたものと思われるが、モチーフ、単位等は不明である。地文は撚糸Ｌ横位であるが、一部に縦位施文が見られ、胴部はこれに準ずると考えられる。42も頸部付近の破片である。口縁部文様



第19図　　第84号住居跡出土土器（6）



第20図　　第84号住居跡出土土器（7）

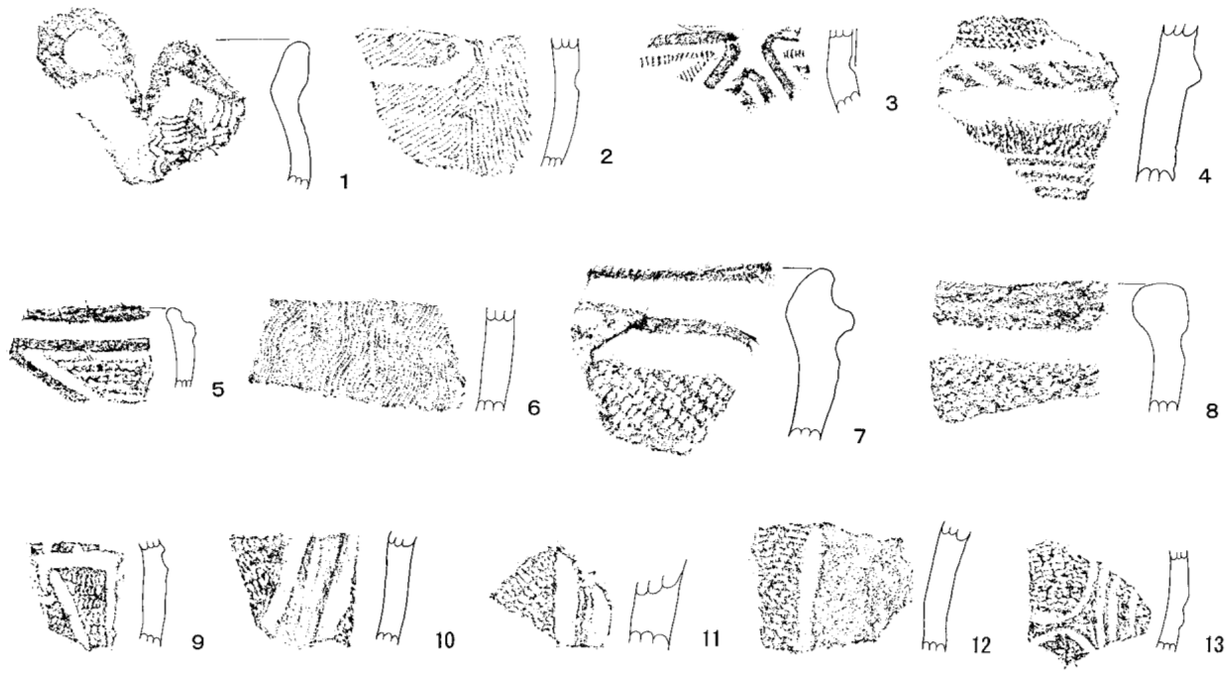
は２本組み隆帯で作出され、横Ｓ字文の一部と十字文が認められる。地文は撚糸Ｌの縦位施文。43～45は浅鉢である。43は口縁部文様帯下端の屈曲部位で、隆帯を巡らしている。隆帯上には刻目を施している。口縁部文様は、地文に単節ＲＬを縦位に施文した後に沈線で描く。44は口縁部破片である。口縁部は幅広の外傾する無文帯で、直下に沈線を巡らす。屈曲部直上にも同様に沈線を巡らし、両者から交互に短沈線を引き、連続的コの字文を描く。45は胴部上半の破片である。内外ともに丁寧にナデ調整が施されている。また、両面に赤色塗彩が認められる。

46～第20図64は、加曽利ＥⅠ式新段階以降のものである。46は深鉢の口縁部破片で、横Ｓ字状文の末端と単位連結の２本隆帯が見られる。Ｓ字末端は、やや巻きが強く渦巻文の前段階と言えようか。文様下端区画隆帯は２条で、頸部は無文帯である。地文は撚糸Ｌで、縦位施文。47・48も口縁部破片で、上部区画隆帯と横Ｓ字文の一部を残す。地文は撚糸Ｌで、47が横位、48が縦位施文である。49は、該期には珍しく口縁部文様帯下端の区画隆帯を持たない。口縁部文様は撚糸Ｌを横位施文した後に２本隆帯で横Ｓ字文を作出するが、この時点で頸部無文帯部分には地文を施文せず、その範囲を確定している。頸部無文帯下端は２本隆帯を巡らして区画する。胴部の地文は、撚糸Ｌの縦位施文。50は、主文様として２本組隆帯で横Ｓ字文を作出し、Ｓ字末端上下に短隆帯を貼り付け、口縁部文様区画隆帯に連結する。横Ｓ字文間の連結は１本隆帯でなされている。地文は撚糸Ｌで、縦位施文。51は２本組隆帯の横Ｓ字文の一部である。地文は撚糸Ｒ縦位施文。52は口縁部文様の一部と思われる。２本隆帯で文様を作出し、隆帯脇に沈線を引くが、充填する刺突文を沈線内にも施している。53は口縁部破片で、２本隆帯のＳ字文の巻きが強い。地文は撚糸Ｌの横位施文である。54は加曽利ＥⅢ式で、口縁部文様を残すタイプである。文様帯下端隆帯が不明確となっている。地文は単節ＲＬを縦位に充填施文している。55は胴部上半部の破片で、頸部無文帯の一部を残している。頸部無文帯区画隆帯から２本の懸垂隆帯を垂下させている。地文は撚糸Ｌで縦位施文。56も55と同じ部位である。頸部区画隆帯及び懸垂隆帯ともに、背の低い１本隆帯で作出されている。地文撚糸Ｌ縦位施文。57は胴部破片で、円筒形に近い形状を呈する。地文に撚糸Ｌを縦位施文後、２本隆帯の懸垂文と、それから突出する十字文を貼り付ける。隆帯脇の処理は施されていない。58も胴部破片で、蛇行懸垂隆帯の一部が残存する。地文撚糸Ｌの縦位施文。59は口縁部文様の一部で、十字文の一部を残す。地文は撚糸Ｌで、縦位施文。60は、焼成、文様の類似から57と同一個体の可能性が高い。61は粗い撚糸Ｌを縦位に施文し、２本隆帯を垂下させる。隆帯脇は沈線処理がなされている。62は半裁竹管の重複施文で３本沈線を垂下させ、蛇行沈線一対を間に置くが、３本沈線に付随する文様の可能性もある。地文は撚糸Ｌで縦位施文である。63は連弧文土器の胴部である。地文は粗い条線で、２本沈線により連弧を描く。64は単節ＲＬを縦位に施文し、２本隆帯と蛇行隆帯を垂下させる。隆帯脇は沈線処理がなされている。

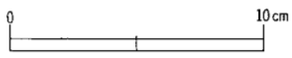
第87号住居跡出土土器（第21図）

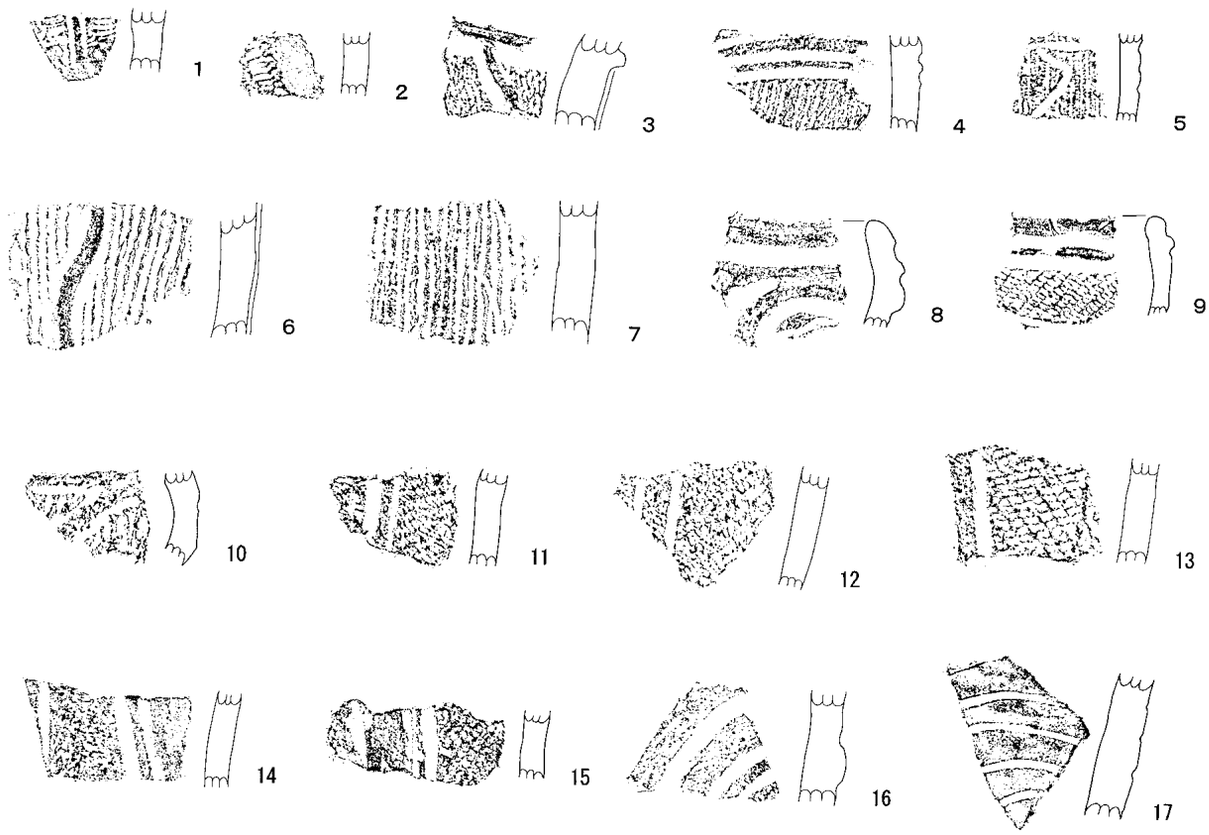
本住居跡は北側の一部のみが検出されたため、出土遺物は少ない。提示した遺物は覆土中から出土した破片で、数型式に亘る。

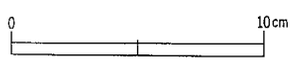
第21図１は勝坂２式で、横帯文土器の口縁部破片である。円環状突起を持つ。文様は三角区画の崩れたものと思われ、隆帯脇に幅広の角押文と付随する波状沈線を施す。２は胴部破片で、無節Ｒを縦位、斜位に施し、沈線を引く。３は頸部破片である。隆帯により三角区画を作出し、内側に爪形文を施している。加曽利ＥⅠ式古段階の頸部破片である。口縁部文様下端の区画隆帯上に斜位の短沈線を施す。胴部上位には半裁竹管の重複施文による平行沈線が認められる。地文は撚糸Ｌで、口縁部は横位、胴部は縦位に施されている。５は加曽利ＥⅠ式新段階の口縁部破片で、横Ｓ字文の一部と思われる。地文は撚糸Ｌの縦位施文。６は胴部破片で、



第21図　　第87号住居跡出土土器







第22図　　第89号住居跡出土土器

櫛歯状の施文具で蛇行する条線を施している。７・８は加曽利ＥⅢ式で、口縁部文様帯を残すタイプである。両者とも崩れた区画文を作出し、地文は７が複節ＲＬＲの横位、８が単節ＲＬの横位施文。９は縦位区画文土器の胴部破片である。上端の隆帯に施した交互刺突文、直下に沈線区画に三角押文の充填が見られる。10～13は加曽利ＥⅢ式の胴部破片である。各々、懸垂文が施されているが、13はH字状を呈する。地文は、いずれも単節ＲＬで、縦位あるいは斜位施文されている。

第89号住居跡出土土器（第22図）

本住居跡は炉跡と柱穴が検出されたのみであるため、出土遺物は極めて少ない。提示した遺物は覆土中から出土した破片で、第87号住居跡と同様に数型式に亘る。

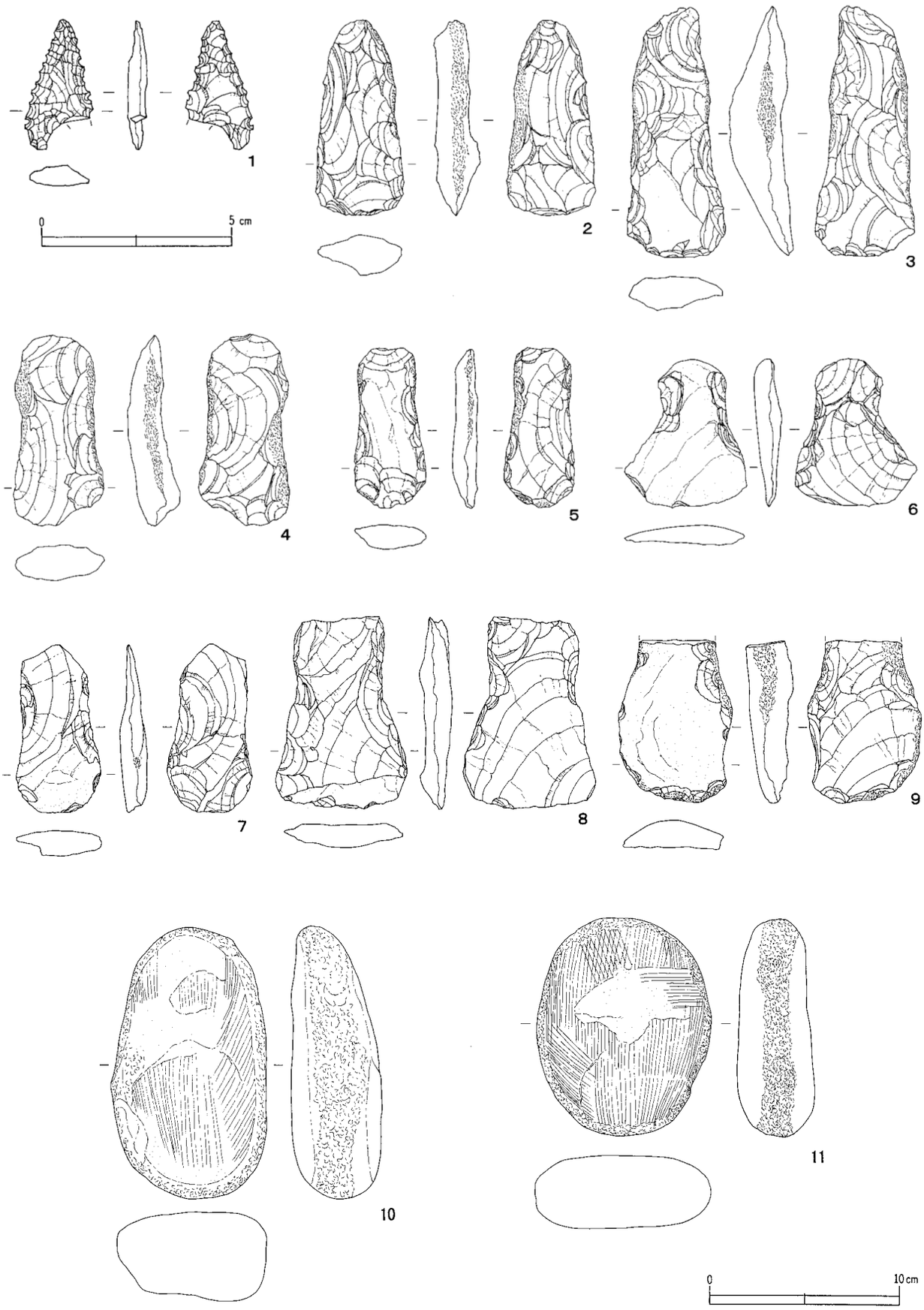
第22図１は縦位区画文土器で、２本沈線に沿う蓮華文と爪形文が見られる。２は勝坂Ⅰ式で、やや深めの爪形文に三角押文を併走させる。３・４は頸部破片である。３は区画隆帯から蛇行隆帯を垂下させる。４は区画沈線を3条巡らしている。地文は、いずれも撚糸Ｌである。５～７は胴部破片である。５は条線地文に蛇行沈線を垂下させる。６・７は地文に撚糸Ｌを施し、６は蛇行隆帯を垂下させている。８から10は口縁部破片で、いずれも横Ｓ字文の一部であろう。地文は８が撚糸Ｌの横位、９が単節ＲＬの縦位、10が撚糸Ｌの縦位施文である。11は、０段多条単節ＲＬの斜位施文地に2本隆帯の懸垂文を施している。12は２本沈線による懸垂文が認められるが、沈線間は磨り消さない。地文は単節ＲＬの縦位施文。13～15は、磨消懸垂文を持つものである。13は沈線間が狭く、やや古手。14・15は加曽利ＥⅢ式と思われる。16・17は、渦巻状あるいは同心円文を胴部に施すものと思われる。16は沈線と隆帯を併用する。

石　器

第81号住居跡出土石器（第23図）

第23図１は石鏃で、片側の脚部を欠く。正面は多方向からの押圧剥離が入り、裏面に主要剥離面を残している。凹基無茎で、脚部は若干湾曲する。細かい押圧剥離により鋸歯状の側縁部を作出している。長さ2.8㎝、残存幅1.7㎝、厚さ0.6㎝、重さ２ｇを測る。チャート製。

２～９は打製石斧である。２は短冊形に近い形状を呈し、両側縁は直線的である。正面は多方向からの剥離で構成され、裏面には主要剥離面を残している。側縁部には調整剥離と敲打が加えられるが、正面右側に敲打が顕著。刃部は両面からの剥離により作出された両刃で、形状は直刃である。長さ10.3㎝、幅4.6㎝、厚さ2.1㎝、重さ103ｇ。ホルンフェルス製。３は正面刃部付近に自然面、裏面に主要剥離面の一部を残す。側縁部が直線的な短冊形を呈する。両側縁は調整剥離が加えられ、中間部分には敲打が施されている。刃部は両面からの剥離が施されているが、片刃で、形状は直刃である。長さ13.2㎝、幅5.2㎝、厚さ2.8㎝、重さ196ｇ。砂岩製。４は両面に主要剥離面を残す。両側縁が直線的な短冊形を呈している。両側縁には大きめの調整が加えられ、広範囲に敲打が加えられる。刃部は、正面は主要剥離面をそのまま使用し、裏面に剥離を加え両刃を作り出している。形状は、正面右側が使用時の欠損の可能性があり、全体形は円刃であったと思われる。長さ10.1㎝、幅4.7㎝、厚さ1.9㎝、重さ110ｇ。砂岩製。５は側縁が直線的な短冊形を呈する。正面に風化した自然面、裏面に主要剥離面を残す。両側縁には大まかな調整剥離が入り、敲打が加えられている。刃部は両面からの剥離により、両刃状に作出され、形状は円刃を呈する。長さ8.4㎝、幅3.7㎝、厚さ1.3㎝、重さ55ｇ。緑泥片岩製。６は撥形を呈する。正面に大きく自然面、裏面に主要剥離面を残す。両側縁の加工は周縁的で、抉りを加えるための剥離が主となっている。敲打痕はほとんど認められない。刃部は両面とも一次剥離面がそ



第23図　　第81号住居跡出土石器

のまま使用され、片刃状を呈する。形状は直刃である。長さ7.8㎝、幅6.4㎝、厚さ1.3㎝、重さ57ｇ。ホルンフェルス製。７は短冊形を呈する。正面刃部付近に自然面、裏面に大きく主要剥離面を残している。両側縁の調整剥離は正面に認められるが、裏面は素材剥片をそのまま使用した感がある。刃部は裏面に加工痕が認められるが、正面は自然面をそのまま残す。片刃で形状は円刃である。長さ8.8㎝、幅4.4㎝、厚さ1.3㎝、重さ53ｇ。ホルンフェルス製。８は撥形を呈する。正面刃部付近に自然面、裏面には主要剥離面を大きく残している。両側縁の調整剥離は正面に顕著である。刃部形状は直刃で、正面に自然面を残すため、断面形は片刃である。長さ10.2㎝、幅6.9㎝、厚さ1.5㎝、重さ124ｇ。砂岩製。９は基部を欠くが、撥形を呈するものと思われる。正面に自然面、裏面は多方向からの面的剥離で構成される。両側縁の調整剥離は周縁的で、敲打痕が顕著である。刃部は両面剥離により作出されるが、断面形は片刃状を呈している。形状は円刃である。使用時の敲打痕が認められる。残存長8.6㎝、幅5.8㎝、厚さ2.3㎝、残存重量139ｇを測る。ホルンフェルス製。

10・11は敲・磨石である。10は自然石をそのまま使用している。全周的に顕著な敲打痕が認められる。また、両面に平坦部を中心に擦痕が見られる。長さ14.3㎝、幅8.2㎝、厚さ4.8㎝、重さ761ｇを測る。砂岩製。11は円礫を使用した敲・磨石である。全周的に敲打痕が認められるが、正面右側に特に顕著である。擦痕は両面とも比較的明瞭で、一部研磨を施したような光沢が見られる。被熱痕跡あり。長さ11.5㎝、幅9.1㎝、厚さ4.1㎝、重さ586ｇを測る。砂岩製。

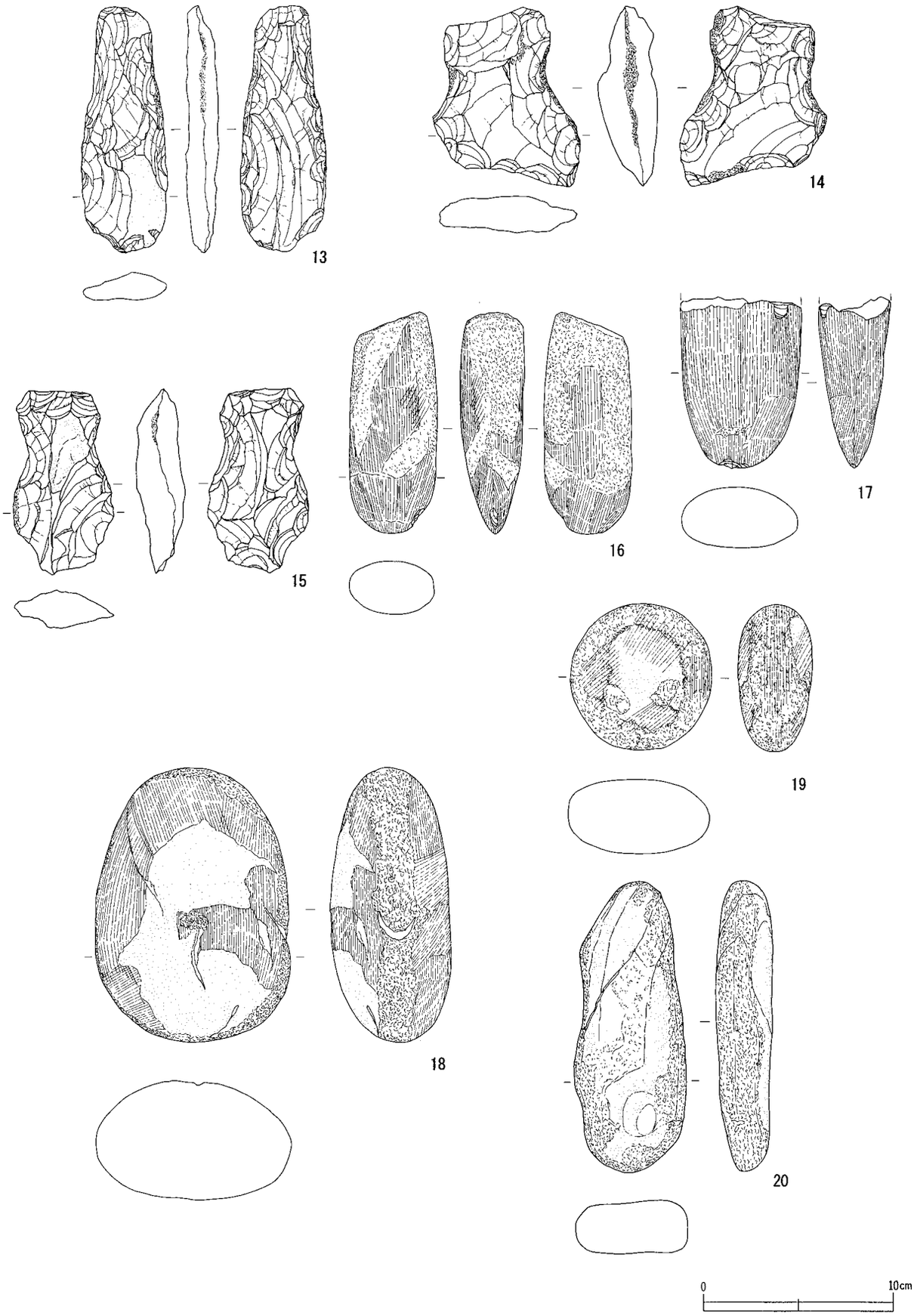
第84号住居跡出土石器（第24・25図）

第24図１・２は石鏃である。１は完形品で、凹基無茎である。脚部は、わずかに湾曲する。両面共に周縁部からの押圧剥離が顕著である。長さ1.1cm、幅1.3㎝、厚さ0.4㎝、重さ0.8ｇ。黒曜石製。２は、片側の脚部を欠く。側縁の形状は弧状を描く。両面に多方向からの押圧剥離が入る。凹基無茎。長さ1.2㎝、残存幅1.4㎝、厚さ0.３㎝、重さ0.6ｇを測る。黒曜石製。

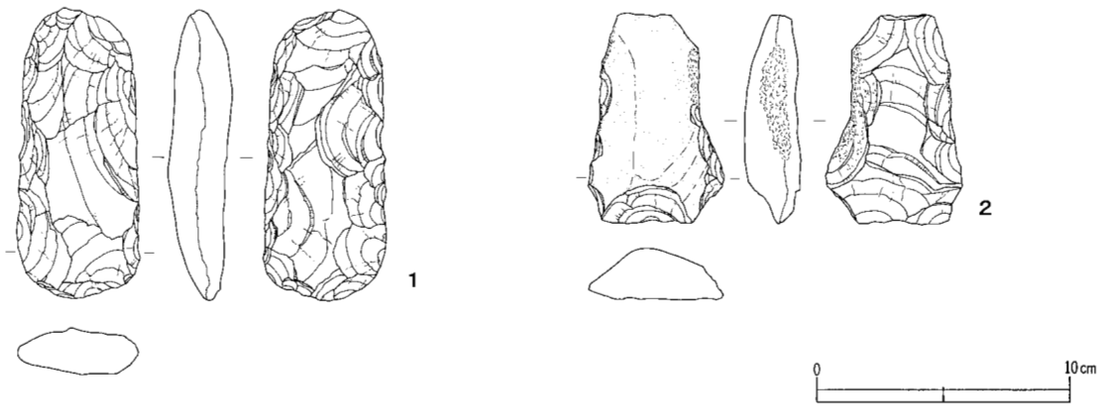
３は石錐である。基部は正面に細長く自然面を残し、裏面に主要剥離面を残している。断面形は三角形を呈する。錐部は細かい調整剥離により作出されているが、先端部を欠く。残存長6.2㎝、幅3.3㎝、錐部の幅0.5㎝前後、厚さ1.8㎝、残存重量21ｇを測る。チャート製。

４～第25図15は打製石斧である。４は側縁部が直線的な短冊形を呈する。正面に大きく自然面、裏面に主要剥離面を残している。両側縁部には周縁的な調整剥離が加えられ、敲打は基部付近に施されている。刃部は一次剥離面をほぼそのまま使用している。断面形は片刃で、形状は円刃である。長さ11.5㎝、幅5.6㎝、厚さ1.6㎝、重さ123ｇ。頁岩製。５は短冊形を呈する。刃部の一部欠く。正面は多方向からの面的剥離で構成され、裏面には主要剥離面を残す。両側縁の調整剥離は主として基部付近に認められ、敲打は側縁に沿って施される。刃部は両面から作出された両刃で、形状は直刃である。長さ10.6㎝、幅4.3㎝、厚さ1.8㎝、残存重量112ｇを測る。頁岩製。６も短冊形を呈する。正面には大きく自然面、裏面は主要剥離面を一部残す。両側縁の調整剥離は周縁部に限られ、敲打は中心部から基部付近にかけて施されている。刃部加工は両面から行われているが、周縁的である。断面形は両刃、形状は直刃である。長さ10.3㎝、幅3.8㎝、厚さ1.5㎝、重さ93ｇ。チャート製。７は、やや不整は短冊形を呈する。正面に自然面、裏面に主要剥離面を残す。両側縁の調整剥離は粗雑で、大きな面的剥離が施される。敲打は基部に顕著である。刃部は片刃、円刃で、使用時の敲打痕が認められる。長さ9.2㎝、幅4.2㎝、厚さ2.6㎝、重さ99ｇ。安山岩製。８は基部が尖頭形を呈するが、短冊形に類する。正面に自然面、裏面に主要剥離面を残す。両側縁の調整剥離は正面に顕著で、裏面には敲打が念入りに施される。刃部は両刃で、形状は直刃である。長さ12.8㎝、幅4.4㎝、厚さ2.8㎝、重さ180ｇを測る。

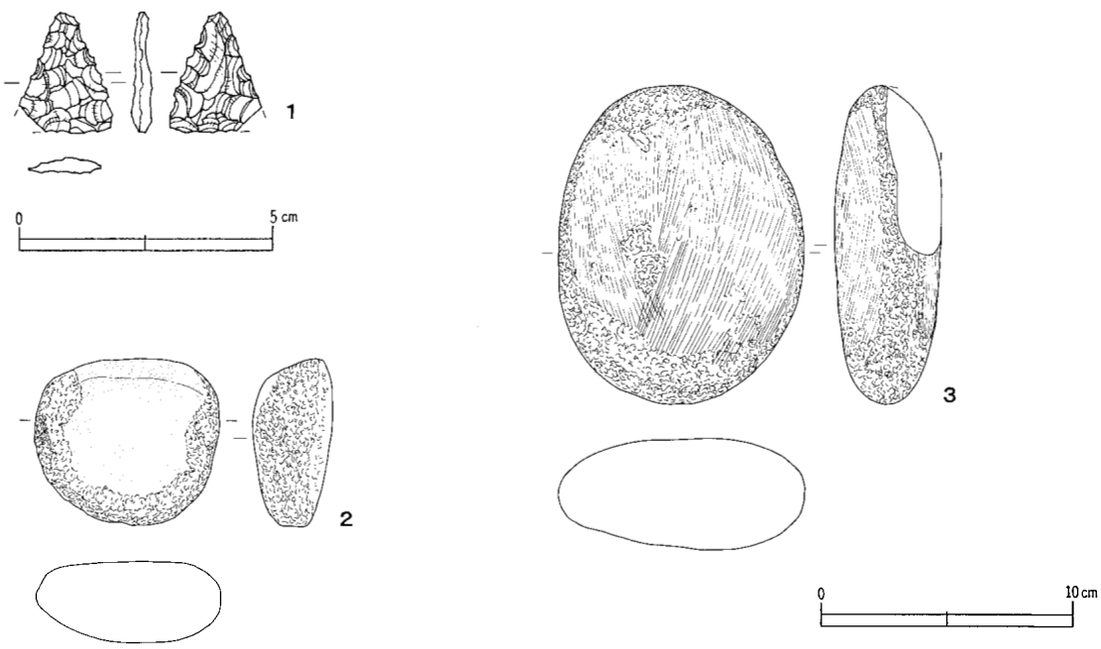
第24図　　第84号住居跡出土石器（1）



第25図　　第84号住居跡出土石器（2）

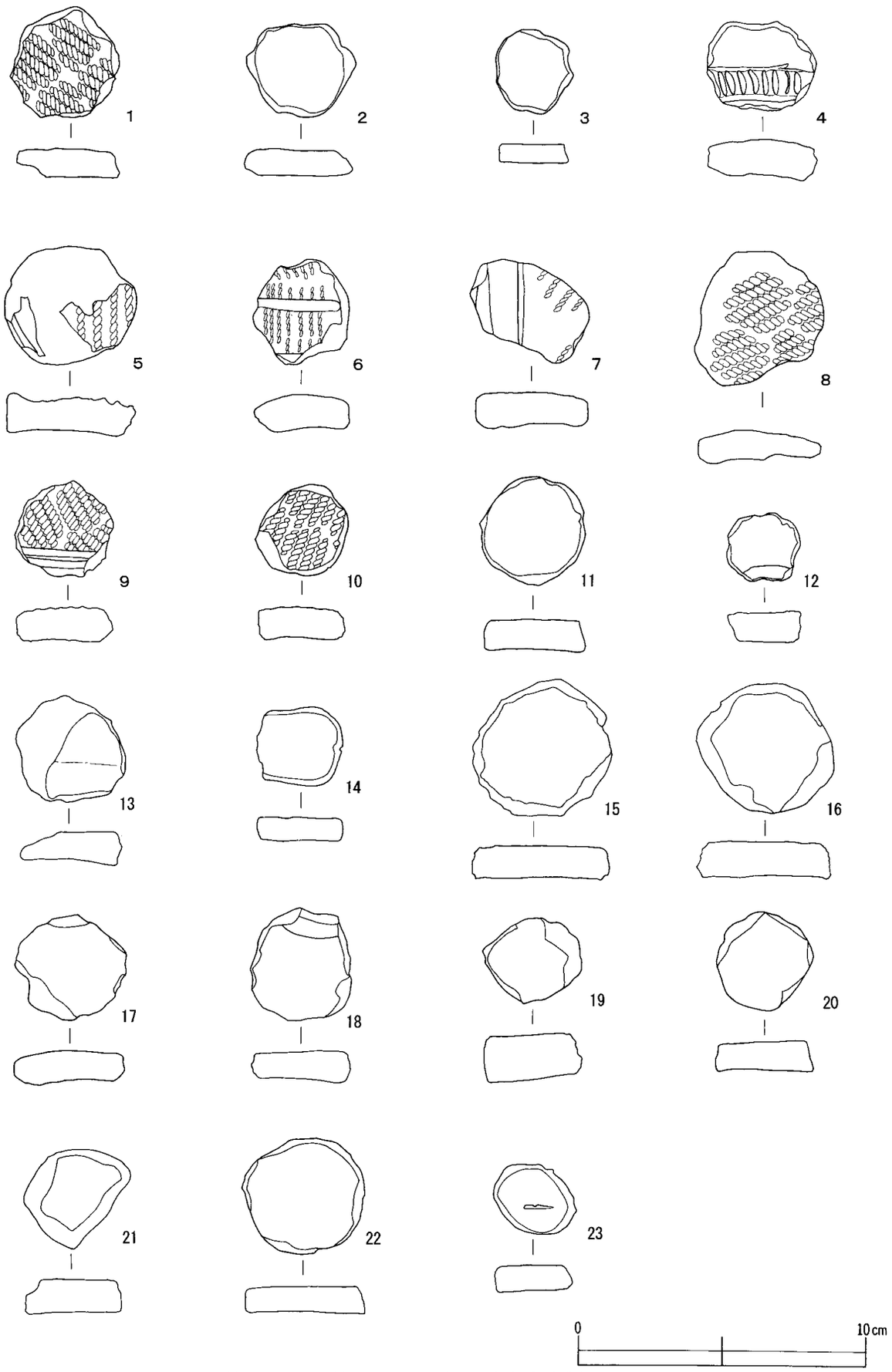


第26図　　第87号住居跡出土石器



第27図　　第89号住居跡出土石器

砂岩製。９は小型の打製石斧で、撥形を呈する。正面に自然面、裏面に主要剥離面を残す。両側縁の調整は周縁的であるが、敲打が念入りに施されている。刃部は両面加工の両刃、直刃。長さ8.6㎝、幅4.3㎝、厚さ2.6㎝、重さ107ｇ。チャート製。10は短冊形を呈する。正面に自然面、裏面には主要剥離面を残す。両側縁の調整剥離は周縁的で、敲打は線的に施される。刃部は片刃で、尖頭形に近い円刃である。長さ12.4㎝、幅4.2㎝、厚さ1.8㎝、重さ133ｇ。ホルンフェルス製。11は撥形を呈する。正面刃部周辺に自然面、裏面に主要剥離面を残す。両側縁の調整は周縁的で、敲打が加えられる。刃部は片刃で、形状は円刃である。長さ9.9㎝、幅4.5㎝、厚さ1.7㎝、重さ85ｇを測る。ホルンフェルス製。12は撥形を呈し、両面に主要剥離面を残している。側縁の調整剥離は正面左に顕著である。敲打は基部付近を中心に施す。刃部は両刃で、形状は円刃である。長さ10.2㎝、幅4.9㎝、厚さ1.4㎝、重さ73ｇ。ホルンフェルス製。13も撥形を呈する。正面の一部に自然面、裏面に主要剥離面を残す。側縁及び基部に周縁的な調整剥離が施され、合わせて敲打が加えられている。刃部は両面加工の両刃であるが、使用時の剥離の可能性もある。形状は円刃である。長さ12.9㎝、幅4.5㎝、厚さ1.7㎝、重さ123ｇ。チャート製。14は撥形を呈し、抉りが入る。正面に主要剥離面を残す。側縁部



第28図　　第81・84号住居跡出土土製品

の加工は抉り周辺に集中し、合わせて敲打が加えられる。刃部は両面加工の両刃で、形状は斜刃である。長さ8.9㎝、幅7.4㎝、厚さ3.0㎝、重さ191ｇ。ホルンフェルス製。15も撥形で、抉りが顕著である。正面基部付近に自然面を残す。両側縁の調整剥離は、抉り部を中心に施される。敲打は一部に認められる。刃部は両面からの加工による両刃で、形状は幅の狭い直刃である。長さ9.7㎝、幅5.2㎝、厚さ2.5㎝、重さ108ｇ。ホルンフェルス製。

16・17は磨製石斧で、いずれも破損品である。16は乳棒形で、基部を欠く。広範囲に敲打痕を残すため、再生品と思われる。残存長11.8㎝、幅4.6㎝、厚さ3.4㎝、残存重量279ｇを測る。緑色岩製。17は面取りが不明確であるため、乳棒形を呈すると思われる。破損により放棄されたものか、再加工の痕跡が認められない。全体に磨痕が顕著。残存長8.4㎝、幅6.3㎝、厚さ3.7㎝、残存重量256ｇ。安山岩製。

18～20は敲・磨石である。18は円礫を使用したもので、全周に敲打が見られる。表裏の平坦部には擦痕が認められ、中央に凹みが作出される。長さ14.3㎝、幅10.2㎝、厚さ6.2㎝、重さ1,320ｇ。砂岩製。19も円礫使用の敲・磨石である。全周に敲打が、一部に擦痕が見られる。長さ7.7㎝、幅7.4㎝、厚さ3.9㎝、重さ313ｇ。砂岩製。20は自然石使用の敲石である。全周に敲打痕が認められる。形状変更の調整は見られない。長さ15.1㎝、幅5.9㎝、厚さ3.0㎝、重さ422ｇ。砂岩製。

第87号住居跡出土石器（第26図）

第26図１・２は打製石斧である。１は短冊形を呈する。両面共、多方向からの剥離で構成される。両側縁の調整剥離は、大振りでやや粗雑である。敲打痕は認められない。刃部は両刃で、形状は円刃である。長さ11.5㎝、幅4.8㎝、厚さ2.1㎝、重さ175ｇを測る。ホルンフェルス製。２は撥形を呈する。正面に自然面、裏面に主要剥離面を残す。両側縁の調整剥離は周縁的であるが、裏面はやや大振りに施されている。側縁中央に敲打痕が顕著である。刃部は両面加工の両刃で、形状は直刃。長さ8.3㎝、幅5.3㎝、厚さ2.2㎝、重さ109ｇ。ホルンフェルス製。

第89号住居跡出土石器（第27図）

第27図１は石鏃である。形状は二等辺三角形の平基無茎で、正面左側をわずかに欠く。正面は周縁部からの押圧剥離が顕著で、裏面に主要剥離面様の大きめの剥離を残している。長さ2.4㎝、残存幅1.7㎝、厚さ0.4㎝、残存重量１ｇを測る。チャート製。

２・３は敲・磨石で、両者とも円礫を使用している。２は正面上部の以外に強い敲打が認められる。長さ6.7㎝、幅7.3㎝、厚さ3.2㎝、重さ210ｇを測る。砂岩製。３は全周に敲打が認められ、平坦部には両面とも擦痕が見られる。被熱痕跡あり。長さ12.6㎝、幅9.7㎝、厚さ4.2㎝、残存重量700ｇ。砂岩製。

土製品

土製円盤（第28図）

第28図には、第81・84号住居跡出土の土製円盤を示した。１～３は第81号住居跡、４～23は第84号住居跡から出土したものである。１・４～10は深鉢の破片を使用したもので、各々に文様が認められる。他は浅鉢の破片利用のものである。無文で胎土の粒子が細かい。他の事例においても、後者の方が多いようである。深鉢破片から勝坂式から加曽利Ｅ式が認められ、他の出土土器との矛盾は無い。

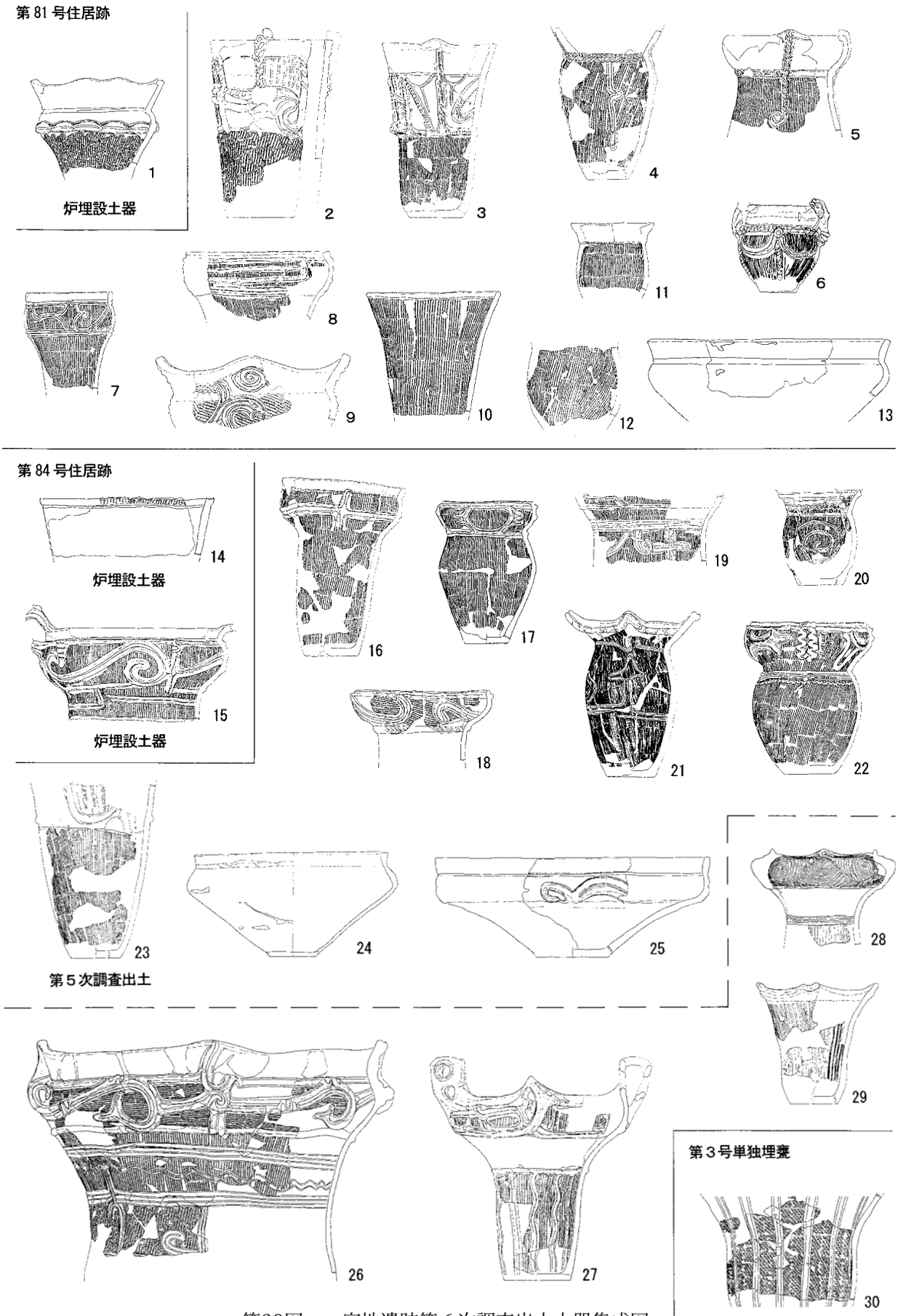
Ⅳ　まとめ

出土土器について

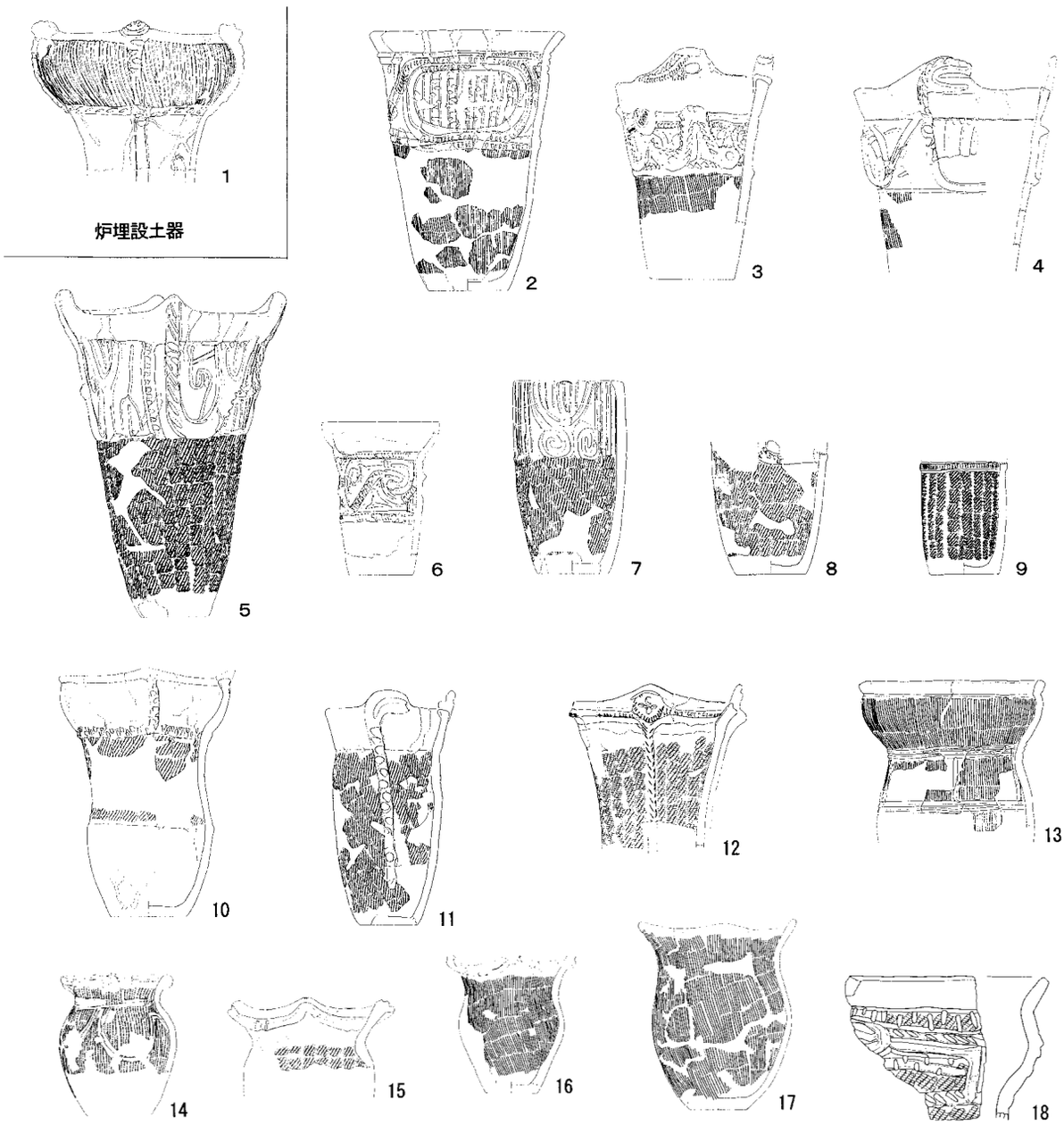
宮地遺跡第６次調査では、第81・84号住居跡で勝坂式最終末・加曽利ＥⅠ古段階の良好な一括資料を得た。各々の土器組成と個々の土器を詳細に観察すると、中期中葉から後葉への移行期に関わる問題が多々認められる。本項では、いくつかの問題点について言及し、本報告のまとめとしたい。なお、土器の縮尺は１/10（破片実測図は１/６）に統一し、番号はまとめ用に打ち替えている。

第29図は、今回報告の土器群を集成したものである。１～13は第81号住居跡出土土器で、１が炉埋設土器、他は覆土から出土したものである(註)。覆土出土の土器は、いずれも第一次埋没層形成後に廃棄されたもので、２～４、８は炉西側から西壁にかけて集中する。１の炉埋設土器は、勝坂式最終末のものであるが、器形、文様構成は中峠式に類似する。口縁部は一対の波頂部を持つ４単位波状の幅広無文帯で、球形を呈する口頸部中位に連鎖状隆帯を巡らす。勝坂式最終末には、連鎖状隆帯を口縁部に巡らしたり、文様の一部や文様帯下端の区画線に使用するものは多くの類例がある（谷井1992）が、口頸部中位から上位に文様を展開することから、勝坂式と言うより「中峠諸類型」の文様作法を採用したものと考えられる（下総考古学研究会1999）。２・３は武蔵野台地に特徴的な勝坂式最終末の円筒形土器である。２は直立する器形を呈し、縦位区画文類似文様を上半部に展開する。主文様である隆帯は背割沈線の手法により一部連鎖状となる。区画内充填手法は極度に簡略化し、粗い印象を与える。３は幅広の口縁部無文帯が外傾し、その直下に縦位区画文類似の文様帯を置く。２と同様、区画内充填手法は簡略化され、沈線化した三叉文や粗い集合沈線のほか、未充填区画も認められる。両者ともに、加曽利ＥⅠ式古段階に伴う円筒形土器の典型と言えるだろう。４は甕形土器である。口縁部は外反する無文帯で、口唇部から垂下する連鎖状隆帯と頸部から垂下し中位に棘状屈曲を有する１本隆帯を交互に配置する。頸部には綾杉文を巡らす。２・３と同様、勝坂式最終末のものであろう。５も勝坂式最終末の土器で、口唇部より垂下する隆帯や頸部に綾杉文を巡らすなど４に類するが、垂下する渦巻文は多喜窪タイプに類似し、胴下半部が膨らむ器形等、構成上６と共通点が認められる。６は曽利Ⅰ式土器である。櫛形文土器の胴下半部に無文の口縁部を付けたような構成を採用している。櫛形文接合部に円形貼付文を置き、綾杉文を付加した隆帯を垂下させる。また、櫛形文区画外にも粗い集合沈線を充填する点で、在地的と言えよう。なお、２単位の把手は残存部から動物意匠文と考えられる。現在のところ、市内では典型的な多喜窪タイプの土器はほとんど認められず、５・６のように本来のタイプから変化した土器が多く見られるのも宮地遺跡周辺の特徴と言える。

１～６の土器については、勝坂式最終末及びその手法を色濃く残す、所謂在地系の土器と言えるが、７～９は趣を異にする。７は、口縁部文様に横Ｓ字文と十字文を配するキャリパー形土器で、加曽利ＥⅠ式古段階のものであるが、２本組隆帯による文様作出を基本的な特徴とする同段階の土器に対して１本隆帯で文様が作られる点で異質である。また、隆帯脇にはくっきりとした沈線を引くという点では勝坂的と言えよう。８は加曽利ＥⅠ式古段階のもので、クランク文を持つと考えられる。９は、破片であるが、大木８ａ式土器で３段階区分の中あるいは新段階のものである（塚本1997）。波頂部直下の渦巻文は粘土紐を貼り付けたのみで、隆帯脇処理がなされない大木８ａ式の手法を採る。また、地文も本地域に主体的である撚糸や単節ＲＬではなく、単節ＬＲを使用している。ただし、口頸部渦巻文の隆帯脇に沈線を引き、在地土器の手法を採り入れている。



第29図　　宮地遺跡第６次調査出土土器集成図



第30図　　丸山遺跡第５号住居跡出土土器

大木８ａ式は加曽利ＥⅠ式成立に関係し、その文様手法は中峠類型にも大きな影響を与えているが、本例のように大木８ａ式に近似する例も散見される。なお、若干の時期差が認められるが、類似例が本遺跡第26号住居跡（未報告）や嵐山町行司免遺跡第91・268号住居跡から出土している（植木1988）。10～12は撚糸地文の粗製土器である。13は勝坂系の浅鉢であるが、本住居跡からは破片出土が多く、復元に至る個体は認められなかった。

14～29は、第84号住居跡から出土した土器群である。16・17・21・22・24は出土層位が明確で、第４層下位から出土している。14・15は炉埋設土器で、14は勝坂式最終末、15は加曽利ＥⅠ式古段階のものである。14は、円筒形あるいは甕形を呈すると思われるが、詳細は不明である。15は球状の口頸部に、横Ｓ字文とそれに連結するＪ字文を２本組隆帯により各２単位置き、連結部には十字類似文を挟んでいる。部分的に交

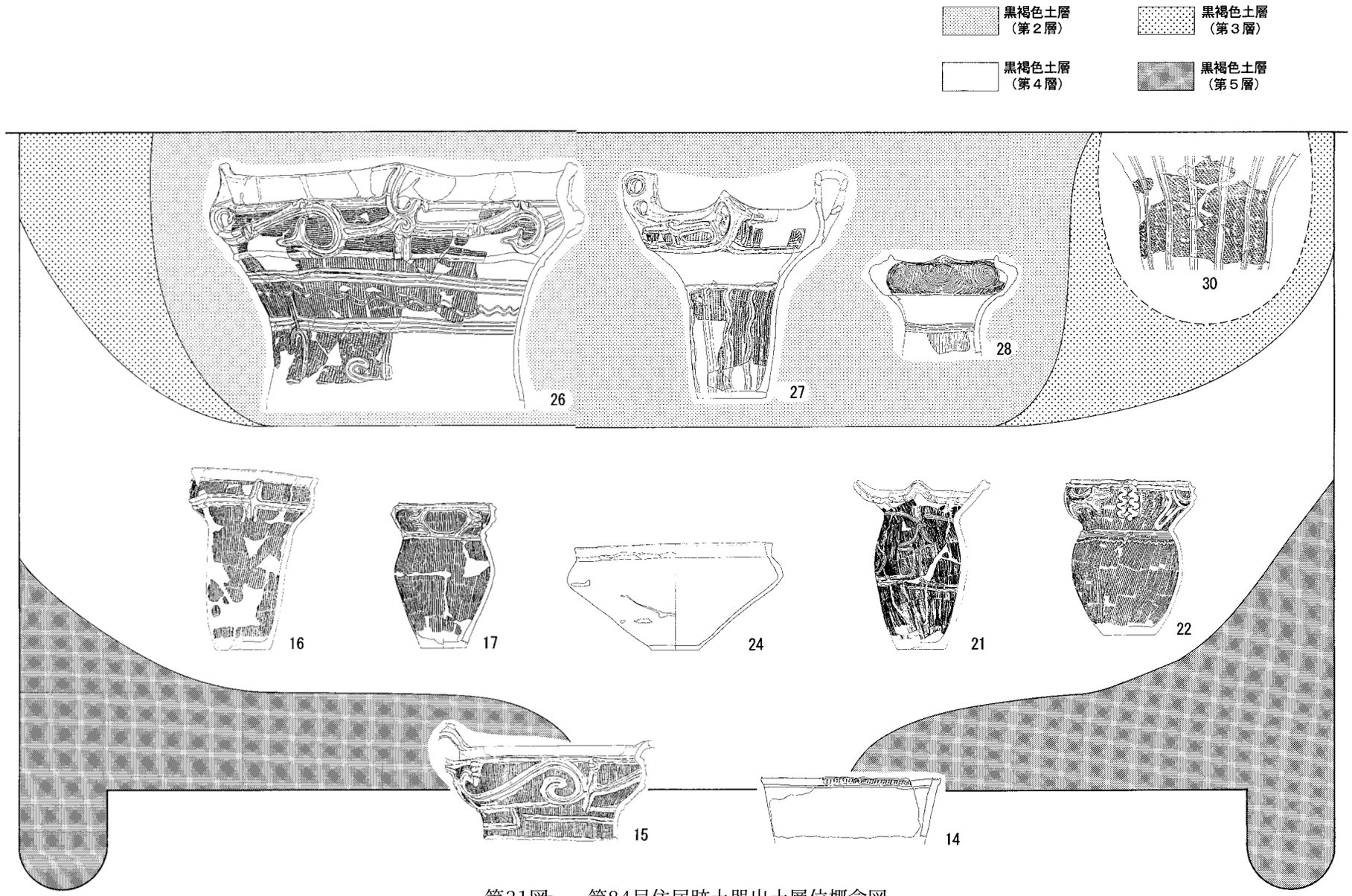
互刺突文等が見られ、勝坂式の要素も認められる。隆帯脇処理は擦り付けたような痕跡を残すのみで沈線は伴わない。頸部直下及び胴部には、半裁竹管重複施文の３本沈線で格子状文、波状沈線文を施す。これらの文様作出手法から、大木式的な要素が強い土器と言えよう。16は加曽利ＥⅠ式古段階の土器に類するが、口縁部文様帯下端区画線を持たない点で加曽利ＥⅠ式とは言い難い。また、隆帯脇処理は15と同様、ナデ付けのみで大木式的な様相が強い。17の口縁部文様は勝坂式の楕円横帯区画文に似るが、器形は大木式を思わせる。18・19は加曽利ＥⅠ式古段階の土器で、18は区画隆帯上に刻目を施し、勝坂式の要素を残す。19の胴部文様は半裁竹管を使用せず、単独沈線で描いている。20は、口縁部が不明確であるが、21とともに東関東系の土器と思われる。勝坂式最終末・加曽利ＥⅠ式古段階の組成にしばしば加わることが知られている。20の器形が一般的で類例が多く、21のような縦長の器形は稀と言える。両者とも半裁竹管の平行沈線により文様を描出するが、前者は重複施文で３本沈線の渦巻文、後者は２本沈線の釣針状と槍先状のモチーフを交互配置する。22は様々な要素が入り混じった特異な土器である。器形は大木８ａ式に類似するが、口縁部文様の３本指のモチーフと上下対弧文の組み合わせは、勝坂式文様構成原理を背景に持つ３単位構成を採り、勝坂式最終末的な要素が強いと言えよう（金子2001・2006）。主文様間の充填文も、また勝坂的である。突起より垂下する２本の蛇行隆帯は、貼付後の処理が認められず、曽利式的な印象を与えている。これらの文様はいずれも地文施文後に作出されており、加曽利ＥⅠ式古段階の錯綜した様相が看取される。23は第５次調査出土したもので、勝坂式の円筒形土器である。文様帯下端区画線が断続的な沈線で描かれ不明確となっており、充填文の粗雑さからも最終末の所産であることが明らかである。24・25は勝坂式の浅鉢で、24は16・17・21・22と同一層から出土している。

26～28は、第２層中から折り重なって出土した。また、29は出土層位が不明確ながら、同時期のものと思われる。26は加曽利ＥⅠ式古段階の土器で、他の土器とは時期差が看取される。口縁部文様は横Ｓ字文を基本とし、２本組み隆帯というより背割り沈線に近い様相を持つ。また、文様上部区画隆帯とＳ字文中央には交互刺突文を施している。胴部は半裁竹管の重複施文で多段の文様帯を描いている。27は下総型の深鉢で、加曽利ＥⅠ式新段階のものである。大小の多孔把手を各２単位配する。頸部には無文帯を持つ。28は27と同時期の重弧文土器で、胴部の充填文は29に共通する。ここで問題となるのが、26の処遇である。27～29は明確に加曽利ＥⅠ新段階とすることができるが、26については口縁部文様の一部に勝坂的な要素や、胴部文様の手法など一段階古い要素が多々認められ、系統差を鑑みても27と同一段階とすることはできないだろう。ただし、26は大形品のわりに薄手で、焼き上がりも非常に脆く焼成時の失敗により廃棄されたと考えられ、27・28との出土状況から時間的に近接している可能性がある。従来、加曽利ＥⅠ式土器は前段階の勝坂式などに比べて地域差が少ないとされてきたが、近年多系統に亘る変遷が明らかとなっている。26のような系統が次段階まで残るのか否か、今後は各系統の消長を再確認するとともに、類似例を猟渉、集成し、組成内での系統別の量比や文様手法の補完関係を検討していく必要があろう。

組成の比較

前項では各住居跡出土土器と組成について概略を述べたが、主体となるのは勝坂式最終末・加曽利ＥⅠ式古段階の土器群である。ここでは、第81・84号住居跡の土器群と、同一時期と考えられる丸山遺跡第５号住居跡出土土器群（第30図）の組成を比較する。

丸山５号住は罹災住居と思われ、一括廃棄された土器群は17個体である（石塚2003）。炉埋設土器と覆土



第31図　　第84号住居跡土器出土層位概念図

廃棄土器群の同時性については、丸山報告で検討しているため、そちらを参照していただきたい。組成は、１が炉埋設土器で、広義の多喜窪タイプ。口縁部に縦位の半裁竹管重複施文を充填している。２～９は勝坂式最終末の円筒形土器で、加曽利ＥⅠ式古段階にしばしば伴うことが知られている。縦位区画文類似文様、区画文、対弧文等が施されるが、充填手法は該期に即したもので、宮地81号住出土土器（第29図２・３）の様相に酷似する。10も多喜窪タイプの一つで、胴下半部の器形は櫛形文土器に似る。11は粗い蛇体装飾が４に類似する。12は出自不明であるが、隆帯上の刻目は勝坂式の手法である。13は胴部の文様描出手法から、大木８ａ式に関連すると思われる。14～17は東関東系の４単位波状口縁の土器で、14は大木８ａ的である。また、胴部文様は半裁竹管重複施文で描かれ、同じ手法が宮地84号住出土土器（15・20・21）に多用されている。18は中峠類型で、台耕地34住型と思われる。これらの中で特に注目すべきは、７で加曽利ＥⅠ式古段階に伴う勝坂系円筒形土器の典型とも言えるものである。毛呂山町まま上遺跡で加曽利ＥⅠ式古段階の土器と伴出した好例がある（金子前掲）。また、５の突起から垂下する隆帯文は多喜窪タイプ由来のもので、１に酷似し両者の同時性の根拠となる。以上のことから、丸山５号住の一括土器群は明確な加曽利ＥⅠ式古段階の土器を組成に含まないが、文様手法上も同時期と考えられ、同じ理由から宮地81・84号住とも同時期と考えることができよう。

以上、宮地81・84号住及び丸山５号住出土土器の組成について、若干の検討を加えた。ここでまとめるならば、宮地81号住の土器組成は、中峠類型、勝坂系土器、加曽利ＥⅠ式古段階に非在地系の土器を含む組成であるが、主体となるのは円筒形土器に象徴される勝坂系土器と言え、その点では丸山５号住の組成に似る。また、宮地84号住の時期は、炉埋設土器と第４層出土土器群をもって勝坂式最終末・加曽利ＥⅠ式古段階に位置付けられるが、その組成は81号住と大きく異なる。主体となるのは大木８ａ式の文様手法の色が濃い加曽利ＥⅠ式古段階の土器で、勝坂系土器は少ない。ただし、第29図22・23の土器の存在や文様描出の手法の類似性から、この相違を時期差に還元することはできないと思われる。丸山５号住の組成で見たように、当該期は様々な型式や手法が錯綜する段階であり、そうした多様性が異なった組成を生み出す主要因となっているのである。現在、様々な報告でなされている集落の時期区分については、勝坂式最終末と加曽利ＥⅠ式古段階を、時間差をもって認識している場合が多い。これは組成の偏りと型式差からの誤認であり、時間的には同一時期とするべきと考える。様々な組成を検討する上で、出土状況、住居型式、土器の器形、文様手法等、多方面から同時性を見極めていく必要があろう。

第84号住居跡の土器出土状況について

第31図は、第84号住居跡出土土器について、出土層位が明確なものに限定して概念化したものである。遺物番号は第29図に準ずる。

本住居跡で遺物を多く包含する層は、第２層から第４層である。ただし、判例に示したとおり、いずれも黒色の強い層で明瞭な色調の違いがない。分層の根拠は第５図に示したが、ここで再度確認すると、第２層は炭化物が多く、遺物包含量も他層を凌駕する。第３層は第２層に類するが、ほとんど遺物を含まないため、その量比で分層した。第４層は炭化物含有量が第２・３層より少なく、焼土が部分的にまとまる。第５層以下は、広がりや壁からの傾斜の状況から通常「第一次埋没層」と理解されるものであるが、上層よりローム含有が多いながら、他の事例に比して色調変化が少ない。土器が一括廃棄された住居跡は多くの場合、第一次埋没層が多量のロームを含み、周堤の埋め戻し土とする説が提示されている（山本1978）。筆者も、丸山報告で第

２・５号住居跡の出土事例について検討した結果、これを支持し、炉埋設土器と一括出土土器の同時性の根拠とした（石塚前掲）が、丸山例については第一次埋没層と一括土器包含層の色調の差が明確で、本例とは土層形成過程が異なると思われる。すなわち、住居廃絶、遺物廃棄の一連の行為の中に周堤埋め戻しがなされず、漸移的に埋没したと解するべきであろう。ただし、炉埋設土器（14・15）と第４層出土土器（16・17・21・22・24）が型式学的に同時期であることから、下層形成にはそれほどの時間はかからなかったと思われる。また、第２層出土土器群の在り方も、本住居跡が完全に埋没するのに一型式の期間を要したことを示し、漸移的な埋没の可能性を支持している。遺構の埋没過程については、個々の遺構で考えるべきであり、その多様性の解釈について方法を鍛えていく必要があろう。

〈註〉

第81号住居跡については、遺物出土状況図、遺構セクション図を作成していたが、調査担当者の不注意により廃棄されてしまった経緯がある。そのため、出土状況及び層位に関わる具体的な図面を提示できない。本章の記述は調査当時の所見と、写真から判断したものである。

〈引用・参考文献〉

石塚和則　1997　『宮地遺跡第５次調査』　狭山市埋蔵文化財調査報告書10

石塚和則　2003　『丸山遺跡』　狭山市遺跡調査会報告書　第13集

植木　弘　1988　『行司免遺跡』遺物図版編　嵐山町遺跡調査会報告５

金子直行　2001　『まま上遺跡』　埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告第242集

金子直行　2006　『中野遺跡』　埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告第322集

下総考古学研究会　1999　「特集　中峠式土器の再検討」　『下総考古学』15

鈴木敏昭他　1983　『台耕地（Ⅰ）』　埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告第27集

鈴木保彦　1982　「勝坂式土器」　『縄文土器大成』２中期

芹沢清八他　1987　『御城田』　栃木県埋蔵文化財発掘調査報告　第68集

谷井　彪　1977　「勝坂式土器の文様構成について」　『埼玉考古』第16号

谷井　彪　1987　「加曽利Ｅ式土器における口縁部文様と形態の系譜」『柳田敏司先生還暦記念論文集　埼玉の考古学』

谷井　彪　1992　「富士見市鶴瀬出土の勝坂式系土器について」『埼玉県立歴史資料館　研究紀要』第14号

谷井　彪・細田　勝　1997　「水窪遺跡の研究」　『埼玉県埋蔵文化財調査事業団研究紀要』13

塚本師也　1997　『浄法寺遺跡』　栃木県埋蔵文化財調査報告　第196集

富元久美子他　1998　『加能里遺跡第16・20・21次調査』　飯能の遺跡（25）

三上徹也　1986　「中部・西関東地方における縄文時代中期中葉土器の変遷と後葉土器への移行」『長野県考古学会誌』51

村田章人　1997　『原／谷畑』　埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告第179集

山本暉久　1978　「縄文中期における住居跡内一括遺存土器群の性格」　『神奈川考古』第３号

和田晋治　1990　「羽沢遺跡第40号住居址の一括出土土器」　『埼玉県富士見市遺跡調査会　研究紀要６』

写　真　図　版

図版－１

第81号住居跡全景

第81号住居跡調査風景

第81号住居跡遺物出土状況

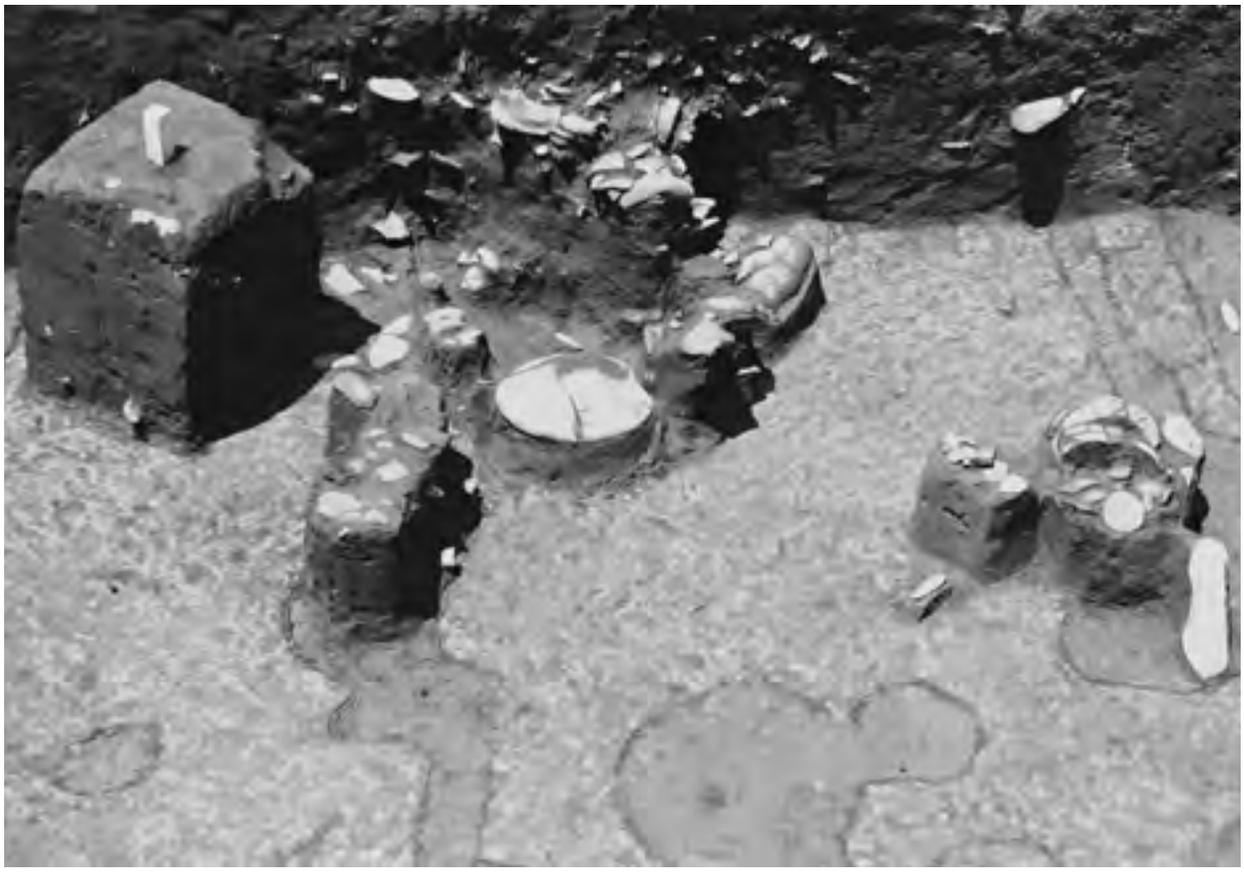
第81号住居跡炉跡

図版－３

第84・88号住居跡全景

第84・88号住居跡調査風景

第84号住居跡遺物出土状況（1）



第84号住居跡遺物出土状況（2）

第84号住居跡遺物出土状況（３）

第84号住居跡炉跡

第87号住居跡全景

第87号住居跡炉跡

第89号住居跡全景

第89号住居跡炉跡

第81号住居跡（第10図１）

第81号住居跡（第10図２）

第81号住居跡（第10図３）

第81号住居跡（第10図４）

第81号住居跡（第11図５）

第81号住居跡（第11図６）

第81号住居跡（第11図７）

第81号住居跡（第11図８）

第81号住居跡（第11図９）

第81号住居跡（第11図12）

第84号住居跡（第14図１）

第84号住居跡（第14図２）

第84号住居跡（第14図３）

第84号住居跡（第14図４）

第84号住居跡（第15図５）

第84号住居跡（第15図６）

第84号住居跡（第15図８）

第84号住居跡（第15図９）

第84号住居跡（第15図10）

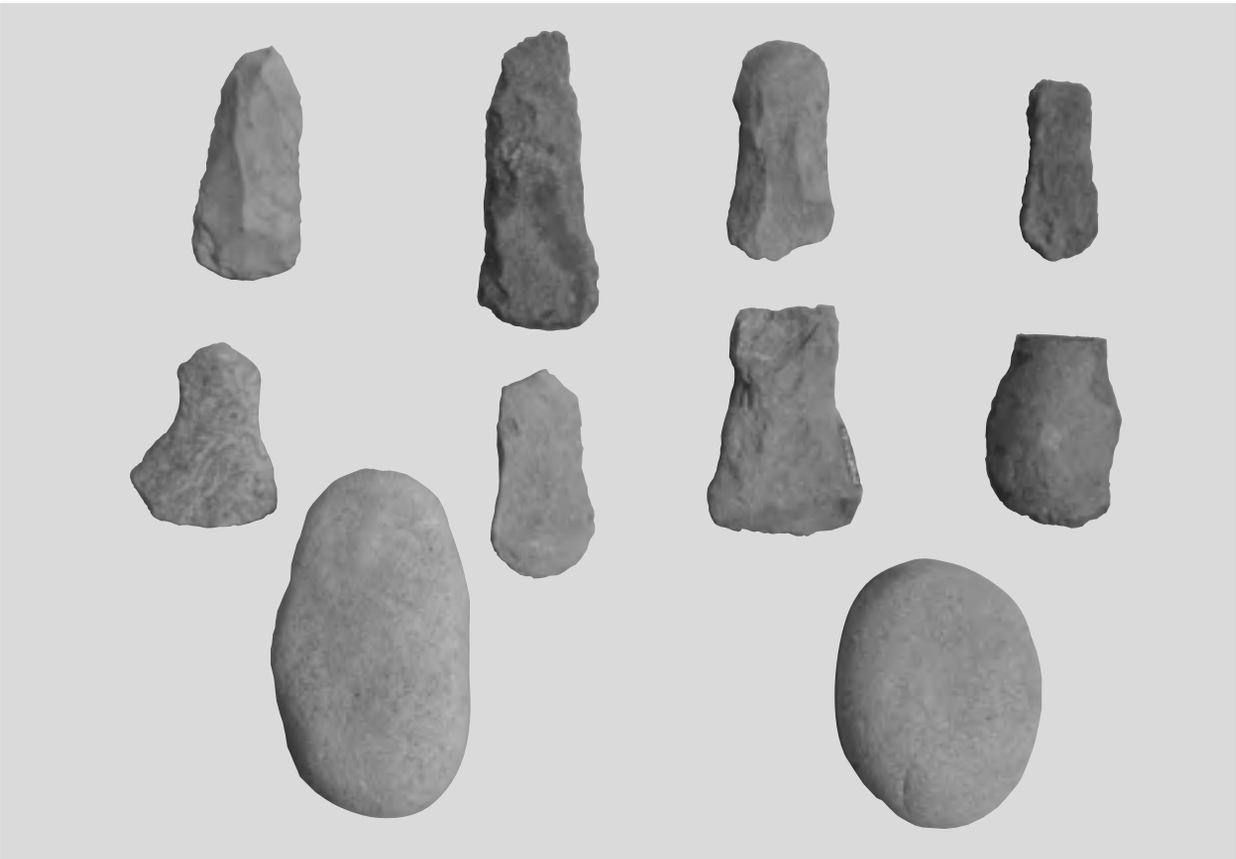
第84号住居跡（第16図11）

第84号住居跡（第17図12）

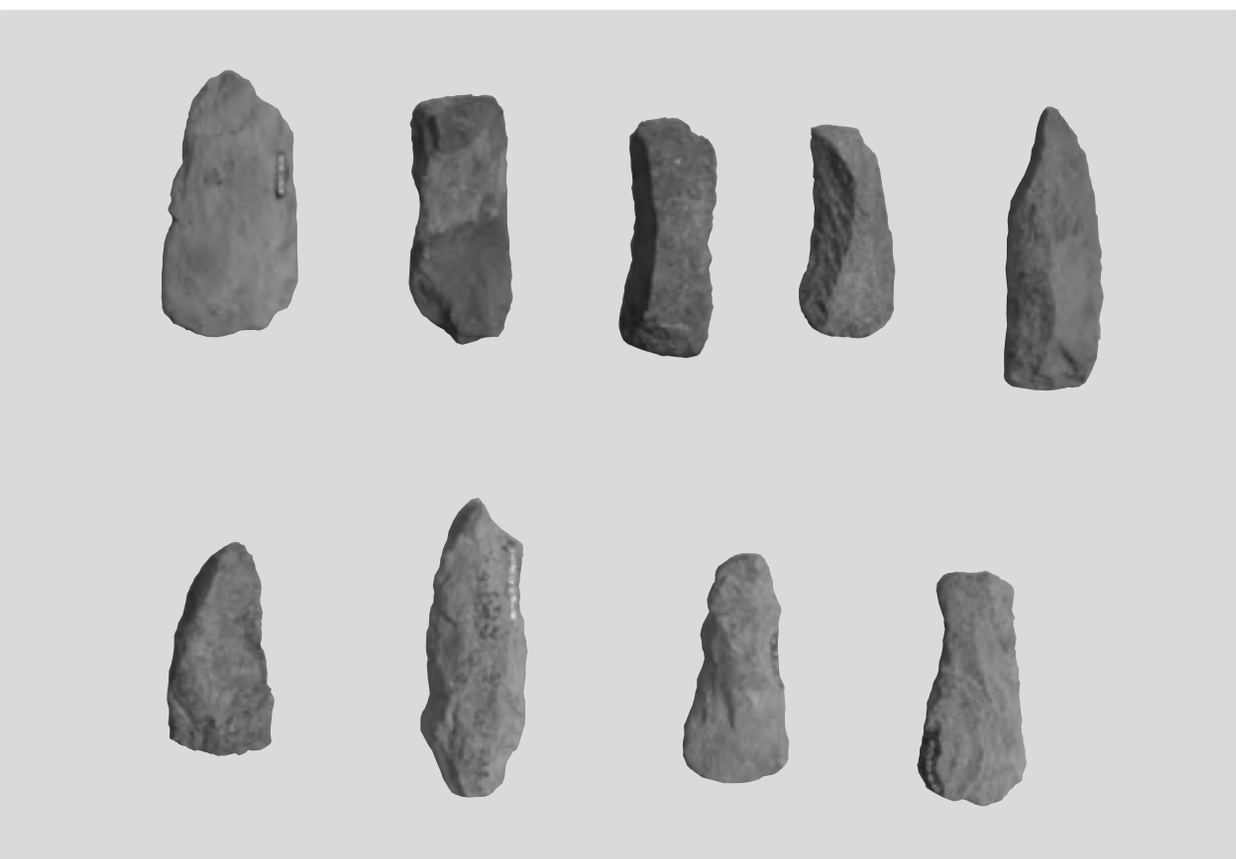
第84号住居跡（第17図13）

第84号住居跡（第17図14）

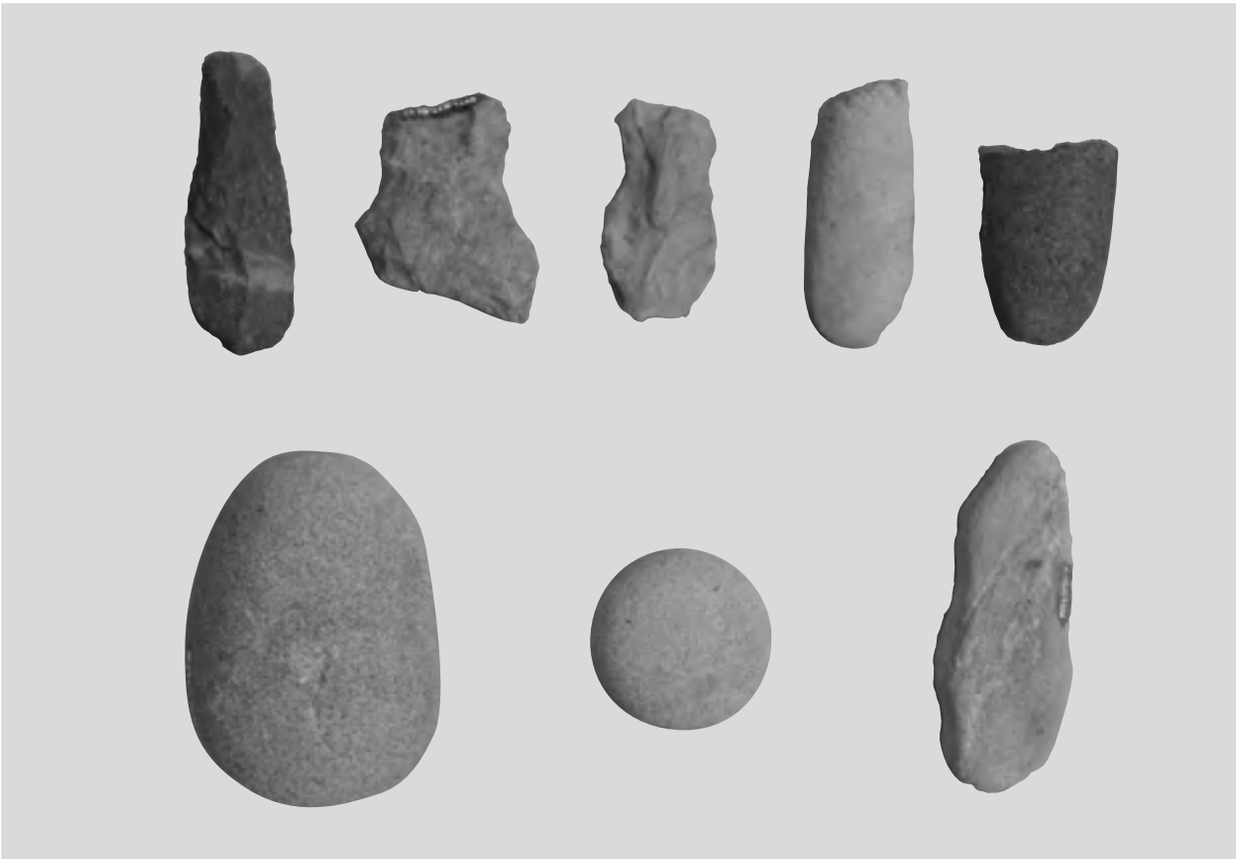
第３号単独埋甕（第18図16）



第81号住居跡（第23図２～11）

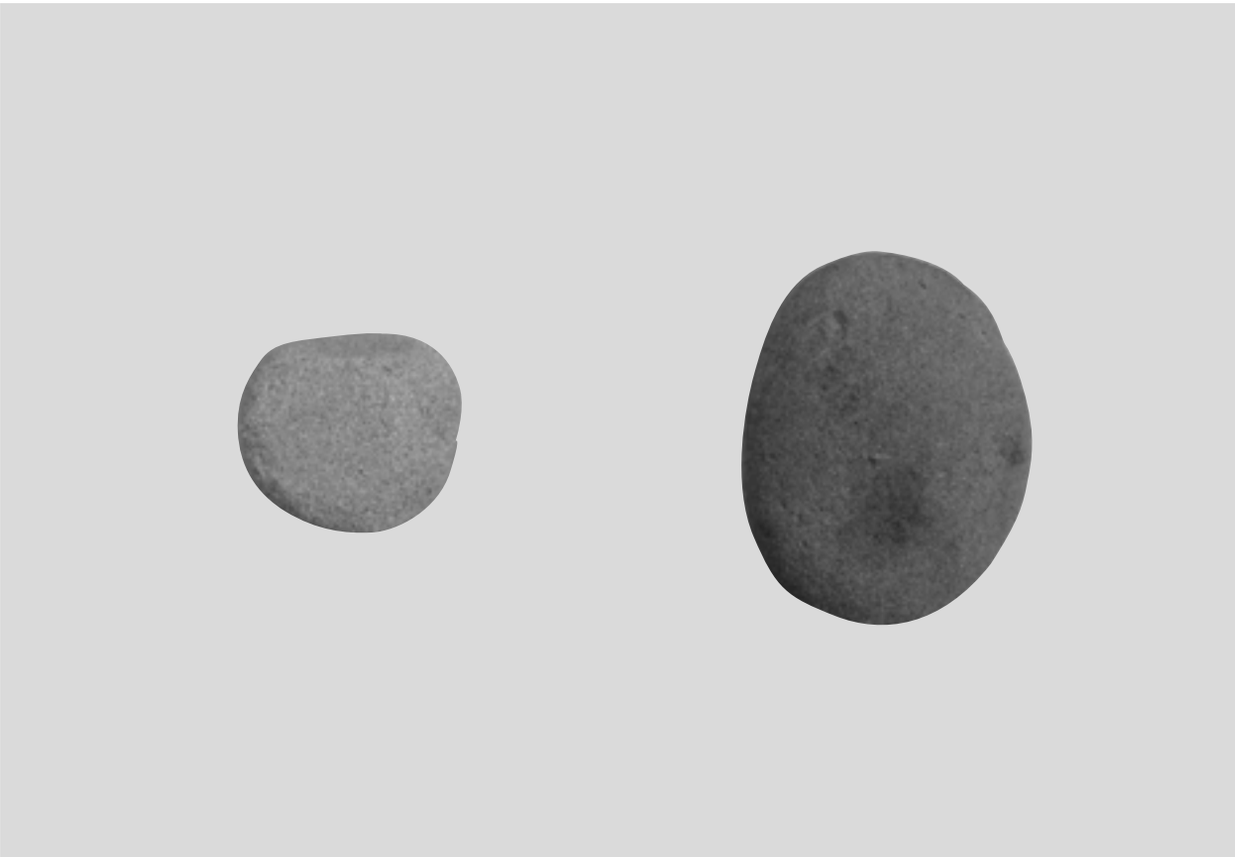


第84号住居跡（第24図４～12）

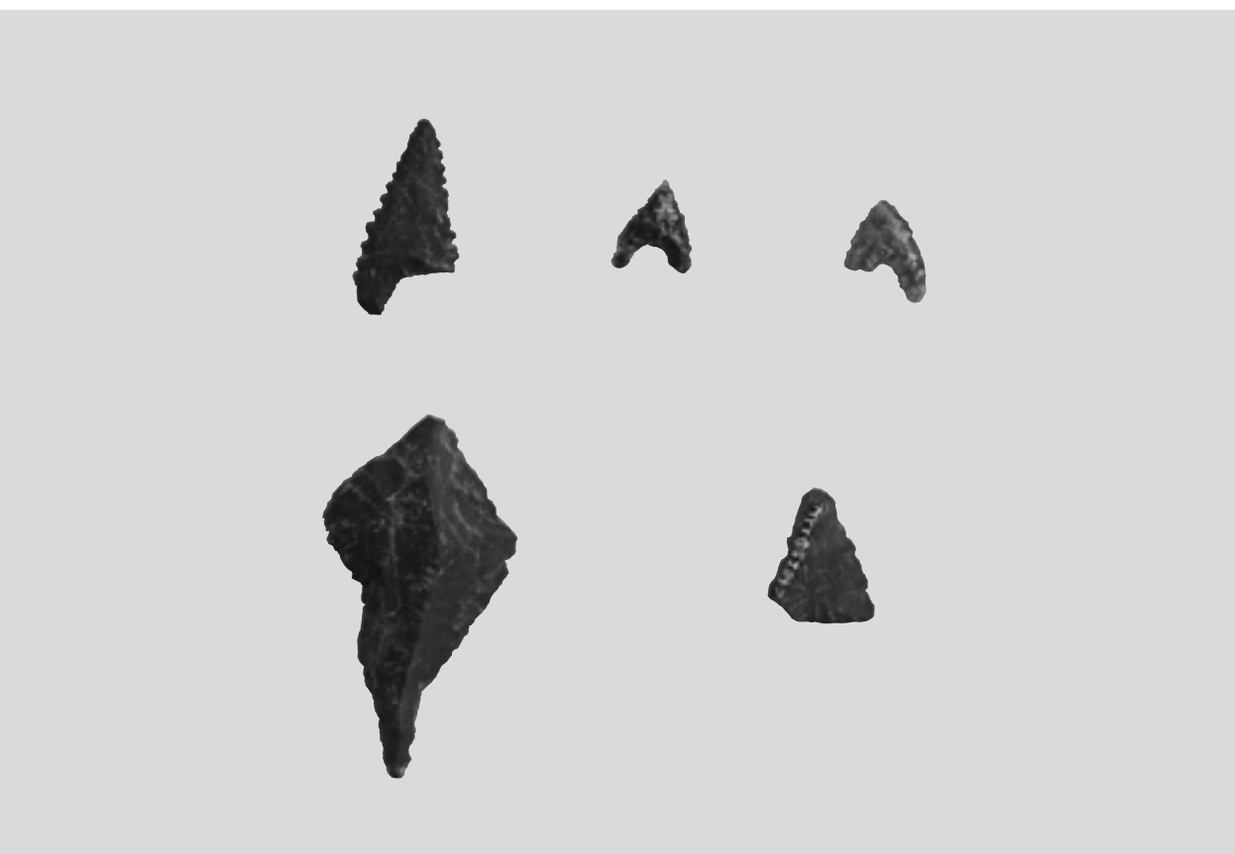


第84号住居跡（25図13～20）

第84号住居跡（第26図１・２）



第89号住居跡（第27図２・３）



小型石器（第23図１・第24図１～３・第27図１）

報　告　書　抄　録

ふりがな	みやちいせき　だい６じちょうさ
書名	宮　地　遺　跡　第６次調査
副書名	個人専用車庫建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	狭山市文化財調査報告　第26集
シリーズ名	狭山市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	15
著者氏名	石塚和則
編集機関	埼玉県狭山市教育委員会
所在地	〒350－1380　埼玉県狭山市入間川１－23－５　　TEL04－2953－1111
発行年月日	西暦2007（平成19）年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号	° ′ ″	° ′ ″			
みやちいせき 宮地遺跡	さいたまけんさやましおおあざささい 埼玉県狭山市大字笹井 あざみやちうえ 字宮地上1677番地３	22	18	35°51′16″	139°22′17″	20010618 ～20010815	101	車庫建設に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
宮地遺跡	集落跡	縄文時代 奈良・平安時代	竪穴住居跡　５軒 土壙　２基 単独埋甕　１基	縄文時代中期 土器・石器	縄文時代中期前半の良好な一括土器群が出土した。

狭山市文化財調査報告　第 26 集
狭山市埋蔵文化財調査報告書　15

宮地遺跡　第６次調査

― 個人専用車庫建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 ―

平成 19 年３月 20 日　印刷
平成 19 年３月 30 日　発行

発　行　　埼玉県狭山市教育委員会
　　埼玉県狭山市入間川１丁目 23 番５号
ＴＥＬ　　０４（２９５３）１１１１

印　刷　　有限会社　ミネ五十子印刷

【正誤表】
宮地遺跡第6次調査報告書
（狭山市文化財調査報告　第26集）

ページ	行	誤	正
5ページ	11 上広瀬上ノ原遺跡	22005	22007
	48 上中原遺跡	22025	22039
	49 中原遺跡	22025	22038